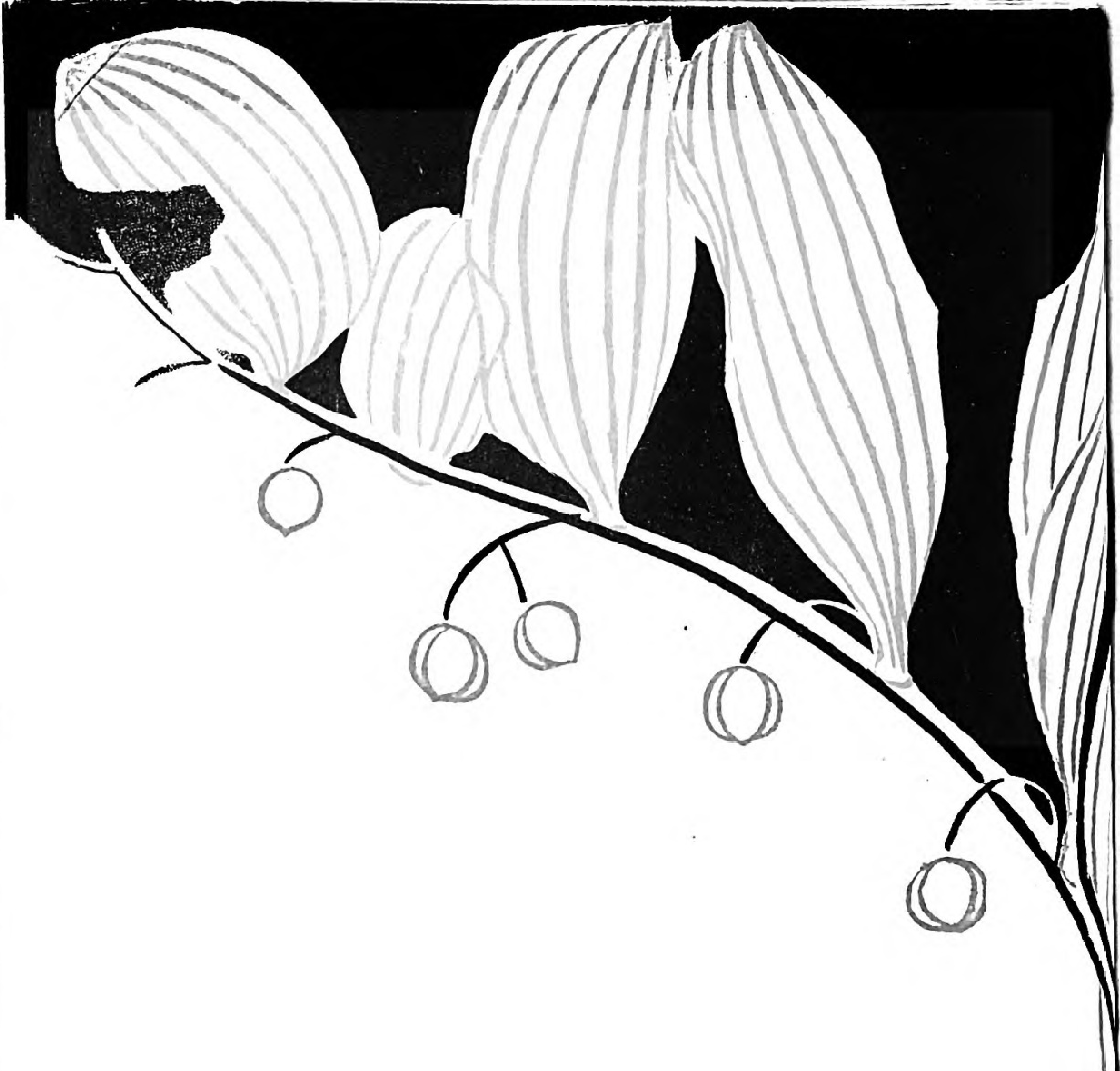


青鞜

一月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十五年一月一日

第二卷第一號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜 第二巻第一號 目次

おきな(小說)……一……加藤緑
女のうた(詩)……二一……茅野雅
さすらひ(小說)……二五……木內錠
初空(俳句)……四六……白雨
「寒山拾得」と「お七吉三」(劇評)……四八……しぐれ
夢(詩)……五三……與謝野晶
我れ死なば(歌)……五五……柳清美
その日(小說)……五七……田村とし

附錄 ノラ

社員のノラ批評及感想
人形の家より女性問題へ……六三……葉
イプセンの「人形の家」……一一五……みどり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「人形の家」を讀む……一二六……君
ノラさんに……一三三……H
「人形の家」に就て……一四三……Y
〰〰〰〰
「人形の家」(評論)……一五六……ジエンネットリー
舞臺の上で困つた事……一六三……松井須磨氏談
「人形の家」に似た劇曲……一六四……無名氏
「人形の家」(評論)……一六七……バーナードショウ
編輯室より……一七一……編輯係

挿繪目次

Paula Somary a „ Nora"
松井すま子のノラ
" a doll's house," act 1.
文藝協會の人形の家、二、
Agnes Sorma als „ Nora"

一切の否定者なる我れは一切の肯定者なり。
植物を、動物を、人間を食ひて我が靈は榮ゆ。
神なる我れは人なり、女なり。

――らいてう――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Paula Somary
a "Nora"

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おきな

加藤 籌

一

K村といふ海近くの漁師村に、小體な別莊風の古い家があつた。主人は七十幾つかになる何處か孔子の木像でも見るやうな風采の爺さんである。白い疎らな長い髯が胸の邊まで垂れて、其れを扱きながら小聲に漢詩を口吟むのが癖であつた。適には戶外(そと)へ出て盆栽なども弄つて見る。職業はと聞くと、或時は俺は儒者だと答へ、ある時は詩人だとも言つた。翁の一番嫌ふのは人から書家だといはれることで、そんな時には極つて「誤つては困る。書は餘儀なく賣るが、俺は儒者だ。書家なそと云ふなら、寧ろ詩人といつて貰ひたい。」と言つた。家族は翁の年老いた妻君と、三十五の大年增を頭に三人の娘があつた。

中古(ちゆうこ)の端手な鶸色羽二重の三紋の羽織に白足袋を穿いて、太い自然木の杖を曳きながら、朝早く翁は墓參から歸つて來た。これは一日も欠かさぬ翁の大切な日課で、「弟の奴等は金ばかり貯め込んで、親の墓參りもロク〳〵せんが、私(わし)は貧乏でもチヤント親の墓側に住ん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て毎日茶湯をして居る。これは私の本願だ。」と心から滿足さうに言つて人にも話した。框を上ると、何時も陣取る古い長火鉢の前に寛たりと坐つて、支那風のヒネつた土瓶から晩茶を湯呑にうつして飲んだ。
「お京、お墓の花が枯れたぞよ。」と翁は茶の間の妻君に言つた。
「然うかね。ぢや又何かと代へて來ませう。」
六十近くとは受取れぬほど聲も姿も若々しいオツトリした顔立の妻君て、何うかすると翁の娘位にも見えたが、翁は婆あ〳〵と呼んだ。
翁は何時もの通り、墨に汚れた赤布を二つ折に敷いて、其上に紙を展べ、鐵製の大きな文鎭を置いた。
「多々へ、今日も墨磨を賴むぞよ。」
「阿父さん、最う御飯にしますよ。」と中娘のお多年が言つた。
「然うか。」翁は素直に眼鏡を外して、茶の間へ來た。孫の佐久雄が「祖父やん〳〵。」と膝へ來る。翁は抱き上げて、
「うむ、今朝は泣かずに起きたな、豪い。さあ佐久、昨日の詩を歌つて祖父さんに聞かせぬかい。」漸と四つになる佐久雄は記憶がよかつた。祖父から毎日子守歌のやうにして敎は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る漢詩を片言まじりに暗誦じた。

「車をとゞめて坐に愛す楓林の晩……」

「豪い、それから？」

「霜葉二月の花よいもくえなゐない……」

「豪い〳〵。」

翁は佐久雄を無上に愛した。翁の肩にとまつて、小さい口から崇拜する古人の詩を歌ふのを聞くと、翁は身も魂も融けて行くやうに、目を細くしてゾク〳〵喜んだ。豪い〳〵と褒めては佐久雄の頭を撫でた。

佐久雄は中娘のお多年が或る禪寺へ嫁づいて生んだ一人限りの翁の孫で、父親の坊さんといふのは、佐久雄が生れる少し前、行方知れずに何所へか行つて了つた。

「妻子を捨てゝ逃亡するやうな愚人の手に育つより、俺の所へ來た方が、佐久は結局幸福だ。」と翁は言つた。お多年の身の上については別に考へてやるのでもなく、愛孫の母親として當然傍にかうしてゐる筈の人のやうに思つてゐる。お多年も來年は三十になる。行末の事など時折考へて、不安で〳〵ならぬ事もあるが、大抵はこれもケロリとして、翁の墨磨りと子の守をしてウカ〳〵と暮してゐる。お多年の上にはお節といふ姉もある。三十五

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にもなつて、いまだに婿取りもせず、嫁にも遣らず、下女兼乳母といつた調法な役まはりをさせて、家の道具にこき使つてゐるに、それでも、嚴格な翁の娘ほどはあつて、浮いた名一つ立てられず、不滿らしい顔もせず、甲斐〲しく家内中の世話焼きをした。

翁は朝飯が濟むと、又火鉢の前へ來た。佐久雄は翁の傍へ來て、何時ものやうに紙きれや本など引散らかして玩弄にした。

「筆紙の玩弄は怪我が無くて可い。」と翁は言つた。自分の傍に置いて、かういふ風に育てれば、自然と學問好きになるだらうと翁は思つた。

お京は箸を措くと其まゝ後片付けもせず、立つて次の間の鏡臺の前へ坐つた。白髮の一筋づゝまじつた小さな丸髷を丁寧に撫で付けながら、末娘のお三巴を呼んだ。

「三いさん、お支度を爲ないかい。」

「えゝ。」と返事ばかりして、お三巴は起上らうともしない。今朝來た新聞の續き物を讀み耽つた。

「何をしてるの。姉さんはお前の髮を結はうと思つて、洗ひ物もせずに手を空けて待つてるぢや無いか。」今度は大姉のお節が突慳貪に言つた。

「姉さん、トウ〱令嬢が殺されるのよ。殘念ね。」と言ひながら、お三巴は大儀さうに立

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて來た。もう一度其れを言つたが姉は「そんな物何うだつて可いぢや無いか」と言つた。「よく彼方向いたり此方向いたりする頭だねえ」だの「自分にシナを爲なくつても結ふ人に目がありますよ。」だのとお節が文句をいふと、お三巴も毛が引張るの、氣持が悪いのと小言をいつて、小半時間もかゝつて漸く恰好の好い庇髮が出來上つた。

お三巴は父親肖で、顔よりも髮の美しい娘であつた。

お京は着物を着て了ひ、長火鉢へ來て一服つける。翁が小聲に詩を推敲する傍に、お多年は佐久雄をあやしながら大硯の墨を磨つた。

母親は銘仙の羽織に同じ着物、お三巴も銘仙物の荒い柄の着物に、お納戸がゝつた小紋紬の被布を着て、二人は揃つて家を出た。毎朝かうして二人を出して了ふと、お節はホッとした。

やがて翁は筆をおろして五絕の詩といふのを半折に書いた。クル〳〵ツル〳〵と草體の續き文字が蔓草の絡まつたやうに紙の上に鮮かに浮くと、翁は筆を擱いて、ジッとそれを眼鏡越しに眺めた。

二

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

門先きに佐久雄を遊ばせてゐたお多年が慌てゝ入つて來た。
「阿父さん、お客樣。」
「誰だ。」
「東京へ行らしつたお靜さん。」
「ほう。珍らしいの。」翁は眼鏡の歪みを氣にして直しながら入口の方を見やつた。
女客は此時もうお多年の背後に立つてゐたので、お多年が「さあ何うぞ。」と身を引くと一しよに「御免下さいまし。」と顏を出した。
「おゝ〳〵、お珍らしい、さあお上り。」
客は小供の時分翁に書道など敎はつたことのあるゝ、今はある醫學士の妻であつた。
「御免下さいまし、何うも大變御無沙汰を致しまして。」
「お互ひで　……まあ御達者で何よりだの。」
「先生にもお變りなくて御目出たう御座います。」
「齡長けれは恥多しで、御目出たいだか何だか何うも……」翁はお多年に座蒲團など薦めさせて、火鉢の横の茶棚から新しく煉香を取下して火鉢に焚いた。例のヒネつた土瓶の茶も進めた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「何時お歸りだ？」
「一月ほど前に………尤も今度は都合上此方らへ居つく事になりまして。」
「おゝ〳〵然やうか。それでは御主人もの？」
「はい、一緒でございます。」
「それはまあ何より結構だ。私も貴方が東京へ行かれてから、急に寂しくなつて、詩を作つても字を書いても、見て貰ふやうな會心の友は無し、娘どもは皆鈍物で、テンで文字の話は出來ずしの、誠に樂みが無かつたが……然やうか、それは可い事だ。」と翁は喜んだ。客は然うして喜ばれるほど嬉しくも無かつた。
十年以前の小娘と今日の客とは全て顏も境遇も變つて了つて、ある時は凡人と思へぬほどに崇敬もした此翁を、今は却て憐むやうな心さへ生じてゐた。翁が昔の自分と今日の自分とを同じやうに思つてゐる其事すら不思議のやうに思はれた。
見慣れた翁の先生の畫像も、昔のまゝに壁にかゝつた。翁が殁琴々々と呼ぶ床の間の古琴も、簞笥も戸棚も火鉢まで昔に變るものは一つも無かつた。十も年上の姉娘まで相變らずの獨身だものと客は思つた。
筒袖着の甲斐〳〵しい姿をチラ〳〵見せて、臺所を出たり入つたり、忙しさうに動いてゐ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たお節も其中に挨拶に出た。見かはすばかり老けた其顔を見ると、客は傷ましくてならなかつた。若い時には相應に緣談の口も其處此處あつたのを、翁の理想に合ふやうな婿もなくて、そのまゝグズ〳〵に暮す内、お節の顏には用捨なく小皺が出來た。四十を見かけた老孃の血の氣の薄い黃色い顏！女客は悲慘だとも氣の毒だとも思つた。

お節の調子は快活で、

「私の此の身裝を見て下さい、おさんどんだつて最う少し何とかしてゐますわね。ほゝゝ、私が恁ういふ風ですから、母までが乳母どん〳〵て申ますの。」こんな事を言つて笑つた。

客は何か自分の幸福を見せびらかしにでも來たやうに思はれはせぬかと、妙に省みられた。客はお節の言葉に氣が付いて、

「今日は阿母樣は？」と聞いた。

「母ですか、母は此節貴方、三巴と二人で出稽古を初めましてね。」

「矢はりお琴の方の……まあ然やうでございますか。」

「彼等にゝ稼いで貰はにや、私の筆一本ぢや豪いてね。」と翁は口を噤んで「はあはあ」と應揚に笑つた。

「御笑談でございます。お三巴さんもさぞ好い娘さんにお成りなさいましたでせうね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「えゝ〳〵、好い娘でございますとも、ほゝゝもう貴方十七になりますけれど、カラねんねえて爲方が有りません。お婿さんまで極りましたのに。」とお節は言つた。

客は、翁が昔から末娘を異に鍾愛して、二人の姉は身裝でも何でも全てお供か下女のやうであつた事を思ひ出した。三十越えた處女(むすめ)の姉と、若い亭主持の妹と……客は翁の偏頗(かたおち)を思はずには居られなかつた。定めし翁も二人の姉に懲りてとあらうとは推せられたが、其眼鏡に適(かな)つた男といふのは何ういふ人か、とそんな好奇心も起した。客は土産物を出してソツと姉娘の前へ押し遣ると、初めて今日來た用向きを話した。

「今日突然御伺ひしましたのは、實は私どもが此方へ住みますについて、實父(ちゝ)が光らぬ普請をしてくれまして……まだ出來上りにはなりませんけれど、これまでの御緣もありますし、私どもの爲めには初めての何でございますから、何か先生に家の號といふやうなものを撰んで頂きたいと、然う存じまして……」

「あ、然やうか。」と翁は少時考へてゐたが、何とか適當な字を撰んでおかうと言つた。

「靜さん、私の此の五棄の詩を見て下さい。これは私の心持を歌つたもので……五棄といふのは產を棄て、名を棄て、望も棄て、私が世間といふものを棄てたから、世間も私を棄てたと恁ういふのだ。何うだね、たゞ得る所は父母の墓側に住んで朝夕の茶湯をする—

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

―つまり孝の終りを得たといふので。」かう言つて、翁は長い髯を扱きながら、小聲に其詩を論じた、客は面白いと答へたものか、結構だと褒めて可いかとそんな事ばかり考へながら、翁の聲に從いて分りの悪い紙面の字を追つてゐたが、翁の聲が切れても、適當な言葉が見付からなかつた。翁も強ひて客の言葉を待つのではなかつた。やがて客は、翁が得意の一絶を書いた女持の扇子を貰つて、歸つて行つた。

三

翁は此四五日休み無しに扇面やら半折やら澤山書いた。今日も昨日の書き殘りを朝から書いて、お午頃には可なり書けた。翁は紙數を計へて筆を擱いた。

其處へ郵便が來た。手紙は此間の女客からので、開けて見ると、此間參上して御邪魔をしたお詫びやらお禮やらの後に、昨日御送り下すつたお願ひの品は、御詞といひ御書といひ私は大變結構に拜見いたしましたが、主人があゝいふ難かしやですから、最う少し何とか工夫は無いかと申してゐました。こんな事を申上げるのは誠に失禮ですけれども、悪しからず御許し下すつて、今一枚外に御書きが願ひたいといふ意味が書いてあつた。

翁はちよつと眉を寄せたが、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「はゝ若い人が……。」と微笑して、其のまゝ其事を顧みもしなかつた。

午後はB町へ行くのだつたと氣が付いてお多年の給仕で午飯をソコ〳〵に濟ました。書き物を幾つかに小さく疊んでメレンスの風呂敷に包み、龜作といふ毎もお供に傭ふ漁師の爺さんを連れて、B町まで二里の道程を、健脚にまかせてボツ〳〵歩いた。太い杖を曳いた角袖外套の翁の後から、筆硯やら何やらゴタ〳〵塡め込んだ藤編みの手提鞄を肩に、尻端折の龜作爺さんがつゞいた。

B町へ入つたのは、冬の日のもう暮れるに間も無い四時頃であつた。

昨日あたりから、北の方一帶の峰つゞきに白い物が見え初めた。メッキリ寒くなつた空風が煙のやうに白い砂埃を揚げて、兩側の町家の暖簾をバタ〳〵煽つた。

「寒い埃だのう。」翁は毛絲の手袋を箝めた手を額にかざしながら言つた。

「堪らねえのし。」鼻の先を眞赤にした龜作爺さんが、水洟を啜りながら答へた。

翁の町へ出るたび定宿にしてゐる須賀屋といふ砂糖屋がある。二日三日、何うかすると一週間も泊まつてゐることがあるので、翁の部屋といふものが取つてあつた。

「寒くなつたの。」と翁は門口から聲をかけた。

「大層お寒くなりました。よくまあ御出掛けて。」キリヽとした染齒の四十餘りの神さんが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

愛想よく迎へた。

「佐助さんはの？」

「此節又貴方、體を損じまして……」

「寝てか？其れは悪いのう。」

荷物を二階へ運んで置くやう亀作爺さんに命じて「又出るのも臆劫だで私は一寸出て來ると神さんに言つて、翁はブラリと戸外へ出た。

四

小三十分も經つた頃、翁の姿はある横町のカル、ス温泉の湯舟の中に見えた。翁は町へ出れば必ず此温泉へ毎日入つた――潔癖といふばかりで無しに翁は全く温泉の功能を信じてゐた。健康なにも係らず、至つて體を大切にする人で、從つて食味などの方はナカ〳〵開化してゐた。西洋料理なども取つて食べた。

翁が目を閉ぢてジット湯に浸つてゐると、

「先生お久し振りですね。」と聲をかけた男があつた。翁は驚いて目を開いて見ると、

「おゝ久内さんか、暫くだのう。」とニコ〳〵した。此湯で何時も會ふ人であつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「何時此方へ。」

「たつた今。何うも貧乏暇無して、此頃しばらく出んかつた。此間お靜さんが見えての、此方へ居つくやうな話しだつたが、品衞さんもまあ一安心だのう。」同浴の人が六七人、中には翁の顏を知つたものもまじつたが、翁の一風ある樣子や物言ひに聞耳欹てゝ、言合したやうに皆押默つてゐた。

「然うです。弟も今度は貴方、珍しく奮發して普請しました。」

「さやうか。餘ほど立派な何かの？」

「何有貴方些つとしたものでござんすが、それでも婿の好み通りにはしましたので。」

久内は幾らか自慢さうに恁う言つた。

其處へ新しく入つて來た六十ばかりの奇麗に禿げた飄輕さうな爺さんが、翁の顏を見て言葉を掛けた。

「やあお揖先生！」

「甚太さんか、御達者で可いの。」

「お前さんよりや、これで十ばかり若いので。はゝ、又商ひかの。」甚太さんは、B町でも口が惡いて通り者になつてゐる。翁も其れを知つて、大抵の無禮も此人だけには咎立てし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なかつたが、商ひかと言はれたのは、餘まり好い心持て無かつた。苦い顔をして、復た久内に話しかける。

「此頃靜さんが見えての、私に家の號をつけてくれと言はれたが……」

「品徹さんの普請か。豪く手廻しが可いの。だが先生ナカ〳〵好い普請だぜ。」甚太さんが横鎗を入た。

「さやうかの。安居は高堂を架するを用ゐず、書中自から黄金の屋ありと云ふから、立派な普請も要らぬ事だて。」

「だが先生でも好い家に住むのは悪かあるまい。」

「茅屋一間、膝を容るゝこと三尺に過ぎん、の、今時の若い人は兎角表面ばかり飾りたがるて困るての。」翁は嘆ずるやうにかう言つた。久内も苦笑ひして聞くより外無かつた。

「然し出來上りの上は、何れ先生にもお出てを願ふでござんせうから、其節には是非……」と久内が上り際にお愛想を言ふと、

「何うせ招待はされるだらうが、私は行くまいよ。些と私の主義とは違ふて。」と翁は素氣なく言つたが、

「それでの、久内さん、私に家の號をと言はれたものだて、私は御夫婦兩方の姓の字を取

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて、藤栗園とつけた、藤井の藤と、栗野の栗さ。の、それが氣に入らぬとつて小言だつた。ナカ／＼若い人の氣に入る事は難しいての。はあはあはあ、栗千樹を植うれば子孫富むと書物にもある、又藤の花は冕旒花といつて、天子の冠の周圍に垂れ下てあるもの……其れに擬へたものだ。耳を掩へども無聲に聞き目を掩へども無形に見るといつて、明君の德を表はすものが此の冕旒さ。又藤の杖は老を扶ける、いはば孝子の德にも擬へて見られる。こんな樣な意味から付けたのだが、………面白くないともいふ言だ。弱るての。」

「然うでしたか、それは何うも……」久內は曖昧な返事をしてソコ／＼上つて了ふた。翁は何となく物足りなかつた。

「先生も何だね、本の講釋は旨いか知らんが、貧乏には閉口だの。」甚太さんが代つて對手になる。

「學者は皆貧乏だ、が、目に見えぬ無形の產がある。一字千金二千金と菅原にも言うてあるぢや無いかの。はあはあはあ。」

「そんな價うちが有るか知らんて。私は先生の書いた物より札ビラの方が可い。」

こんな會話を與ありさうに聞いてゐた周圍の五六人がこの時クス／＼と笑つた。

「然うさの、私も金は惡くはない。」と翁も寂しさうに笑つて言つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

湯の早い甚さんは、
「欲の無いばかりが能でも無いて。」と捨臺白を言つて、御ゆつくり。」と出て行く。
翁はナカ〳〵の長湯てあつた。對手がなくなると、又眼を閉ぢてジツと温まつた。
「爺さん湯氣にても揚らなきや可いが。」と蔭口を聞くものもあつた。
同浴の人が一人減り二人減り、大抵新しい顔になつた頃、翁は漸と湯舟から出た。茹て蛸のやうに眞赤になつた、年寄にしては肉附の好い大きな體を水槽の前に運んで、手拭を濯ぎ出してゐる處へ、後から鼻唄で出て來た若い男が水を汲む拍子にシタヽヽ飛沫をかけた。
「馬鹿野郎！禮を知らぬか!!」
翁の權脈が激しかつたので、若い男は言句も出ず、コソ〳〵と上つて了つた。流し場では
「ナカ〳〵豪い爺さんだ。」
「豪氣な勢だな。」などと呟くのが聞えた。
翁は爪先まで眞赤に染めて、好い心持に温泉の淺黄暖簾を出た。

五

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

翁は宿の方へ向つて一町ばかりも來かけたが、フと「品備さん所へ寄らうか」といふ氣になつて、其處の四辻から横へ切れた。

「靜さんはおゐてかの？」門口から恁う言つて入つた。お靜は母親と一しよに夕飯のお膳立てをしてゐたが、それと見ると、急いで出迎へた。お火よお蒲團よと騒いて、兎も角も翁を座敷へ接じた。丁度時刻でもあるので、有合せの物で御膳も薦めた。

「御主人はおゐてか？」と翁は聞いて、

「先達のはお氣に入らんかつたと見えるの。」

「は、何だか主人が面倒くさい事を申まして。」とお靜は氣の毒さうに言つたが、翁が御主人にお目にかゝりたいと言ふので、離れから夫を呼んで來た。

「おゝ、これは始めて……」翁も丁寧に兩手をついて挨拶した。

「靜さんは私の一番氣に入りの弟子での、何うか貴方も御同様御心安く。」

「よろしく何うぞ……」

翁と二つ三つ話しもしたが、故事や引例の多い翁の談は、若い初對面の人を面食はせた。

「先日のあれが何うお氣に入らんかつたの？」と翁が聞いた。

「氣に入らんの何のといふのではありませんが、もう少し意味は淺くても、我々素人の好

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きさうな、字面の美しい語路の好いのをと思ひまして、甚だ失禮でしたが……」
「然やうか。字面の美しい、語路の好い……難しい事だての。又考へておきませう。はあはあはあ。」翁は話を轉じて、
「お普請もダン〳〵御進行ださうなの。いづれ庭園もといふやうな何も、お考へも有りませうの。庭の木がお入用なら些と位は進げても可い。車でも寄越して下さりや、譯は無いて。」
とそんな事を言つた。木らしい木も無かつたやうだとお靜は思つたが、
「有がとう、是非どうぞ。」と夫の眞面目に禮を言つてゐるのを見ると、變な氣がして口元を歪めた。
機會を見てお靜の夫は起つた。離れへ歸ると、お靜を呼んで毒付いた。
「何だいあの横柄な爺は。あれが本當の腐儒といふのさ。あれがお前の大事な先生だから呆れるよ。藤栗園とは奇拔ぢやないか、實に考へたものだね。いや考へても我々ぢや到底も其處までは考へ及ばんよ。藤栗園は近來の珍話だ。笑談言やがれ、あれが儒者かい、詩人かい、馬鹿〳〵しい。」お靜は表座敷へ歸つたが、夫の今の陰言を思ふと、顔を見るのも氣の毒だつた。翁は面白さうに品衞と話をしてゐた。
「それから宮家（みやけ）へ伺つて揮毫したが、有栖川を有西川と書いたので、宮樣が不審された。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たしか書きましたた積りですがと言つて、私の書いてゐたお廊下まで來て見ると、チヤンと板緣の上に木扁が落ちてゐたゞてね。え〻？面白いぢやないか。若い時には私も色々な事が有つたよ。」

「はあ………面白うごすな。其處らが全く聖人てごすな。」と品衞も調子を合せた。

「處が、此節は私も慾聖人になつて、聖人の道ばかりも奉じてゐられんやうになつた。はあはあ、淺ましいと思ふが、かういふ世になつちや、それも是非無い。時に品衞さん、これは矢ばり慾のお相談だが、何うだらう………」

「はあ？」品衞は迷惑さうな顏をして。

「何てごすな。」

「明日些と貴君に賴みたい事が有る。」

「何てごす。」

「六枚折を一双分賴みますぜ。」と翁は言つた。品衞は魚膠も無く、

「一體書き物は困るほど澤山有るし、それに私等が見ちや善いも悪いも分りやせんで、欲しかありませんが………」と、むづかしげに眉を寄せて、煙草を燻したがお靜の義理に絡まれて、トウ〳〵買ふことに極めたのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二三日過ぎて、翁は三十圓ばかりの金を懐にして歸つた。
翁は安心するとガッカリ疲れて、翌日一日は硯も持出さず、詩を作る事も休めて、日向りの好い明るい障子際に炬燵を仕掛けて、ウト／＼眠つた。
ふと一家の運命といふやうな事から、自分達夫婦の若い頃の事が胸に浮んだ。自分は其頃有名な〇〇先生門下の秀才で、妻は相當な幕臣の一人娘に生れて多藝多才の才媛であつた。五十年前の秀才名媛は、今日文を賣り藝を賣らねばならぬ惨な老夫婦になつた。其間に生れた娘の中二人は齢更けて夫も無い。末娘は妙齢の身空て、母を扶けて音樂の出教授！翁も自分を憐まぬ譯には行かなかつたが、其れは長くは續かなかつた。やがて例の五藥の詩を口吟んで得意の笑を浮べた。

――完――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女のうた

茅野雅

一

君はなほ夏の鳥の如く
樂しげに淺はかに歌ひ給へば、
我が苦しみも涙も
蒼白き頬も知るに由なからむ。

況して我が背負へる十字架を、
『子』といふ重き黑き荷を、
降りつもる雪を、赤き我が素足を、
如何て知り給はむ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

恐らく永久に知り給はじ知らむともし給はじ、
君は男にて我は女なれば。

實に戀は男に快樂を歌とのみ與ふれど
我等には盡きざる苦みと、子と、涙と、
それより生るる新しき眞の大なる生命を
もたらしぬ。女こそ、ああ、戀を讃ぜめ。

二

夕ぐれの心を如何に云ひ出てむ
この女のみ感じ得べき或ものを。

遠き地平に消えてゆく光の微動と
しめれる土より、沼より湧き出づる霧の匂を、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我等が細き皮膚ならて
何物かよくわかち得む。

また見えそむる星に、水の皺に、
我が長き黒髪に響き出づる
この妙なる歌を如何に云ひ出てむ。
あはれ夕ぐれのこころを。女の秘密を。

三

言葉には云へざる故に默すを、
なほ語れとせめ給ふや、

廣く大なる世界より
我等が感ずるものは、

大方かく妙に細かければ
男も知る粗き言葉には云ひ難し。
あはれ君の女ならましかば。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さすらひ

木内錠

○

芝居ももう跡三日となつた。お互に又何時一緒にならうとも分らないから紀念に寫眞を取つて置かうと誰かゞ云ひ出して直ぐ町外れの寫眞屋へ電話を懸けた。

泣き出したいやうな糠雨の降る陰氣な日で、山國の故か嫌に爪先の底冷えする朝で有つた。毎晩の夜更かしが適而に祟つて、寐不足な瞼が云ひ合はしたやうに妙に腫れぼつたく、どれも是もひしやげた様に元氣のない顔ばかりをズラりと寒い風吹きに並べた。

もう彼是霜月と云ふに寫眞機を擔い込んで走せ付けた寫眞屋は未だフラネルを着て居る、青つぽい縞目も朧ろな薄垢染みたものでデクデク肥えた體の前がともすれば仕舞なくはだかつて、煮染めたやうな三尺が始終解け懸つて居た。

爺むさい髯むくたらの顔に目を失くなして笑ふと氣になる程揃つて缺けた前歯の根がきたならしく顯はれて、ドス黒い歯莖も氣味が悪かつた。雨の降る中を御苦勞様とわざ〳〵樂屋裏の稻荷の社の傍へ綠臺や醤油樽や何かをかつぎ出して背の低い者はそれに乘つたりな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぞした。

手傳ひも連れずにやつて來た寫眞屋は一人して、あつちこつちと目の廻りさうな程、あくせく駈けずる間も世辭笑ひを忘れなかつた。

木蔭の切株に腰を下したお由の羽織の袂を直しに來た時、

「ヘン何うするんだ、素人ぢやあるまいし………、赤毛布計り撮りつけて居るもんだから」

余程斯う云つて遣らうと思ふ程癪だつたが、臭い呼吸の不快さに横を向いた儘、自暴に襦袢の袖の摘まる手で樂屋銀杏の根をガリ〱搔いた。

したが寫眞屋は土地の者らしくは無かつた。昨夜父からも話されたが此土地の者は大方東京からの流れ込みで此山間の一小村がどうやら町と名の付く迄になつた其繁昌も其根據は其等の者の手が築いたと云ふ事、中には鐚錢一文の素裸體で漂ふて來て意外な成功を占めた者さへあると云ふ事、此樣な話が頭腦の底に殘つてるので此寫眞屋も事に依つたら東京を隅から隅迄食ひ詰めて來た隆れ者ではないかしらと云ふやうな譯もない淋しい感じに襲はれた。丁度自分達親娘が斯うしたさすらひの旅に上つたやうに――、

「あゝ、あゝ」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斯う思ひ比べて見る丈けて襟元から水を浴びせかけられたやうにゾッとした。

「藝人なんて、忘れたつてなる者ぢやない、」

尾上旭笑と云へば一時は中々鳴つたもので、小屋こそは少さくとも一寸は流行つた港座の座頭て、由良の助を出した時は態々大歌舞伎の役者が見物に來たり、十日の興行を五百圓て横濱から買ひに來たりした思ひ出も有つた。

藝は確かて人氣も一時は有つたが、先年年頃片腕と賴んて來た立女形の岩井巴と云ふのに死なれてから、景氣もゲッソリ殺げた處へ、持前の頑固がとる年と共に募つて、他座へは一切出ぬの、金て買はれるやうな事は俳優の恥辱だのと、兎角は思ひに任せぬ境遇の不滿から、「誰も彼も相手になるな、俺の芝居は一人て開けて見せる」と無鐵砲に無理から座元を說き伏せ、開けた不人芝居が見事外れて、遂々身じめな旅稼ぎの破目に落ち込んて了つた。

何處をどう經廻つて來た馬の骨か、牛の皮か得體の知れぬ旅役者の臭味澤山な大根連に交つて、お染を附合つたり、玉藻の前の桂姬に扮したりするお由が第一、ムシャクシャして堪らなかつた。

それに何ぞと云へば父に怒鳴り付けられる、それも樂屋てならまだしも、時に依ると舞臺

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の眞中で見事赤恥かゝされる事が有る。

「いくら私に拔目が有つたか知らないけれど、旅だもの、少しや樂にやつたつて………」

――逢ひたかつた……――と床に連れてお染が木戸口から駈け込んで來て久松に縋る氣合が不味いと云つて久作を勤めて居る父の旭笑が態々一度引込んだものを、御苦勞樣にもう一度暖簾口から顏を突出して「馬鹿ッ」と浴せかけた――。

さうかと思ふと荒み切つて齒の浮くやうな久松の藝を無暗とかついて、

「どうも確かなものです、大きな座にさへつけばいゝ役者になつたものと心得てる東京のへチャな奴原に見せつけて遣りたい位です」は中々嚴しい。

「阿父樣だつてまさか彼樣ぢやなかつたんだ。」

鏡臺の前で顏をこしらへながら一人二人の客でもあると、乾度、由良之助の型を態々大歌舞伎の役者が見物に來たことゝ十日の一興行を橫濱から五百圓で買ひに來た話が幾度も幾度もガタつく入齒の口を洩れるので、傍に聞いてるお由には其れが堪らなく辛かつた。

「人間もあゝなるものだらうか、」さもしい心根が見え透くやうで、相當の家柄もあり、江戸歌舞伎の流れを汲んで親讓りの人氣も可成肩に懸けた父が落目重なれば斯うも見すぼらしくなる事かとお由は人無き小部屋の壁に前髮を擦りつけて染々泣いた事も有つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「米さん、お前、今顏を洗つて來た計りなんだらう」

寫眞屋がピタリとシャットを握つた手許を離して、操釣りの人形然と不格好に頭を下げると、お由は父の傍をすり拔けて、晩れ走せに駈けつけた氣流しの若いのに笑い顏で聲を懸けた。

米次と云つて多くない父の弟子の中では一寸見られる腕のある若者で、今度の旅廻りでも、大底の者は體裁よく自分の身の振方を付けて、師匠の手を離れ去つたにも係はらず、米次は甲斐々々しくも永年恩になつた師匠と進退を一つにする覺悟で一二人の弟子を跡仕末かた〳〵東京の留守宅に殘し、殘る二三人を勵まして、尾羽打枯した老後の師匠を勞はつて心淋しい夜汽車の旅を重ねてこゝ迄落ちて來た――。

「あの人なんか甘く行かうものなら今頃はもう立派に大歌舞伎の舞臺が踏めて居るんだ――世間からヤイ〳〵云はれて居る〇〇や××より私は余程腕が上だと思ふ――矢張宅の阿父樣見たいに運が惡いんだらう、けれどまだ若くはあるし　行末どんなに出世をしまいものでもない、が女に生れて來た私や、年をとつて了つた宅の阿父樣こそ……」

東京に居た時分忙しい時間の隙から好きで少しばかり慰みにした道樂の寫眞も其後暫らく打遣つて置いたらしかつたが、思ひ出の興味でも湧いたかして米次は頻りと藥や光線の具

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

合などを碌に何も心得て居さうでもない寫眞屋にクド／＼問ふて居た。

輪廓正しい顔立の、高すぎるけれど貧相には尖らない鼻、大きい目、心持口角の下つた口元も立役には澟々しさが添はつて、其何處となく女にもてさうなもの優しい態度迄が心憎かつた。

「可哀さうに、本當に昨夜は隨分だつたね、阿父様も余程蟲の居所が惡かつたかして、――――」

「床へ入ると三時でしたもの、眠る間も何も有りやしません、」

「本當に私なんか傍に聞いて居てさへハラハラして奈何なる事かと思つて居たのさ、矢張積り積つてる平常(ふだん)からの不平があんな時お酒の力で破裂するんだね、」

事柄は別でもなく、一番目の太功記で十次郎に扮する米次が大事な處で二三ヶ所トッチて穴をあけ損なつた事で有つたが、其小言の中には無論操に扮する大根役者のズボラな藝の癇癪が交つて、十八番の皮肉な當擦りが神經の鈍つた連中の胸にも當る程手嚴しい言葉を借りてほとばしつた。いきまけばいきまく丈け癇癪の火の手は愈々炎え上つて、此間中から旅に出たをよい事にして大分ちよい／＼脱け遊びをする米次の棚下しに迄飛火が擴がつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「何ぼ何でもあゝ眞向からやられちや叶ひませんや」
「だがね、少しは氣を付ける事だよ、阿父様だつてあゝはきつく云ふものゝ眞底頼母しい者に思つてお出のはお前ばかりなんだから」
自分よりは三つも年嵩な弟子に向つて姉の様な氣分でから尤らしくたしなめるやうに云ふと男も詮事なしに默つてうつむいたまゝ苦笑を洩して居た。
「私だつて御覧な、一昨日あんなひどい恥ざらしをしたのだよ、おまけに見物の前でさ、私やもう余程居たゝまらなくなつて、何も關はず、一層樂屋へ飛込んで了はふかと思つた位辛かつたぢやないか、それをじつと凝して一幕辛棒した苦しさつたらありやしなかつた。」
ズボラのやうでも時とすると妙に氣の細い米次の少ししよげた樣子が何となく愉快て、お由は蒼ざめた唇に冷たい微笑を浮べた。
二十四には淋しい藝人稼業の生活に染みたお由は態とお白粉氣なしの首筋を詰めて着た褯袢の半襟にも赤らしい色一つ見せなかつた。

○

夜逃同様、東京を發つて來る時からの様々な氣苦勞、負けぬ魂一點張の氣性から張りに張

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り詰めた氣も、承知のならぬは何せよ、六十越した體の爭はれず、七日の興行を翌日が樂と迄漕ぎつけた前の日、旭笑は部屋で顏を拵らへながらガックリ倒れて仕舞つた。然し夫はほんの輕症な腦貧血で、折柄、クサ〳〵した頭腦を休息(やすめ)に裏邑へ出て嫁菜の花をむしつて居たお由がそれと聞き付けて樂屋草履をバタ〳〵長い廊下を驅け付けて來た時にはもう氣も付いて、當人は、もう大丈夫、何でもないと附元氣をして無理に笑つて居た。

兎に角今日一日丈は體を休めた方がと傍の者が人車を呼びにやらうとしたが、目と鼻の間のやうな近い宿迄をそんなに御大層らしく病人扱ひにして貰ひたくないと、云ひ出したら聞かない剛情なので、氣任せに丁度體のあいて居るお由丈けがついて行く事にして樂屋口からそつと穿物を出させた。

「ようく氣を付けて上げてね、」

着物丈け絲織のにゾロリと着更へた米次が風呂場へ行き掛けに石鹼箱と手拭を下げながら目隈を彩つた顏の儘、氣配しさうにお由の背中から聲を添へた。出拂つた樂屋の壺は森閑と靜まり返つて衣裳戸棚の裏でゴソ〳〵鼠の荒れる音ばかりが思ひ出したやうに沈默を破つた。

半開きにした蛇の目を肩深くさしかけて、父の手を取りながら裏の田畝道をトボ〳〵歸つ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て行く途中、お由は種々な心細い事斗り考へられた。

此様な淋しい田舎道を此様にして心細く辿らうとは思ひも寄らなかつた、我ながら親娘の影が淺ましい程見すぼらしく薄れて居るやうな氣がしてならぬ、丈夫なやうでも父は年が年、何時どんな事になるまいでもなし、其跡は――、

お由はもう頭腦の中で父が死んで行く有様、東京の宅へ電報を打つ、――明るい電燈の下で弟子達がワヤ〳〵騷ぐ光景迄明晰想像されて、狹苦しい旅籠の一室に六十幾年の苦鬪の頁に結末をつげる父の果敢ない最期が情けなくなつて我知らず熱い涙が眼尻ににじんだ。

「飛んだ處へまぐれ込むやうになつたものだ。」

重苦しい父の口から述懷めいた此一言を聞くと、ハッと胸板を射ぬかれたやうな切ない心持て呼吸が詰るやうに覺えた。

總て惡運と云ふ惡運に附纒はれた薄命な父の生涯がひし〳〵と身に迫つて、いはれの知れぬ不思議な涙が止め度なくホロ〳〵爪先の草にこぼれた。

親身の者と云つては廣い世間に一人もなし――若いから思ひ思ふて添つた女房は素人で有つたがふと生若い旅廻りの浪速節語りと出來合つて跡足て砂を極られた以來、もう女には懲々と、見込のあるのを養子に貰つて丹誠こめて仕立てたが、それにさへ緣が無かつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

國扱けて出來がよく、メキ〳〵上達するのを生みの親が惜しがつて遂に大阪へ連れ戻して了つた、――

愚痴らしい詞は一つも洩らさぬ男々しい父の氣性からも切つても切られぬ肉緣の尊とさと云ふ事が時々語られた。

「死んだ子の年ぢやないが――彼奴斗りの事は馬鹿々々しい程思はれる、少さいから手一つて育てたから可愛い事も可愛い、彼奴のいゝ評判でも聞くと憎いやうでも矢張嬉しい氣がする、彼奴が俺の子であつて見ろ、自分の子なら何處の誰が來て引こぬいて行かうつたつて取られるものぢやない、よし他人に呉れて遣つたつて矢張自分の子だ、血筋の切れつこはないんだから、そこへ行くと他人の子だ、もてあます時には打遣るやうな子でもさア慾しいとなると、親の方で招く迄もなく、子供の方から懷中の中へ轉がり込んで行くものナ、十年、二十年、よし百年の養ひ親の恩だつて親身の力に逢つちや叶はねエ、何でも子供だ自分の血を分けた子供でなくつちや………、お前なんざ今の若さだから何とも思ふまいが、惚れたの腫れたのつて散々トチ狂つた夢がさめて見ろ、そんなものは河童の屁でもなくなる、子供だ、其本當の淋しさに出逢すと――」

お由が尾上の養女として貰はれて來たのはつい二三年前の事で有つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

へボな義太夫語りで場末の席を駈廻つて居た祿之助と云ふいゝ年をした女義太の姪で、兩親もなく云はゞ孤兒同然なところから、一つには藝事の性質もよし、何より第一、其男らしい薩張した氣象に旭笑が打込んで貰つた娘なので有つた。

「何の事はない、全でお神さんに貰はれて來たやうなものさね」

よく自分で自分に斯う云つて猫一つ居ない男斗りの世帶の中にまぎれこんで來た自分の數奇な運命を冷やかに嘲笑つた。

円畝道から裏通りへぬけると、しがない鍛冶や粉屋などの店があつて、ふりかざす槌の音に驚いて飛び出した飼兎が桃色の瞳を一杯に見張つて默りで行く二人の爪先を横切つた。

○

「あゝ必度お風邪なんですよ、何しろ暖まつてよくお寢みなさるが一番でムいます、」

帳場から主婦さんが如才なく聲を懸けると退屈らしく奥に講談本なんか讀んでた亭主も、振出しが火鉢の引出しにあるだらうの、生姜湯を拵へて上げな、などゝ世話を燒いた。部屋に定めた奥の八疊にお由は女中に手傳はせながら、手早く床を延べ終ると、旭笑はほんの羽織をぬいだなりで心身の過勞に萎へ切つた體を退儀さうに横へた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

澁搔卷をそつと背中から押へ付けるやうに懸けて、放り散した紙入、煙草入、時計、扇子など、それ〳〵仕末して床の間の隅にをくと、お由はさしあたり何をする事もなかつた。「足でもさすりませうか」と聞いて見たいやうにもあるが、何となく口を聞かれるのを煩さゝうにして居るので、呆然、枕元に坐つたなり的もない考へに耽つた。

——病氣が若し、ほんの當坐の事で埒あけばいゝが老人の體では有るし、萬一の事でもあつたら、如何であらう、假初に出た旅歸りに馴染も薄い養父の白骨を抱いて歸る心持は——藝事に掛けては思ふ存分な小言も云ひ、何の分隔てもない扱ひはして吳れるものゝ、年頃親しんだ師匠と云ふ丈けで何かの遠慮勝な仕打の見えるも氣辛かつた。庭先の桐の葉にしよぼ〳〵降りかゝる小雨にやがて暮れて行く秋去れの冷たい空を見て居ると只無性と心細くなつて涙斗りとめどなく湧いた。

そこらに有つた古い文藝倶樂部をとつて一度見た事のある口繪の寫眞をハタ〳〵繰つて見たが氣は移らなかつた。

そつと父はと見ると、搔卷の襟に取縋つた儘啜り泣するかの如く、身ぶるひして居る氣わひがふと目に入つた。お由はもう堪らなくなつて、つと緣側の障子の外へ出た。

折柄丁度宿の女中が風呂の加減がいゝからと知らせに來たのを機に、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「一寸御免被つて來ます」と丈け斷つて廊下へ出た。

湯上りの化粧には手早く水白粉だけ襟筋から顔へザッと刷きつけて出て來ると帳場から主婦さんが「今お茶が入りましたから」と呼び懸けた。

振もぎつても行かれず椽先の欄干に濡手拭を懸けて、勸められた茵に浴後のゆつたりした心持で坐つた。

ざるに揚げて來たゆで立ての柴栗をむき〳〵主婦樣は立續けに喋舌つた。

芝居の大入な事、狂言の評判のいゝ事、それに東京の役者衆はどうしても東京丈の價格がある事、取分け貴女の出る幕が面白いやうな氣がして芝居へ行つても中幕ばかり待たれて仕樣がないと云ふ樣なお世辭迄御叮嚀につけ足した。

「是非もう一度は見たいと思ひましてね、噓なら誰にでも聞いて御覽なさいましよ、宅の女共なんか、それは〳〵夢中なんて御座いますよ、あの、それ……それにあの鬆籠やさんをする役者も甘いものですねエ、店の若い者なんか、毎晩あの眞似で大お茶番なんてムんすよ。」

東京には左程遠くなくつても邊鄙な土地柄は、兎に角芝居小屋の二つも有りながら春秋二度の興行の外は大底へチャな浪速節や奇術、活動寫眞などで持切つて居ると云ふ話。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「もう劍舞ばかりは懲々でさ、此通り、何處も彼處も疵だらけにされちやつて……」一座が此町へ乘込んだ最初の日、舞臺の案內に立つた土地の者の一人が斯う云つた時を思ひ出してお由は此樣な山家に追まくられて來るやうになつた運命のつれなさに泣かれたのであつた。

主婦さんが一寸話の腰を折つて廊下へ立つて行つたと思ふと、やがて氣忙しなさゝうに立戾つて來て、

「あの只今、一寸御部屋へ御樣子伺ひに參つて見ましたら、丁度先刻お呼びなすつた按摩さんが見えてゞして御療治中でしたから今の間に一寸此先の公園を御案內致しませう、雨も丁度揚つたやうですし、……あの、私伺ひましたら行つて來てもよいと仰在いますので……、」

もう一人て何も彼も定めて了つてゐる。

「又何時本當に此樣な山家へ入らしつて下さるか分りやしませんからせめて土地の名物の公園丈でも見て置いて下さいまし、それはもう東京の方なんかに少つとも珍しくは有りやしませんけれど、……」

口まめに手まめに主婦さんはさつさと簞笥の抽出しから羽織を出し懸ける。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然しぢつと此儘坐つて居た處で能もないので、お由も氣紛れに行つて見る氣になつた。店先で人と立話をして居た亭主に「では一寸此方を御案内して來ますから」と云ひながら何がな得意らしく、スラリとしたお由に肩を並べていそ〳〵低い軒を出た。

「私共への道をお忘れになつたつて此柳さへ覺えてゝ下さりやすぐ分ります、全くいゝ目印なんてムいますからね、ホヽヽ」

可笑しくもないのに取つて付けたやうな派手々々しい聲で丁驚に笑つた。

主婦さんは細い通りを通りながら殆んど逢ふ人毎に頭を下げては、「今日は」とか、「どうも不可ませんお天氣で」とかを繰り返して居る。

「本當に田舍は是だから嫌になつて了ひます、東京なんかは廣いから毎日電車に乘つて歩いたつて、滅多、知つた人に逢ふものぢやございませんけれど、もう此の通りの仕義ですから煩さくつて煩さくつて……」

お由も本當に嫌だと思つた。幾度町へ出て見ても見る人の顏は大底極つて居るやうで有つた。町も其通りでどんな道を曲つても横町を入つても同じ町筋斗りへ出る。公園と云つても繪葉書で見た程いゝ景色ではなかつた。紋切型のやうに瓢簞なりの池が有つて、鯉が居て、中央に小高い山が有つて、かや葺きの詑びた茶店がたつた一軒池の傍にあつて、白髮

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頭の汚ならしい婆樣が一人で駄菓子を並べて居た。

主婦さんは小山の上へ上ると西に當る遠くのコンモリした松林を指して、

「あの向ふがずうつと墓地でしてね、私の少さい時分別れた母や姉なんか皆あすこに居るんでムいます、小學校に通つた時分〳〵よく春にでもなると、先生に連れられて蕨狩りに行つてはお轉婆をしましたつけ、父の手一つで誰も面倒見て吳れる者がムいませんものですから、東京の伯母の手へ引取られて、十年餘も神田に住ひましたが、よく〳〵草深い田舍に緣があつたと見えまして、又候、本の故鄕のこんな山の中へ舞ひ戾るやうな事になりました、」

と目を伏せて話した。お由は其平坦な述懷話より見下す町の細々した家居のいらかの間にハタ〳〵風に鳴りひらめく芝居の幟りが自分達の墓印のやうに悲しく見えて思はず涙ぐんだ。

火點し頃の町をブラ〳〵しながら歸つて來ると父は、薩張と風呂にでもつかつたかして打解けた部屋着のなりで裕然と床柱を背に、もう何ともない樣子で、二三人の下廻りを相手にチビ〳〵晚餐の盃を含んで居た。

廊下でハタと行逢つた米次に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「今夜こそ昨夜のやうなお小言もなからうし、お前様達皆してどつか町へでも遊びに出て見るなら、私も連れてつてお呉れな、いゝだらう、一緒に歩いて見たいんだからさ、この町にだつてもう直きお別れなんぢやないか」

お由はもう悉皆元氣になつて、米次の顔を見ると蓮葉らしく話し掛けたが、米次は困つた様な顔付で只ニヤ／＼默つて笑つて居た。

然し其晩は是から次に乘り込む事になつた、こゝからは又二里の山奥に當る少さな町で打たねばならぬ狂言の下相談やら何彼で遂に出られなくなつて了つた。

最初のもくろみではこゝで一週間も打つてる中にはいゝ處でなくとも何處か東京の方に口も開かうかと旅に倦み勞れた連中の皆がそれとなく的にして居た歸京の事も仇になつて了つた。談判はこちらが焦る割に根つから反應がなく剰さへ食ひ込みさへ來したので、愈々熟念く落目に落目と附纏はれて行く斗りであつた。それに下廻りが一人二人と漸々に人知れず姿をくらます者の出來て行くのも折柄心細さを増させた。

もう斯うなつたら百年目、嫌でも應でももう一度意地に懸けても東京の舞臺へ立戻つて死花咲かせにや死んでも死に切れないと旭笑は愈ゝ危氣となつた。

小言は劇しくなる、氣は荒くなる、お由は時にどうなる事かと少さい胸を人知れず痛め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る事も有つた。

其晩おそくにお由は宿の女中にせがまれて行きたくもなかつたが據所なく、町外れの小いぽけな芝居小屋に懸つて居る活動寫眞へ行つて見た。

小屋はそれでも一寸廣くは有つたが、花道が土足で踏みにじられることや、坐布團の薄垢染みたのが、然かも桝一杯て炬燵布團然たるのや、一寸用達に出るにも、草履を穿いて行かなければ一足も踏み出せぬやうな亂暴さに愛想がつきて少なからぬ不愉快を買つた。淺草邊の常小屋て辯士をして居る貌に見覺えのあるニヤケたのが矢張當夜の辯士て盛んにまくしたてたが、最後に餘興として、齒の浮くやうなバイオリンの合奏で越後獅子を御馳走されたには悉皆當てられて了つた。

靴墨のやうにコテ／＼と光らした頭髮、キザな桃色のネクタイ、旅稼ぎ丈けに高をくゝつて居るやうな不眞面目なそぶりのほのめくのも小面が憎かつた。それにしても世の中の人間が種々にもぐりもぐつて生活の道を辿つて行くものだと云ふ事に驚かれもし且淺ましいやうな氣もした。

○

假初の旅ては有るが七日間も居馴染んだ町に遂々別れを告げねばならぬ日が來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

停車場へ着いた時は情けないと思ふ迄てあつた暗く狹い町も、人車を列ねて勢よく乘り込んだ座の、東京の斗りを見つけて居た目には泣きたい程みすぼらしかつたことも、本の當坐て馴れゝば自然と馴れて行くもの、日を重ねるに從つて、疎ましい程な此邊鄙な山の町も一種の不思議な懷しさを覺える迄に四邊の空氣に泌みて來た。

愈々明日の二番てと總てが殘る方なく取きめられた夜、芝居がはねてから裏町の少さな料理屋へ皆寄つた。

狹くくねつた二階の梯子段をお由は確り父の手を握りながら淋しい心持て一段一段登つて行つた。

哀れな老いた父はもう悉皆疲れ切つて心身共に綿のやうに萎え切て居る、一寸でも手を離さうものなら其儘ガツクリと倒れて了ふだらうと思ふ程自らを支へる力を失つて居た、たゞお由の手にきつと縋る斗りで呼息せはしく、重たげな、足取を無言に運ぶばかりで有つた。

「是が若や米次や外の若い者とて有つたら、」と心の中て問ふて見ると唇に浮ぶ笑をとゞめられなかつた。誰に遠慮もない老人と餘りに年の懸違つた若い年の娘との斯うした氣安さを思ふて見ると堪らなく可笑しくもあつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

米次も疲れて居た。お由が父の手を引いて梯子段を漸々の思ひて上り切ると、高い窓の下にバッタリ突伏して居るので、お由はそっと忍ぶ様に傍へ寄つた。

「米さん、奈何したつてのさ、」

「何だか急に目が暈つて、………」

「嫌だね、此人つたら、確りおしよ」

帯の間から細い指の間を洩れさうな少さい絹の薬包を取出して、そつと手に握らせながら、白い腕をさしのべて輕く背中に置いた。

「落着いてそれをお上りね、」

お由は急いて父の居る明るい廣間に行つた。

○

一つ二つと皆から無理强ひに呑ませられた盃の數が重なると、頭に苦しい醉の悩ましさを覺えて、そつと椽側へ一人ぬけ出して冷たい風に當つて居た。雲のやうに黑い山の影が眉の間に迫つて、蒿屋の軒から引きりなしに聞えて來る筬や梭の音に搦む機織女の細い唄の聲ももの哀れで有つた。

空はドンヨリと曇つて水をすつた星の鈍い光りが點々と悲しさうにきらめいて居た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明日の朝になれば名々ばら〳〵西へ南へと得手勝手に離れて行く人達も今夜の中は皆面白さうに笑ひさゞめいて盃を交はして居る。

雪の深いが名物と聞いた明日行く町、その淋れ果てた詑しい光景を辜間米次が買つて來て呉れた繪葉書の上に想像して見た。

停車場に近いので、絶えず上り下りの列車の響が轟々と重く地面を搖ぶつて行く、――其幽かに遠ざかつて行くわだちの響の跡を耳にしながら、お由は、

「あゝ東京！東京へ歸りたい、一人で……」殆んど無意識に小聲で云つた。

明後日にはつとめねばならぬ大事な初役の信夫のことも忘れて、――せりふさへまだ覺束なかつた。

障子の硝ガラスを通してソッと廣間をのぞくと盃盤漸く亂れかゝつて、醉ひたらけた土地のやぼつたい藝者の一人がのべつに騒いで居る。誰が誰やら酒に蕩けた顔は一様に締りがなくなつて見分ちやうもなかつたが、大勢の若い妓達に取卷かれて居る米次の輪廓正しい白い面ざし斗りが浮き上るやうにクッキリと見えた。

十二月十二日夜

――完――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初空

白雨

初空の人岩の鼻に小龜得し

かくて遂に拜觀す古城の初日の出

動く灯に動く杉影初烏

食好みある病餘の君に屠蘇の醉

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初夢に麒麟竭[ナドメ]くすりを印度より

歌合せも寮の御慶日和なる

病餘の寒を五山の梅にまた遊ぶ

星の井に汲む若水も癒ほざて

墨汁の名殘る畫書院に福壽草

波なき白山笑ふ湖畔の舟に釣る

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「寒山拾得」と「お七吉三」

しぐれ

踊といふものを、輕業の曲藝や、角兵衞獅子のやうに、そつくりかへつたり飛んだりするのを、輕い面白いと褒る人がある。さうかと思ふと何とか式とかいふ體操のやうなのを、實に優美だといふ人もある。まあさういふ方は踊を見る方の素人だといへるかと思ふ。

また踊手の方にも、思ふさまに背を反せたり、ちよつと流す手さきまで、ぐつとそらせたり、一つ廻せばよい處をくるくると廻し、肩や腰をふつて器用を見せたがるのがある。さういふ人にかぎつて下手ではないが、多く悪達者なものである。然しながら見方が前にいつたやうな觀客だと、さういふのが悦ばれるものである。形式美とか何とかむづかしい言葉でほめられる。

それは全く、まづい踊が棒立ちであつたら見られたものではないが、眞の上手とゆるせるのは、なだらかな大間のなかに、言葉に言ひ盡せない、細かいうまみのある、上品にふつくりとした、熟しきつた輕みをもつた味が、藝の品位とともなつてゐなくてはならない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

角々にうまみのある、よいかたちをする九女八の踊ても、その點からは完全なものとはいへないかと思ふ。よくは分らない私の眼からも、いま踊の専門の人て、藤間勘十郎ほど妙味のある人はなからうと思ふ、此人は女である。も一人は勘右衛門であるけれど、をしいことに少し癖があるかと思はれる。

私は其二人に「寒山拾得」をやらして見たいと思つた。勿論芝居てすれば段四郎のものであるとも思つた。をしい事には文藝協會の舞踊専問の、大造氏といせ子氏が演じた「寒山拾得」は、雪舟の墨繪の筆意をあらはさうとした試みに、風韻と氣品を現はすことが出來なかつたかと思はれる。それは私達も喝采したお仲間の隊長かも知れないが、作者の思ひつきと、長唄の方とへ半分以上を差上げてゐるのも事實なのである。私は坪内先生をはじめ、「振事劇に出る方達の、熱心も勉强もよく知つてゐながら、かういふ事をいふのは心苦しい。けれど私は振事劇の熱心な觀客を代表して、憎まれ口をきくのである。大造氏の踊は器用てないのがたのもしいが、肩にうま味のない方てある。いせ子氏は多年練磨の功て、あぶなげはちつともないが荒すぎる、やはらか味が足りない。「ととは鎌、かかはかつちり燧石、とんだ火花か、主か、おれぢや」のあたり、あすこらあたりにもつと〳〵妙味が出さうなもの、さうしたらどんなに面白味がましたてあらうかと、うつとりするように考へ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

られもする。

手を上へあげる時に、肘を見せるのをかまはない踊の師匠がある。甚しいのは腕まであらはに、によつきりと出させて澄ましてゐるのもある。それは肩のこなしのよくない證據だ。そんなのは藝の行儀が惡いとも言へよう。まして踊は、腰の据えようが大事なものである。褄さばきのあらいのは、まづ禁もつといつてもよいかと思はれる。

「お七吉三」では、師宣の筆意にならふたお七が、金屏風のまへに立つてゐる。お七になるくに子孃の美しさに、ぼつとしてゐるうちに前の方は過ぎてしまふので、いつもあらは吉三の出から目につく。「のうのうそれなる御寮人」と、吉三の言葉は長唄の方で名人小三郎が唄つてゐる。それをうけるくに子孃の「え丶」といふ聲が、どうも强すぎて情がないと思ふ。この「お七吉三」の方は、場面であつといはせた割に、節附けの方にも、振の方にもたいした好いところも、面白味も見出せなかつた。末の方の「天も地もなきや、親はらからも、なんて涙がおちるやら」のところは、以前私演に見たをりの手の方が無事かと思はれた。此度のようになるとあんまりせせこましく、そして實感が出すぎて、振事劇に美化された、大樣なふつくりした古畫の味がなくなるかと思はれる。吉三が新派劇の表情のように泣顏を顰めたり、お七が泣聲をのんだりするのは、まつたく考へものである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は憎まれても楯をつく弟子となりたい。振事劇に熱心のあまり、諂らふ事を心がゆるさない。舞踊劇を専門としてたつた俳優の最初の諸氏に、世間並のほめことばや、美しく飾つた筆の花束を差上げぬのを、悪からずとつて頂きたい。其代り只よかつたといふだけで、すぐ忘れてしまうような見物ではないつもりである。忠實に一生懸命に拜見した一人である。

素人の私にも、吉三になつた方を、他の方と一所に並べ評すのはあんまりお氣の毒だと考へられた。それ故此方については、すこしの間無言つて見てゐやうと思ふ。

——完——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夢

與謝野晶

わが夫(せ)の君海に泛(うか)びて去りしより
わが見る夜毎の夢はたすべて海に泛ぶ。
或夜は黑きわたつみの上、
片手に亂るる裾をおさへて素足のまま
君が大船(おほふね)の舳(へ)先(さき)に立ち、
白き蠟燭の銀の光を高くさしかざせば、
滴(したた)る蠟のしづく淚と共に散りて、
黃なる睡蓮の花となり、又しろき鱗(うろこ)の魚となりぬ。
かかる夢見しは覺めたる後(のち)も淸淸(すがすが)し。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

されど又かなしきは或夜の夢なりき。
君が大船の窓の火ややに消えゆき、
唯一つ殘れる最後の薄き光に
われ外より硝子ごしにさし覗けば、
われならぬ面やつれせしわが影既に内にありて、
あはれ君が、棺の前にさめざめと泣き伏すなり。
「われをも内に入れ給へ」と叫べど、
外は波風の音おどろしく、
内はうらうへに鉛の如く重く靜かに冷たし。
泣けるわが影は
氷の如く霞の如く透きとほる影の身なれば、
わが聲をえ聽かぬにあらん。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは胸も裂くるばかり苛立ち
扉の方より馳せ入らんと
三たび五たび甲板の上を繞れど、
皆堅く鎖して入るべき口も無し。
もとの硝子窓に寄りて足ずりする時
第三のわが影艫の方の渦巻く涙にまじり、
白く長き手に拔手きつて泳ぎつつ、
「はは、はは、そは皆物好きなるわが夫の君の
われを試す戯れぞと笑ひき。
さめて後われは其第三のわれを憎みて日ひと日腹だちぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われ死なば

柳　清　美

ふとなれし心安さにありしことといひはなちたるあとの
くやしさ
われしなば泣くべき人はたれかあるとかぞへてみたり
ねむられぬよに
灰色の空をみつめてつく／＼と只一人なく秋の夕ぐれ
くにのはて世のきはみまでわれのりてかけりてみまく
おもはるゝ雲

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あめふれば菊の花いけ文机にきみの文みるうれしき心

かくもせんかくもせざらむとり〳〵にこゝろくだきて
一日を過ぎぬ

知りそめし身の憂きことをかきつけてつちにうづめし
三日月のよに

つたなきは我かみのさがとおもへどもなほもなかるゝ
夕まぐれかな

もし女なみだしなくばいのちなしかなしき日にもうれ
しき日にも

いまだみぬ北のはてなる友のくににいざゆきてみん林
檎赤きころ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

その日

田村とし

お桂は男の濡れた唇を見つめながら襦袢の襟の間へ口を埋めて、ふところ手をしてゐる自分の指の先きを肉の食ひ切れるほど力いつぱいに嚙んだ。

外はしぐれてゐるのに窓の障子の上の方だけ軒に桃色のきれでも干してあるやうに薄つすりと赤味が棚曳いてゐる。今しがた、かあゝ、と鴉が寒い時暮つ日を呟くやうな聲をして鳴きかけたが、かすかな羽搏きだけを殘して掠めたやうな影を障子に映して消へるやうに飛んで行つてから、今にもぱら〳〵と落ちてくる雨の音をぢつとして待つてゐるやうに、座敷の外はすつかりねづみ色の流れに押包まれて何の響きも動きも見せずにひつそりとしてゐる。

薄い裾の中に足の先きをくるんで、男は肱枕をした儘、時々腫れぼつたい眼を開けて女の顔を見た。その度に女の眼は自分の眼と合つた。女は始終自分の顔を見てゐるのだなと思ふと、男はそこ恥しい氣持ちもして直ぐにその眼を閉ぢる。けれど閉ぢた瞼の外に、此方を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

見詰めてゐる女の眼の光りが眞つ直ぐに透してゐることを思ふとやつぱり眩しい氣がして、一度瞑つた自分の眼の睫毛が自身にも引つ切りなしにふるへてゐるやうに思はれた。

火鉢の火から紫の焔がぽつぽと開くやうに燃えてゐる。お桂は自分の好きな男の顔を、輪廓から生際から、水色の襦袢の袖が隈をとつてゐる男の色の白い胋から、少し段のついてる高い鼻の横から、眼許の肉がこけてゐるけれ共口のまわりには豐くりした肉が押つけたやうにむつちりと高くなつてゐる頰から、口尻のところがぽつちり窪みを含んで其所だけに仇氣ない色をこぼしてゐるやうな薄い口許から、さんざ見て見盡して了ふと自分の眼に涙をもつてくるほど疲れてきた。お桂は男の顔が笑ふか怒るか、何うにでもいゝから其の筋肉がちよつとでも動けばいゝと思ひながら、自分から何か云ひ出して男に口をきかせるのはいやだつた。男の眼がちよい〳〵開くたびに、自分の瞳子をその眼の中にとろけ込ましてやり度いと思ふやうに、唯ぢつと見てやるより所在がない。

いつまで二人は口をきかずにゐるだらう?

此家で逢ふ約束をして、此家へ來たのは女の方が先きだつた。

「どうしたの。」

後から來た男に、お桂は然う云つて——今坐つてゐるところから眼を上げて男の顔をちら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と見た。男は何も云はなかつた。其れぎりお桂もなんにも云はない。そうして、男は外套を着たまゝ寢ころんで、意固地に口をあかずにゐる。

お桂は男の顏から目をはなして紫の焰をぢつと見まもつてゐるうちに、胸がぢり〳〵して來た。丁度逆上たときの齒莖のやうに身體ぢうの神經がむづ痒く、うづいて、脈管を破られるほど力いつぱいにぐる〳〵と身體を縛められたいやうな、手にさわるものは悉く掴みつぶしてしまひたいやうな、いら〳〵した氣分がお桂のみだらな血を潮のわくやうに荒びさせてくる。お桂は男の顏を見ながら、唯ぢつと自分の指を噛みしめた。

男の方の感情はしぐれた空と同じやうに、冷めたくひつそりと靜にながれてゐる。女の顏によつて自分の心を彩られる華やかな色と云つたら、やつぱりその障子に映つてる紅葉の薄い影ぐらゐな、かすかな淡い色氣だつた。これぎり女が口をきかなければ、默つて歸つてしまへるほど、どうしたはづみか今の男の心には粘りがなかつた。

だまつてゐる男の眼の内に、他に物を思つてゐるやうな空ざまな色のたゞよつてゐるのをお桂もさつきから知つてゐた。斜から見をろすと、蔭を作つてゐる男の眉毛が殊に淋しい。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「その女は○書のあね様のあたまのやうでせうと云つて後向きになつて、自分の潰しの髷を私に見せ申候、松葉いろの根がけをかけてゐたが、頸あしが馬鹿によくつて、一寸掘出しものだと思はせたつけ………」

昨夜男からよこした手紙の中の文句を、お桂はふいと思つた。

「いけすかない」

大きな聲で云はうとしたが、何か重つ苦しくおさへ付けられてる樣で調子よく言葉がはぢき出なかつた。

お桂はいきなり男の傍へ居退つていつて、男の片手をつかむと無理に引きおこそうとした。男は柔順に女の手に引き上げられるやうに身體を横にして起きかへつた。骨のぬけたやうな男の柔らかな手答へがお桂の胸をふるはせてゐた。

――をはり――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

松井すま子扮装ノラ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

附録ノラ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代悲劇草案（人形の家の草稿）

羅馬にて

精神上の法則は二通りある、良心は二通りある、一つは男ので又それとは全然趣を異にした他の一つは女のである。男女は相互に了解しない。けれども實際の生活では女は男でゞもあるかのやうに男の法律で捌を付けられる。

劇中の妻は結局善惡正邪の辨別を失ふに至り、自然的感情と、權威ある信念との間に立ちて昏迷する。

現今の社會では女が自己に誠實なる事は不可能である。現今の社會は男の手になつた法律と、女の行爲を男の立場から判斷する判官と原告を有する、專ら男向きに出來上つた社會である。

彼女は欺騙の罪を犯した、そしてそれを矜誇として居る、夫いとしさにその生命を救はうとして爲たのであるから。然しこの夫は普通人士の體面を全うしつゝ法律の地盤の上に立つて男の眼で成行を觀て居る。

靈魂の鬪ひ。權威ある信念に壓迫されて心亂れ、彼女は我子を教育すべき己の道德的權利と才能に對する信念を失ふ。種の蕃殖に關する義務を果せば則ち命畢る或種の蟲類に等しき現今の社會の母。生命に對する、家庭に對する、夫に、子に、親族に對する愛情。女らしき思想の動搖、忽然歸來する懸命と恐怖。物を逆ぶには一つ宛運ばればならぬ。切なる願ひにも耳を借さず、又避ける餘地も與へずに大團圓は近づく。絕望、戰鬪、滅亡。

（クログスタツトは不名譽な行によつて有福な身となつたが、その工面善しか今何の役にも立たず、名譽を取返す事が出來ぬ。）

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

社員の批評及感想

人形の家より女性問題へ

（一）劇に表はれたるノラの徑路、

北歐の或都市の富裕な家に産れ、父の鍾愛を一身に受けて、平和な順境に浮世の風を知らないで人となつたノラは、容貌は、中肉中脊、極めて血色の佳い花の樣な少女で、家族は、皆、人形を愛づる樣に愛でてゐた。性、至つて無邪氣、輕快、空想的樂天的に事件を苦なしに取扱ふて、興味をそれからそれへ廣く轉じ、極めて一時的な、物質的な、淺薄な、刹那的快樂を追ふて滿足してゐる。世の中の惡と云ふことを知らない清淨無垢、玉の樣な溫情を以て人に迫る、美しい親思ひ、夫思ひ、子思ひ、友思ひな優しい親切な素直な、而も齒切れのよい、まあ一口に云へば、愛くるしい、おもしろい、多血質的長

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

所を具へた好女性である。智識も、才能も、開發さへすれば、いくらでものびる素質であるが、なにしろ、狹い小い家庭より外に出さないものだから、社會的觀念等は少もなく、思想も、原始的な、單純なものにすぎない。本能的感情は、ノラの行爲を左右して行く唯一の動力であつて、法律も道德も宗教もない。が、大部分は周圍の人の指圖のままに、白い花もかざせば赤い着物をも纒ふた。妙齡のノラは、八年前、父の撰擇によつて、法律家のヘルマーと結婚した。ヘルマーは、常識的な、法律や、道德や、宗教的信條やの與ふる權威に、只々服從して、一切の行爲は、無意識的に此所に準據を置いてゐる。寧ろ、之を過重視して、偏屈に陷つてをる。勿論、人生を自から、根本的に考へると云ふことはなく、疑を懷くと云ふこと、反省すると云ふこともしない、平凡な男。然し、寬大な、親切な、温い好人物には相違ないらしい。此二人は、勿論相互の性格とか、主義とか、思想とかを考察したでもなければ、反省したでもなく、所謂、月並に、家庭と云ふ新しい小い團體を組織したのであつた。異性に對する經驗のない二人は、如何にも、此若い男女の集りが珍しく、面白く樂しくて、愛情の限りを集めて相和した。わけてノラの、素直な、蟠のない、快活な性質は、煩しい職業に疲れて歸るヘルマーの、無上の慰藉となつて、遂に、春の野に朗音を弄て、吾々の耳を樂しまする、小雲雀を以てノラ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の代名詞とした。それは、たゞに耳を喜ばせるだけである。誰か雲雀を飼ふ者は、之を尊重してであらうか。が、兎に角、伉儷はめてたかつた。暗雲は、間もなく此平和な天地に覆ひかかつて來て、結婚程なく、ヘルマーは大病に罹つた。多少の貯は忽ち盡きた。而も、ヘルマーは、南歐の温い空氣に養はれなくては、彼の生命を取り止めることが出來ない運命に捕はれてゐる。斯る場合、妻として、最愛の夫を救ふべく、如何なる犧牲をも敢て辭しないと云ふことは、愛に燃ゆる女性の、とるべき道て有らう。ノラは、治療費を借り入るゝことを勸めて見たが聽かれない。今は止むなく、父から貰ひ受けたのだと僞つて、かの狡猾なクログスタットから千二百弗と云ふ大金を借入れて、さあ參りませうと夫に迫つた。それても夫は快諾しない。遂々今度は、ノラ自身が、新婚旅行をし度いからだと駄々を捏ねて、やつとのことて伊太利まで連れ出したのであつた。ノラは、夫を救ふために自己を欺き、夫を欺き、又、瀕死の父に心配をかけぬために、債主を詐いた。けれど、そのために夫の命を救ふことが出來たので、ノラの本能的感情は滿足した。高價な犧牲に向つて、美しい誇を抱いたのである。ノラの良心は、決して此行爲を咎めないのみか、却つて大に之を讃美したのであつた。然し、若もヘルマーが、此秘密を知つたならば、必ず、之に非難を加へるて有らうと云ふことだけは知つたので、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

病氣が回復して以來、ノラは、不如意の經濟の中からも、色々工面に工面をし、時には、自ら筆稿をしたり、編物をしたりして、幾分の餘裕を拓いて返債の方法を立てた。其ために、ノラは無駄づかい家と云ふ汚名をも蒙つた。あんな幼い心のノラに、あんな偉いやりくりが出來やうとは、ヘルマーには想像だも出來なかつたであらう。且又あの可憐な妻が自分の主義に反してはをれど、斯程にまで、自分のために苦心慘憺な目を見て居らうとは、思ひ設けなかつたて有らう。ノラは、敎へられずして陰德を積んでをるのて有つた。

結婚後のヘルマー家は、災難に襲はれることは有つたにせよ、美しい夫婦の和合の間に、已に三人の兒女を擧げた。朝から夕に、いかにも愉快に笑ひ興じて暮した。然し、此平和は健全な平和て有らうか。高尙な愛の生活て有らうか。神聖な意味の家庭て有らうか。夫婦の間には、秘密が伏在してをる。夫婦の生活主義には、遠い隔が有る。相互の思想の間には、誤解が有る。夫婦の行爲は、共に、極端に走つてゐる。それをたゞ、表面だけ、虛僞と、無反省とて、縫ひ合せてをるだけて有る。汚いものを、そつと蓋して置く様に、一時的の豫防を施してをるにすぎない。累積してをる巨大な恐しい暗礁は、表面、海水に掩はれてはをるけれど、一度船を進めようものなら、忽ち破壞せられないてはゐ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない、平和な風が吹いてをる間は、何事もなかつたけれど、此所に俄然事件が湧いて來ると、危いカラクリは、忽ち、瓦解するの運命を免れることの出來ないのは、理の當然で有る。ヘルマーは、辯護士が自分の氣象にふさはしくないのを悟つて、色々と職を求めたが、丁度いゝ都合て、愈來年の一月からは、某株式銀行の支配人に擧げられることになつて、ノラ夫婦は、過去の窮境から一躍して、物質的の幸福な地位に登ることを、非常に喜ぶ身となつた。が、好事魔多しか、突然歸來する大波瀾は、僅三日の間に一家を擧げて、滅せしめた。事件は、クリスマスの買物に始つてをる。ノラが使の男に銀貨を遣つて、おつりは要らないと云ふ小い一つの擧動にも、ノラのスッパリした氣分を表してをる。夫から禁ぜられた菓子を頰張つて、危い所で悟られそうになつた時、飽くまて之を秘してゐるのは、夫の感情を害しない樣に、一時的の方便をつかつたので、妻としては、とにかく夫の考へに背くのはいけない事だと呑み込でゐる、けれども、ノラの考と根本に於て一致してゐるので無いから、自然に虛僞に陷る傾向は、此些事にも窺いて來る。然も、ノラの、あの無邪氣な素振と來ては、到底三人の子の母とは思へない。今一段無邪氣さを進めて、「本當は食べましたのよ御免なさい」と、出て呉れたならと思はせる。經濟問題が持上つた時に、ノラは、流石に相變らず、借金すれば宜しいと暢氣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な本音を吹いて、ヘルマーに「負債は家庭の最後だ」と說法せられた時には、いかに何でも、少し機嫌を損した。が、クリスマスの費用として、二十圓を握らせられるに至つて、目前の自分の秘密の希望を達する手段となるので、夫の主張に讓步した。それて以て、自己滿足は出來たわけになる。其素振りは、之れ又、子供つぽい。服從は、すべて外面的、一時的て有るが、ノラ自身には、それて當を得てゐるつもりらしい。

ノラは隨分才女て有り、趣味の人て有るらしいことは、かの去年のクリスマスの時など、色々自分て嗜好を凝して、徹夜して飾附をしたり、交際社會に立つて花と謳はれ、友人に對して一臂を添へたり。中々の敏腕家、世話好き家。何時も、家庭を愉快に和合させて行く手腕が有る。愛嬌タップリで、淡泊て、何れかと云へば與し易い女の樣に見らるゝ。此ノラの周圍に死に頻して居るランクは片戀ながら其苦痛を慰められて居つた。クリスマスに際して、二人は、去年は、內職までしたのに比して、今は次第に地位は上る、金子は出來る、豪勢だと前途の希望に身を浮かせて喜でをると、破滅の導火線として最も有力なノラの幼友達なる、リンデン夫人が來訪する。ノラ家の破滅は、實に此リンデンの偶然の依賴が根本＝勿論近因として＝となつたのであつた。今一つの近因は、ヘルマーの榮達である。とにかく、ヘルマー、ノラ、クログスタット、リンデン、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此四人は、不思議にも、拔き差しの出來ぬ機械的關係に組織せられてある。一方が破壞すれば他も亦運命を共にせねばならぬ事になつてをる。實に、巧妙なカラクリ仕掛と云はねばならぬ。難しい、絡んだ關係て有るだけそれだけ事件の進捗が急激になつて來るのは、無理はない、劇の仕組みがそうさせるのだから。リンデン夫人は、母と二人の弟との爲に犧牲になつて、當面の經濟上の融通を付けるために、其戀仲であつたクログスタットを見捨てて方便結婚をした。クログスタットは、失意の結果墮落して、高利貸となつた。其クログスタットが、ノラの債主、即ち秘密の鍵を握つてゐる。換言すれば、ノラ夫婦の、死活を制するものはクログスタットで、其クログスタットは、ヘルマーのために急所を抑へられてゐる。然も、ヘルマーは、リンデンを救ふためには、クログスタットを落さねばならぬことになつて來た。クログスタットにして見れば、社會的生命のため、一つは戀の復讐のためには、ノラを殺すの外に道はないと云ふ次第なのである。退つ引きならぬ場面、寸分の隙も許さない。そこへ持つて來て、激烈なる心理的革命が起つて來るのだから、堪らない。實に緊張の極に達してゐると云ひ度くなる。今、事件の進行に伴ふ心理的狀態を、稍、詳細に評して見やう。ノラとリンデン夫人とは、久濶で邂逅したが、一別以來の二人の境遇の變遷は、其對話に由つて互に理解が出來た。ノ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ラの樂天的な、小供らしい態度を見て、リンデンは、唯、譯も無いネンネだと批評すると、忽ちノラの幼い心に反抗心を與して、これでも、浮世の苦勞を知らないでも無いと云ふことが示したさに、大切な秘密を打ち明ける。リンデン夫人は、不幸な波瀾の多い經驗に揉まれてをるだけ、其思想が老熟して居て、世の中を、いくらか批評的、客觀的態度を以て觀察してゐる。ノラに比較すると、遙に、圓滿な人格に表はされてゐる。で流石に、「ノラさんあなた少し亂暴じやなかつたですか、御主人に知らせないで」、と反問してゐる。リンデンの考へでは、姑息なことは、決して永遠の策でないと云ふことを悟つてをるらしい。此のことは、後にも一貫した思想として出て來る。之に答へたノラの辯解は、夫を救ふべく拂つた犧牲‖夫を欺いたことは、夫の主義を破壞しないで、然も夫を救つたので有つて、それに伴ふ秘密の苦心が、家庭の平和を齎した唯一のもの、妻として、此れ程貴い誇は無いとの確信の表白で有つたが、然し今、リンデンに告白した秘密は、たゞ秘密の一部分、即ち、單に夫を欺いたと云ふことだけて有つた。にも係らず、リンデンから「亂暴」と云ふ評語を浴せられたので有るから、ノラの心に、多少の反響を與へたて有らう。然し、ノラは、「今はもうすつかり自由なんてす、是でもう、小供と一緒にキャツキャツと騷ぎ廻つたり、トヴルトの好きな樣に、家の中も綺麗に飾つたり

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

……實に、生きて行つて幸福で有つて、何と云ふ素晴しいことでせう、と、一向自分のしてゐることを疑はないで、暢氣に喜んでをる。

處へ、クログスタット、即ち、狡猾な債權者が銀行の用向で訪問する。今度夫の支配人になる銀行に、其人が勤めてをると云ふことを、ノラは知らなかつた。況や、リンデン夫人と差代へる人が、クログスタットで有らうとは、猶更、豫想しない。其ために恐しい難題が降りかかつて來るなどは、勿論、夢にも見なかつたので有る。一方、クログスタットも、亦、自分の地位を、昔の戀の仇に奪はれる＝一度ならず二度まで致命傷を與へらるる＝とは知る由もなかつたので有る。全く意外な成行になつて來たので、意外な結果を產で來る。幸福の瑞兆は、悉く、險惡な凶兆となつて表はれて來る。クログスタットは、今迄は、單に、社會的復讐に立脚してをつたが、又更に、新しい戀の復讐問題が薪炭となつて、火の手を熾にした。畢竟、生命を賭しても之と爭はねば止まない。そこで、ノラがかの千二百弗の證文に付いて、僞證罪を犯してゐると云ふことを說明して、今若も此事情を明にしたなら、ただ單に、家庭の不愉快になるばかりでなく、今此證書を、裁判所へ持ち出せば、ノラは當然、法律上の罪人とならねばならぬことを詳說しながら威嚇した。（懷疑の第一步）クログスタットは、行きかかり上、金錢問題の外

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に、斯る名譽恢復問題、戀の復讐問題が蟠つてをるので有るから、縱令、ノラが金の工面は付くにしても、此地位を與へねば埒は付かねことになつて來た。地位を與へることは、ヘルマーに事情を打ち明けない限りは不可能なことなので、打ち明ければ二人の仲は破滅して了ふと云ふ、困つた關係になつて居る、此時クログスタットが、過去に自分の私書僞造罪を犯したのも、已を得ぬ事情からだと云ふのを聞いて、ノラは、「まあ此人は！妻君の命でも救ふために立派なことをしたやうな貌して」と評してをる。妻の命を救ふためにしたのなら、立派なこと、至當なことと考へて居るので有らう。つまり、妻が夫の犧牲になるべきで有る樣に、夫も亦、妻の犧牲になるのを要求するので有る。然も、其犧牲の形式とか、場合とかに付いては、極めて原始的な、單純な意見なのである。

「何のためだつて、そんな事は法律は關しません」と、說明せられて、ノラは少からず面喰つて、「それぢや其法律は大間違いです」と、獨斷して、「そんなことがあるものですか、仰有る樣だと、娘が大病の父に苦勞をさせまいとする權利はないわけですね、妻が夫の命を救ふ權利もないのですね、……あなたは必つと碌な法律家ぢやないのです」と、ノラの信念は、何處までも單純な、動機論、非社會的思想で有る。腹立ちまぎれにこんな激語を吐いて、散々にクログスタットを罵つた。多血質的特徴を發揮して居る。そして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

辭し去つた後で、「何でそんな事が！彼奴私を威嚇さうと思つてやがる、私そんな間拔けぢやないよ。けれど――？否そんなことの有らう筈はない。愛のためにしたんだもの」否定はしてをるけれど、稍自分の信念に綻ぎが來た。あはれノラは、美しい美しい天上の星で有る、が地上の花ではない、社會と云ふ風に吹かれて居ない。人間は決して獨存する事は出來ない、現にノラは社會に打ち込まれてゐることを忘れて居る、殊に男の造つた男の法律には、最も適應しがたい、女性的本能的感情で有る、ソロソロ自覺の經路に入りかけて來た。かつて自分はこんな事を敎へられた事はない、社會の法律なんて聞かされなかつた、今まで親や夫のためにすることなら、手段を問ふ必要はないと信じて居つた。然し若し？と云ふ疑が起きて來た。て、ヘルマーが銀行から歸ると、今留守中にクログスタットの來たのはノラの助言を求むるために過ぎなかつたと濁して、ヘルマーのクログスタットに對する批評を根掘り葉掘りして見た。ヘルマーの意見は案外で、うそ、いつはりが、家庭を腐敗せしめ、子供を毒殺すると極言されるに至つて、ノラは果して何んな思がしたで有らうか。二人の思想には、遠い懸隔が有る本能的感情に煽られゐたノラも、內心ひそかに自己を疑ひ始めた。朧げながら、主觀の外に客觀世界の有ることを感じ始めた。（懷疑の第二步）自分が正しいか、夫の考が正しいか、自

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

分が正しいか、社會が正しいか、少からず恐怖に襲はれたが、兎に角、愛のためにしたと云ふ至誠が動機となつてをるから、忽ち心の中で「私の子を腐敗させる！私の家庭に毒を撒く！嘘！嘘！そんなことが有るものか！」と否定はしてゐるが、若もそれが眞理て有つたなら、自分は妻たり母たる資格はない。いかに此事を解決すればいいか、ノラの思想は亂麻の樣に亂れ立つた。然も、ノラは、未だ夫と議論を戰はせて、根本的に研究して見樣と云ふ勇氣もなく、自分の說を主張するだけの自信をも感じ得なかつたらしい。而して、ノラは、少なからぬ恐怖を色にも表はさないで、明日の舞踏會に出る支度にソハソハしてゐる。いかに樂天家とは云へ、ノラの表情が聊か不自然な樣な思がせぬでも無い。何でも思つたことを、フカフカ口外する性質と、多少矛盾が有りはしないか、と思はれるが勤めてそれを秘さうとしてをるのかも知れぬ、餘程强い意志を以て制御せねばあれだけの態度は表はれて來ない。ノラは疑を懷くと共に、心中何事か覺悟する處が見えて來た。然しとりつめた思案ではなく何となく漠然と覺悟を促された、女中のアンナに「アンナや是からは私あんまり兒共と一緒では居られませんよ……母親が居なくなつたら、忘れて了ふだらうか……お前はどうして自分の子供を他人にやることが出來たえ？　私共の子供が、又母を亡くする樣なことが有つたら、お前吃度何だらうね

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ーよそう〳〵馬鹿らしい」。踊の意匠を繕いながら、こんな哀なことをアンナに洩してゐる。ノラの心中を考へて、泣かないではゐられない。ノラは漸く深く考へ始め、主観の聲に促されると共に、客観の聲にも驚かされて來たのである。若も、此事が暴露したが最後、自分は、決して平和を保つて此家に居ることは出來ない。心の苦悶は刻々に迫つて來る。廊下の足音にも焦々する。考へ直しては考へまいと、色々に心をまぎらして居るらしい。リンデンが意匠の手傳に來た時に、「借りたものをすつかり返せば證書は返つて來るでせうか？　返つて來たらあの汚れた嫌なものを、ずた〳〵に引き裂いて燒いて了い度いわ」と獨り言つてゐる。今はノラも、平和を亂す汚れたものと思ひ出したので有らう。然し、ノラは、兎に角、極力平和を彌縫して見やうと、ヘルマーの機嫌のい時に、クログスタッドを採用してやつて下さい、彼は幾多の悪德新聞に關係して居るから、今採用してやるのは夫のため妻のため子供のためだ」と歎願する。けれど、ヘルマーに何うして其譯が解らう。縦令、彼が何んな毒舌を振はうとしても、自分には些の疚しい所はないのだから、少しも恐るるには足りない。まあ見て居れ、私の廣い肩で、何んな重荷が來ても、皆、背負つて立つてやるからと、とても聞き入れない。で、早速免職の宣告をした。ヘルマーが、無理に意志を枉げさへすれば、事は難なくすむのだけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れど、何しろヘルマーは、妻君に口説かれて志を變へたと云はれては、男の意地が立たぬと云ふ論法、どうやら東洋的である。かくて、裏面に、斯那難問題が、有りとは知らぬヘルマーは、ノラがただ、自分が中傷せられて、其速座の不幸の來るのを恐れてゐるのだらう、それは實につまらぬ心配であるとして、易々と引き受けた。二人の考へは其内容に於て飛むだ相違が有るので有る。然もノラは、夫の愛を信じ切つて居るのが、今、此惠深い、頼母しい詞を聞いて、直ちに自分の重荷を背負つて吳れると云ふのだと合點して了つて、非常に感謝すると同時に、又非常に恐怖に打たれて、あなたそれは何を被仰のです?」「重荷をすつかりと云ふんだ」と、愈確たる答へに、ノラは忽ち堅い決心を促された。即ち、自分のために、若もの場合、最愛の夫に何うして罪を背負す事の出來やう。さうなれば、それこそ自分の身一つに責を負て、死ぬより外に道はないと決心したらしい。然もノラに取つては、快い愛の犧牲で有らう。夫が妻の犧牲となるのを快く思つてをるのだと誤解してゐるノラは、亦、美しい、より強い、犧牲を以て酬いたのだと云ふのが、僞のない本能的愛情ではあるまいか。

「あなたにそんなことは決してさせません、決して」と云ひ放つたので、ヘルマーは、むしろ大事らしう云ふノラの詞がをかしう聞えたのであらう。ヘルマーは「よし〳〵ぢや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二人で分擔する夫と妻とでね……今云つた様な事は、何でもないみんな空想だ」と云ひ捨てて自分の室に入るのを見送つて、ノラの恐怖は益高くなるばかり、夫は必度トコトンまでクログスタットと爭つて罪を公にして引き受けるに違ひない。暴露した上で、罪を引き受けるのを恐れて、今更、彼を採用しそして晦ます様なことは決してしないだらう、そうだ、夫は必ず私を救ふべく身を捨てるて有らう。ああそればかりはさせられない。そんな事をさす様なら、何んなことでも出來る。何かそんなことにならないで濟む法は有るまいかと、途方に暮れて了ふ。ノラは夫を誤解してゐる。買ひかぶつてゐるので有つた。一方社會的自覺が大分湧いた來たに係らず、夫に對する自覺は益々暗くなつて行くので有る。二人の考は全く別々で有ることを、互に、氣が付か無いので有る。思案に窮してランクに「トバルドはあんな風ですから私を愛してることと云つたら、全く不思議な程でせう。ですから、何か起りでもしようものなら、私のために命を捨てる位は、何とも思つてゐませんの。」と、確信して、何とかそんなことをさせない工夫をせねばならんと、焦慮してゐる。クログスタットは、免職の宣告を受けて、最後の手段に訴へるべく、愈ヘルマーに事の委細を彈該した手紙を懐にして、どうしても威嚇的に地位を回復せねば承知しない意氣込みで再び來る。クログスタットは、流石に、ヘルマー

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が此手紙を見たならば、必つと採用すると云ふことを見込むでをるらしい。ノラは、金の工面をするから、夫に云ふことだけは止して呉れと頼むが、さてノラの弱點を握つてゐるから、名譽回復の意地、戀の面當てをせねば止まぬと、甘く謀んだ穽にかかつては、如何に、血に叫むでも飽くことでは無い。押問答の末、遂に投函して歸つて行つた。郵便箱の鍵は、ヘルマーの手に在る。幾何ならずして、ヘルマーの手に渡る必死の場合となつた。遂に破滅の期は來つた!! ノラの悲慘な有様よ。夫を持ちながら、獨り苦勞する、思案に窮して終に秘密の第二步即ち名前を僞署してをること（併し罪惡だと思つてはしなかつた）然も債主のクログスタヲトなる事を打明けて、驚くリンデンに「私が斯うして居られない場合になつて、若し誰か出て來て、何もかも自分が引き受けやうと云ふ場合には、凡ての罪は私に在ると云ふ證據人になつて——わかりましたか!」夫を思ふ熱情に沸きかへるノラは、もう十分覺悟した。が、破裂はさせ度くない。そこでリンデンは、昔の戀仲を利用して、必つと先きの手紙を取り返へさすからと引き受けたのは、一は友情に酬いるため、一は現在の自己を救ふためであつたらう。ノラは、ヘルマーを引つ張つて駄々をこねて、明日のタランテラのすむまでは、二人の間に何ものをも挿まない、手紙も決してそれまでは見ていけないと約束してゐる危さ。ノラの様子が何とな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く變なので、ランクは「此先何か變り事でも有るのぢやないがね？何もなければいゝが？」とそれと無く心配する。ヘルマーは「何あに何時も物を氣にかけて來ると丸で赤ン坊になつて了ふ。」と知らぬが佛、一向氣が付かない。ノラはリンデンの報告を聞いて、寧ろ、成行に任せて置くより仕方がないと諦めて、そして恐ろしい樣な、晴がましい樣な心持て、奇蹟の現れて來るのをそれとなく待つてをる。徹頭徹尾夫の愛に信賴すればこそて有る。あゝ自然の趨勢には降服せねばならぬのだらうか。丁度第二日の午後五時、ノラは食堂に入る前、時計を出して明日のタランテラの濟むまて、もう三十一時間の生命だと戰慄する。破滅の時は刻々に迫つて來る。愈第三日の夜、ノラ夫婦は舞踊會に出て行つた。ノラは天女の樣な美しい娘に扮して、滿堂の視線を一身に集めてゐる。かくとも知らぬヘルマーは、誇らしさに堪へぬちしい。夜の十時前後であらう、クログスタットは早速手紙の旨によつてノラの家に來る。リンデンはクログスタットの戀の恨を程よく解いて了ふ。丁度二人の境遇は手を握り合ふに適してゐた。幸福だつた昔の戀が蘇生した。ノラ家の悶着から得た奇貨と云ふべきか、こゝに二組の男女の禍福は地位を轉倒して事態を一變して來る。世の中は塞翁が馬てある。リンデンを得てクロヌスタットは本心に立ちかへつて、今自分がヘルマー家に對してやりかけてゐる事を悔いて取り消

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しの策を講ずる。人間の淺ましさ、自分が窮地に陷れば何んなことでも敢てする。戀の力の奇しい事、中老のクログスタフト、墮落したクログスタットを、喜んで本心に立ちかへらす。人間の萬事は交換問題か、近世の外交史はバランス史で有る。然も此二人は過去のことを、何もかも理解し合つて、たとへ物質的苦勞が有るにせよ、煩累が有るにせよ、幸福な結婚を實現する。リンテンがクログスタットから、「友達を救ふための握手か」と尋付かれた時に云つた言葉、「女つてものは一度他人に身を賣つたら二度とそんな馬鹿なことはせぬものよ」とは世故に馴れた女の名言では有るまいか、甘甘と漁夫の利を貪つて了つた。リンデンは何だか此家に種々わけの分らぬ事情の有るのを感附いて居るから、寧ろ、現實を現實として暴露して、二人が根本から理解し合はねば、小細工や隱しごとでは、今にやり切れなくなると云ふ考から、手紙を其儘にして男を歸らす。リンデンの考は確に穿つてをる。これがリンデンの一貫した意見であつた。夫婦の間に秘密が有つてはならぬ、秘密が乃て平和を破壞する基となる事が多いから。如何なる事でも、眞に信賴し合つた以上は、打ち明けずには居られないものではなからうか。夫の問題は妻の問題、妻の問題は夫の問題で有る以上、毛ほどの隔が有つてもいけない。||それは普通の考へて有らうが、此際リンデンも、ヘルマーの心をよく解してをらなかつたから、此冒險が却つ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て二人の間をつなぐと確信したらしい。姑息的平和は、皮相的平和は、何時か破れないでは居ないであらう。ノラが今まで此所に氣が付かなかつたため＝女の淺墓な然し可憐な考へから＝徒に獨り苦心して＝夫の主義に盲從して＝却つて斯かる時、斯かる人によつて、斯かる方法を有つて、暴露せねばならなくなつた。ヘルマーは、之れが今生のをさめとむしろ捨鉢的に舞ひ狂ふノラの妖魔の樣な美しさを凝と他所ながら眺めてゐるわけに行か無くなつて、焦々しながらタランテラの濟むのを待ち兼ねて、ノラを連れて歸らうとする。ノラは破壞の時が眼の前に迫つてゐるのを思へば、流石此世の名殘に堪へ兼ねて、暫く胸に今暫しと、死所にためらう足下も、人情かと哀れではないか。ああ、何事も知らて、妻に憧れてゐる夫の歡喜の樣を見殺すノラの苦悶、如何ばかりてあらうか。人情から押せば何うしてもつと崩ほれねばならぬ場合てあるが反而に强い意志が働いてをる。ノラは飽くまて夫を確信してをる。「今に見てゐらつしやい、もう唯半時間ていいから、私を殘らせて下さらなかつたのを、後悔なさる時が來るから。」二人の心は天と地とをさ迷ふてをるのてある。あゝ人間の快樂も、儚ないものてはあるまいか。危い噴火山の上を踏みながら、それとも知らて甘い夢に醉はされてゐる。やがてノラは、そつとリンデンからクログスタツトの方の事は怖るゝ必要はない、けれど手紙はとにかくヘル

マーの手に落つることゝなつてをると云ふだけを聞いて、一縷の望みも絶えて了つた。

「……それでもう私のする事は分りました」と、事の切迫したことを確かめた。女性としては、餘りに恐しい度胸の樣にも思はれる。ヘルマーはもうノラを掌中の玉の樣に持ち上げて、ホクホク獨りで恍惚として喜んでゐる。浮世の風は何處を吹いてゐると云つた樣。斷腸の思を小い胸に秘めて、ぢつと怺えてをるノラの忍耐の強いこと。今は昔の赤ン坊でない。急激の間に、取るべき方法を熟慮して誤らないノラの態度、今は昔の子供ではない。今までは右も左も人の云ふなりになつてゐたノラとしては、餘りに分別の付き樣が急激すぎる、心の變轉が餘りに性急ではあるまいか、リンデンがかへると行きちがひにかの家族の樣に親しく毎日話に來た醫者のランクが、それとはなしに永別に來て、死の印の黑い十字架の名刺を投げて行つた。あの男が肉體の自然の破滅に追はれて行く樣が、何だか此ヘルマー夫婦の運命の表象の樣に感ぜられる。さあ郵便箱を開くべき時は來た。此小い箱の中に、二人の運命が投げ込まれてあるとは夢にだに知らぬ人間の愚さ。二人は到底破滅から免れることは出來ないのであらうか。然も破裂＝死＝其物によつて萬事が解決せらるるので有るらしい。手紙は握られた、ノラは殆と發作的に無意識に「手紙！ あゝいけません〳〵あなた―」と最後の絶叫を試みた。けれど大勢は何ともす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ることは出來なかつた。開封に先つて、ヘルマーはもうたゞノラの美しかつた事ばかりが眼に映じて來る。「あのねノラ私は折々そう思ふが何かお前の身の上に非常な危險が降りかかつて來て、そして私がそれを救ふために、身體も、生命も、其他有りと有ゆるものを擲つて見たら何うだらう」と、たゞ何事もなく、たゞ歡樂に充されて夢の樣にこんなことを囁く。手に恐しい爆裂彈を握つてゐるのに氣が付かぬ。ヘルマーの云ふ危險と云ふのは恐らく社會の權威と沒交渉な危險を意味してをるだらう。ノラは勿論實際の場合に臨んで、夫のへこたれる樣なことを豫想しないから、それを夫に實行さす前に、自分の生命を賭して防ぎ止める覺悟て有つたらしい。決死のノラは叫むだ。「さああなた其手紙をお讀みなさい」と、ノラは夫の首に兩手を卷いて、これが今生の最期かと、强く固く哀別の情に咽むだのである。斯る可憐な女心の美しさを誰れか難ずる者が有るだらうか、愛の犧牲にほゝ笑んで、刃に伏した袈裟の貞烈は、實にも袈裟自身にも幸福だつたてあらう。ノラの犧牲、美しい自然の貞節を、若も妨ぐる者か有つたなら、世界の女性は擧つて之に唾しても慊りないて有らう。方法は如何にともあれ。手段は如何にともあれ。夫を救はん一念に、遂に命を捧げやうと決心したノラの高潔さ。活すも殺すもヘルマーの手一つに在る。ヘルマーが手紙を持つて書齋に入る後姿を見送つて、狂氣の如き

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ノラは、之れが切めてもの紀念の品と、夫の上衣を自分に打ちかけ、「もう二度とあの人には逢へない。もう〳〵何んなことが有つても。子供にも逢へない。もう逢へない……おさらばですよあなた―そして小兒等も達者でおいで！」と呼いて廊下から、走り出やうとする其瞬間に、慌だしく扉を排して驅け出して來たヘルマーは、ノラの前に立ち塞がつて、何と叫むだか？　ノラが長い間期待してをつた奇蹟は、今此刹那に現はれるのである。あゝノラは、此際此場、ヘルマーは自分をかき抱いて「ノラ心配するなお前は私を愛する餘りに、こんな危險をも敢て犯し、いざとなつては命までも捨てると云ふのか、感謝！感謝！然し此事は私に一任して呉れ、立派に其責は私が引き受けた」と男の大きい強い手に、包むで呉れるかと思ひきや、恐しい權幕で怒鳴り付けた。「宗教も無く、道德もなく、義務もない、噓言僞善な人間を庇つた＝あれ程愛してやつた其お禮として飛んでもない刑罰を受けなくちやならない、世間は私を共犯人としか思はない＝ゑゝ此惡黨め！」と有らん限りの嘲罵の言、卑しい恐しい我利の惡言を浴せかけられたノラは、餘りの心外に夢かと計り呆れ果てゝ了つた。今まで＝つひの今先きまで信賴してをつた夫の心は、こんなもので有つたかと、八年の甘い夢は忽ち醒めて、今まてして居つた事が始めて解つたのである。命を賭して夫に盡した赤心は、こんな冷酷な淺ましい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

言葉で迎へられたのであつた。ただ人形の樣に爲度いまゝにせられて、慰みものにせられてゐた過去を振りかへつて見ると、實に此何十年かの生涯は空虛であつた。全く自己の存在を認むることは出來ない。たゞ機械や人形と同じ樣に、空間の幾らかを占めて居たにすぎない。娘として妻としての地位は、單に斯る慰みの役目をしてゐたので、一朝其役目に堪へなくなるか、又は、自分の不利にでもなれば、もはや秋扇と同じこと、獵犬の賣らるゝと同じこと、親といへど夫といへど、ただ美しい衣服や、甘いものを食べさせてさへをけば、小鳥は飼はれる、小鳥に取つて、それが無上の幸福だ位の考を以て臨まれてゐたのか。それが親や夫の愛であつたか、いかにも女を踏み付けた次第、侮辱した次第、今まで信じ切つてをつた夫に對して、却つて自分の愚さがうら恥しくなつて、愛想もこそも有らばこそ、淺ましとも、傷しとも、ノラの憤怒思ひやるべしではないか。よくも卒倒をせなかつた、悲鳴を擧げなかつた、意志の强さが偲ばれる。然も其次の瞬間にクログスタットから、「ノラに當てた詫び手紙を添へて、かの證書を送りかへして來るや、ヘルマーは、先づのがれたと、打つて變つて、助かつた！と叫むだ。そしてもうお前を許した、もう濟だ、實際お前は妻として、充分私を愛して吳れた。ただ手段を誤つたのだ…………ノラ誓つて許したよ。」何たる卑劣な心で有らう。捨てるも拾ふも御都

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

合衣錆。悪夢から醒めたノラは、お生憎ながらもう欺かれない。今までノラの決めて居た覺悟は、夫に迷惑をかけないための、眞に熱烈な美しい死の覺悟であつた。今此刹那に忽ち覺悟は形を變へて、自覺のひらめき、「自己にかへらう」と云ふ覺悟であつた。男に對する反抗心で有つた。ノラは冷然と立つて、「人形の衣裳」を脱いだ。そうだ人形の衣裳を脱いだ。そして常着と着かへて、いかにも眞面目に、嚴かな態度で、ヘルマーに向つて最後の訣別をした。「私達は愈最後の極りを付ける時が來ましたよ。考へて見ると、斯うして二人向つてゐて、一つの不思議なことが有りませう？結婚してから全八年、私達は何んな事だつて、つひぞ底の底まで眞面目に話し合つたことが無いと云ふことですよ。」成る程、二人は、たゞそは〳〵と、上つ皮のふざけ事をして居たのに過ぎなかつた。互に心の奥底を語り合ひ、互の性格を理解して、長を尊崇し、短を補ひ、共に倶に心を合せ、手を携へて、眞劔なる深い人生を味ひ、心身を捧げて相共に慰藉し、相互に喜憂を分つと云ふ様な、頼もしい、深い、貴い意義の夫婦ではなかつた。自覺したるノラは、ズット深い處が有る、因習に拘泥せざる獨創の處が有る、他に忠實なる前に、先づ自己に忠實ならんとするのである。ヘルマーは、眞のノラを解してゐないで、たゞ父の家に人形子として取扱はれて居た儘を引きついて、ほんの上つ皮の刹那々々の歡樂の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弄びものとして遇してゐた。其人格を愛し、貴び、敬して來たのではなくて、たゞ人形の容形が可愛らしいと云ふのを慰みにして來たので有る。否女性に對するヘルマーの根本の思想がノラに誤解せられてゐた、ノラ自身も遇せらるるが儘に、たゞ父や夫の好むまゝに、たとへ自分の考はあつても、それを隱して表面の調子だけを合せて行く。よく服從の形さへ取つて行けば、噓で有らうが、何だらうが、敢てかまはないもの、そうすべきものと定めてゐた。それでノラ自身の個性は、半ば父や夫の好みに化せられ、半ば表面を繕つて、宛て人格を沒却して、父や夫の前に藝當をして來たにすぎなかつた。實にもノラは、もつと深い意義の人生を味ふべきで有つた。眞の自己と云ふものに、接觸した人生を、識るべきで有つた。幸福だと考へてゐたのは間違で、たゞ愉快だつたと云ふのに過ぎない。夫から愛せられたと云ふのではなくて、自己のない人形妻となつて、子供と一緒に騷いでゐたのに過ぎない。斯那工合に、二人の結婚の意義は、慰みと云ふだけであつたと云はねばならぬ。點から結婚の意義が誤つてゐて、二人の間には決して神聖なる戀愛は動いて居なかつた。二人は決して人格の憧憬と云ふものに出立してゐない。たゞ父の手から渡された儘に人並に妻を遇する方法に從つて來たのである。敢てノラに限つたわけてはないけれども。醒めて見れば馬鹿々々しい。もう斯うなつては、如何に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘルマーが敎育し様たつてヘルマーが根本的に對女性の思想を改めない限りは、とてもヘルマーの思ふ通りになる様な妻になる事が出來やうか。將又、今の狀態で居たならば、到底子供の敎育所では無いと悟つたもので有らう。ヘルマーは、切りに妻の義務、母の責任が第一だと說く。お前を間違なく導くものは宗敎だと判定する。而しノラは、根本的に疑を抱いたものである。宗敎だ、道德だ、法律と云ふ所のものは、皆自分の考へと違つてゐる。夫の愛だ、親の愛だ、名譽だと、云ふ所のものは、すべてつまらぬもので有る。然も、今までは、盲目的にただ從つて來たゞけのものだつた。「私にはそれより先きに解釋する問題が有るのですよ。私は自分を敎育する工夫を爲なくちやなりません。それにはあなたの助は役に立ちませんから私ひとりで始めます。私がこれ切り茲でお暇を貰ひますのは、其爲ですよ。……何よりか第一に私は人間です。妻たり母たる前に、人間で有らねばなりません。人の云ふ事や、書物で滿足しては居られません。自身で何でも考へ究めて、明らめて置かなくちやなりますまい。」と。僅か三日の間に、多年の宿題は解決せられた。現實は遂に夢幻を破滅し盡さねば止まなかつた。自己と云ふもの、他と云ふもの、すべてが疑問になつた今からは、もはや一刻も斯うして空しく妻たり、母たる、空名を保つて居ることは苦痛でも有り、不安でも有る。自分で自分を考へねば

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ならんと、女性の運命を双肩に荷つて決然家を去らうとした。クログスタットによつて社會的自覺を促されたノラは、ヘルマーによつて女性的覺醒、即ち男子對女性の地位てふ自覺心をそゝられた。

ノラは斯くして端なくも覺醒せられた、ヘルマー家に取つては無上の大打擊て、或は悲劇の極かも知れない。然しながら、必竟あんな姑息な平和、彌縫的な平和は、何時かは破れなくてはならぬ。眞の平和は 決してそんな所に在るものでない。家庭と云つても、たゞ遠い人々が寄り集つて居ると云ふに過ぎない、根底のない遊び場。ノラは自覺すると同時に何うしても新生涯に入らねばならなかつた。長い間の因習を打破し、覆いかゝる黑雲を排除するは、女性自らせねば誰れも知つた事でない。それには夫をも捨て、子供をも捨て、家庭をも見くびらなくてはならぬ程の惡闘をせねばならぬ。今までの愉快な、暢氣な、氣樂な(盲目的だとは云へ)生活。子供と云ふ、人間として此上も無い、强い、深い、恩愛の絆を斷つて、古い社會の苦しい、冷酷な、有ゆる攻擊罵言の中心に立つて、奮闘せねばならぬので有る。ヘルマーは「ノラお前のためなら、私は晝夜でも喜んで働く=不幸も貧乏もお前のためなら我慢する=けれども、幾ら愛する者の爲だつて、男が名譽を犧牲には供しない。」と云ふを、ノラは直に「それを何百萬と云ふ女は犧牲に供して

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居ます」と云ひ放つてゐる。ノラが、今こそ父から夫から不當な取扱を受けて居たことを覺つたので有る。あゝ實に、何億萬の女性は、ノラ位でない、もつともつと、不當な取扱を受けて甘じて居るではないか。ノラの自覺は世界の女性の自覺で有る。否、そう有らせ度い。ノラの此自覺が起ると共に、ノラの奮戰苦鬪は始る。あゝ實にノラには、ストロングウヰルが入用なので有る。今までの安逸を貪つて、自己に不忠實で有つた。其眠れる靈を鞭撻せねばならぬ。男の束縛を脫した自由の境に、思ふ存分な自己發展を圖らねばならぬ。負けるな挫けるな。眞正な人類は、すべてノラの後援者であると云ふ事を忘れないでゐてもらいたい。

（二）ノラの將來

靜に考へて見ると、ノラの將來は、即ち吾々女性の將來て有る。ノラの取るべき態度は即ち吾々女性の取るべき態度で有らねばならぬ。人形の家にあらはれたるノラは、兎に角、娘時代、妻時代、母時代と云ふ形式を踏んで來た。云はばノラの自覺は已にをそかつた。とは云へ、氣が付いた以上は、後ればせながら新生活を始めねばならん。さて其處て、當然起つて來る第一の問題は

人は果して主觀に生くべきか客觀に生くべきか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふ事で有らう。ノラの社會的覺醒は主觀と客觀との衝突で有る。衝突して其何れにも疑を生じたので有る。今までのノラは、ホンの小い狹い主觀の世界に生きて來た。然し其狹い感情的な主觀を以ては、とてもすべての廣い大きい客觀世界＝即ち人生のすべてを解釋する事は出來ぬ。∴單純な原始的な主觀を以ては、到底、複雜な、紛糾してゐる人生を判斷する事は出來ぬ。確に、ノラ以外にも、他の主觀の有ると云ふ事を、認めないては居られなくなつた。自己の信念に搖ぎが來た上は、主觀其者を疑つて見ねばならぬ。と云ふて、直に、主觀を捨てて客觀に從ふ等と云ふ事は勿論出來ぬ。否、ノラには、客觀世界其ものが解らぬ程の幼稚な狀態にあるのである。つまりノラは、主觀を疑ひ始むると共に、客觀をも疑つた。今までの假の主觀を捨てて半ばのこされてゐた新しい自己に立ちかへると共に、今までの宗敎や、道德や、法律や權威をも捨てて、新なる客觀世界を見究めねばならなくなつた。兎に角、先づノラは、自己と云ふものを痛切に感じ始めた。先づ第一に、人で有らねばならんと、男も人で有る樣に女も人で有らねばならんと。此自己なるものが即ち「我」てふ人格を搆成する大要素である。然らば其自我とは何であらう。或人はこれを、經驗我と、純自我との二種に分けてゐる。經驗我とは、客觀世界から得た、後天性の意識で有つて、之を統一するものが、先天性の純自我

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て有る。從て、此經驗我は、個人個人に交渉してをるが、純自我なるものは、全く他とは沒交渉で有ると云つてゐる。成程十人十色或點までは同情し得るけれど、より以上はもう自己以外の他人には、到底同情し得ないと云ふ境域に達する。例は、親を亡くすると云ふことは、悲しいことて、誰れても其人に同情し得るけれど、感ずる心持ち其ものは、其個人に特別て有る。此個人と個人との間に沒交渉の孤立我を、純我と稱し、之を先天性のものとして考へ是等個々の人類の自我を統一するに、信仰を以てする人も有れど＝古來多くは然り＝已に道德律も、宗敎的信仰をも失つた人々には、それては解決することは出來ぬ。嚴密に云へば自己の外誰にも解する事の出來ぬ、自我なる恒性感は、げにも神秘て有つて、全く沒交渉なものゝ如くに考へ、これを現實以外の理想界から先天的に得來つたかの如く考へるのは尤もなことて有るけれど、實は別に先天的に存在してをるわけではなくて、此經驗我なるものが、抑も人の生れ落ちる以來、人生と云ふ客觀世界に投ぜられて、千差萬別の境遇から習慣性を與へられて、それそれ體質に伴ふ意識の發達の程度、構成の方法によつてタイプを生じて、丁度同一物質の原子て有りながら、其原子の結合の狀態によつて、物質界に差別の出來たと同じ樣なわけ。誰れも、かれも、自我なるものは、其周圍から得たものに相違ないけれど、其意識の體系を構成す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る要素の關係で、特色即ち個性を表はして來る。甲の特色を持つて居るものは、乙の特色を持つてをるものに對しては或點までしか同情することが出來ないので有る。悲しみを感ずることは誰れも感ずるが過去に構成した意識體系の如何によつて、皆其樣子が違つて來るので有る。自我なるものは、全然客觀世界に立脚してゐて、然も個々別々の主觀を構成してゐるものと考へられる。して見ると、客觀を離れて主觀は存在せぬと云はざるを得ない。其證として恒性を感ずる自我なるものも、決して一定不變のものではなくて、周圍につれて、時にふれて變化して行くことは事實で有らう。子供の時と、中年時代とは、全く一變する人も有る。そこでかの「自己にかへる」と云ふ事も其根底をやはり客觀に根ざした自己に過ぎない。小なる客觀、狹い客觀世界に生きて居る人は小い狹い主觀しか構成する事は出來ない。カントが何と云はうが、プラトンが何と云はうが、現實界を超越した主觀を形成する事は不可能で有る、所で、小なる主觀に立つた者が、かつて見て居た客觀世界よりも、より大なる客觀世界に踏み入る時は、此所に新なる現實と、主觀との間に衝突を起す、若し小なる主觀に甘じて、大なる客觀を咀ひ、一括として省みないで濟む人はそれでいゝ。けれど、尙も絶えず動いて居る客觀世界を見るだけの餘裕の有る人は、とても幼稚な主觀内に隱れて居る事は出來ぬであらう。主觀と客觀

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

との衝突の結果、現在の主觀に疑を抱いて來る。客觀世界に疑を懷いて來る。そして捨つべきは捨て妥協すべきは妥協して、主觀の內容を擴充して行くので有る。そこに人格の進步と云ふ事とが見らるゝ。で有るから、吾々は、主觀に生きると共に、自由自在な客觀に生きて、自己なるものを進めて行かねばならぬで有らう。一切の社會我を否認する輩は、大砂漠の眞中か、無人島にでも放逐した時に、始めて思ひ當るて有らう。自己自己と云ふけれど、其自己は、決して地から湧いたものでもなければ、天から降つて來たものでもない。第一何を食べて生きてをるか、何を着て生きてをるか、言語は誰れに敎へられたか。客觀を否定する以上は、山に入つて死ぬ外はあるまい。ノラの過去を見ると、ノラの極めて小なる原始的主觀は未だたゞ、單に、周圍の境遇に壓倒せられて、自由研究の餘裕なく、それを咀ひながらも服從して來たと云ふわけで有つたが、現實の暴露は、つひに大なる衝突を惹き起し、此所に自己研究、社會研究の必要を感じて來たのである。ノラには、一時に色々の現實問題が降りかゝつて來て、何が何だか分らなくなつて了つた。兎に角、現狀を維持するのは、不可能になつて來たので有る。過去のノラは、父から命令せらるゝ儘に、自我の發達を沒却して居た。夫の主義思想のまゝに左右せられて、無意識に自分を盲にして居た。否、父や夫やの仕向けのまゝに化せられ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つつ、一向ノラ自身の意識的人格の特色を發揮し得なかつた。換言すれば、人格の發達を阻害せられて居たので有つた。彼も人なり我も人なりと感得し來つた時に、今まで無視せられて居た人格の要素たる「我」の聲を聞き始めたので有る。これからノラは、ただ盲目的に、宗致や、道德の信條にのみ依頼する事なしに、他から制肘せらるゝ事なしに、然も亦、狹小なる主觀に籠城することなしに、公平に現實の研究をして、自分で自我即ち人格の搆成に努めねばならぬので有る。人としての人格を作り上げた時に、再び、妻として、母としての人格は成るので有らう。然も、個人の目的に達するために、他を悉く犧牲にしてよいと云ふノラの考、幼稚な主觀は「共存生活」の社會には、全然不可能で有ると云ふ事を悟るて有らう。手段を咎めないと云ふ考は、錯綜した社會には容れられないと云ふことを悟るて有らう。とかく女性の眼界は、過去の久しい因習に遮られて、如何にも淺く、狹いものが多い。獨り善がりの小い世界に甘ずる哀れな傾を持つてゐる。井底の蛙をかつぎ出すわけてはないけれど、餘りに見識が偏狹になり易くはないて有らうか。點から懷疑と云ふことに乏しい。自己を疑ひ、他を疑ふなどゝ云ふことは、勿論一部の女性にはあるとしても、多くの女は、たゞ因習を神の樣に信じて、頭から呑み込み過ぎて了つて居る。又その反對に、偶、突飛な考を抱く者が有ると、女性

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自ら女性に向つて攻撃の矢を放つて、自ら自らを侮辱すると云つた樣な現狀て有る。之は互に其心掛を理解しないのにも困るで有らうけれど、又一つは、男と云ふものが、女の眼を盲にして、自覺の餘地を與へないからで有らう。

ノラが其通りで有つた。無意識にたゞ習慣を固守して來た。ヘルマーの家庭は、あれて世間並みで有つた。世間並みから覺めたのが、ノラの覺醒で有つた。自己!!自己を作り上げねばならぬ。勿論習はね經は讀めぬから、敎育は受けねばならぬ。受けた敎へに盲從したのが過去、現在の女性で有らう。有ゆる敎へを受け、有ゆる經驗をして、その廣い客觀世界から、新しい主觀＝自己を搆成して、囚はれざる境地を見出さねば、生きた信念は得られないではなからうか。狹い客觀、小い主觀に甘じてゐて、それで複雜な紛糾した人生を批判し、理解することが何うして出來よう。該博なる知識。偏狹ならざる感情は公正なる意志の發展に缺く可らざるものでは有るまいか。女と云はず、男と云はず、人として、苟も進化の原則を是認する人で有つたならば、向上の欲を感ずる人で有つたならば、客觀世界を脫した、原人的孤獨＝動物的の＝を希ふの理は無いでは有るまいか。自己てふ特殊のものは、何れ客觀を超越せざる孤獨には違いなからうけれど、決して原始的のものではなくて、發展したもので有る。若も、絕對的に孤獨なものが有

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るとしたならば、そは吾々が、犬や猫に對する樣な工合に、言語思想は永遠に些の接觸をも見ることは出來ないで有らう。否、犬や猫に對してさへ、其動物としての本能的同感は、幾らか持つことが出來るではないか。若も、ノラにして、原始的の自己を尊び慕ひ、經驗を否定する樣な方向に走るならば、何時まで經つても決して自己發展、自我内容の充實と云ふことは、望まれぬで有らう。將來は、客觀に呑まれず、主觀に拘泥せずして、公平な眞の生命を發揮して貰はねばならぬ。客觀萬能主義も固より輕卒で有るが、主觀萬能主義も固陋と云はねばならぬ。

ノラの行爲の過去の準繩は、唯一の本能的感情に在るかの如くに考へられる　女としてノラはたゞ、愛の刺戟のまゝに、それに適ふ樣にと計つて來たので、ノラ一個人に取つては、何の差支へもない筈で有るから、ノラの良心は、その行爲に就て一の疚ましい處はない譯で有つた、然し、外界との關係が複雜になつて來ると、忽ち故障が興つて來たので有つた。が、其何れが正しいかと云ふことは、勿論直に斷言することは出來ぬ。主客共に理由は有してをる。勢、兩者の何れに就ても、其眞相を極めねばならぬ。必竟研究の必要は迫つて來た、囚はれざる常識を養つて自由の見地に立つた、自我の發展を待たねばなるまい。第二の問題は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て有る。

天地開闢の始めから、男と女とはチャンと別々に造られて有る。獨り人間ばかりではなく、苟も高等な動物で有つて見れば、皆殆ど此兩性を與へて居て、其種族の繁榮を計つて居る。人と云ふ字は、兩方から、互に支へ合つて居る形で、全く互格の共存を意味してをる。太古文字を創造した原始時代に於て、最も正直に、其自然的思想を表して居ると云はねばならぬ事で、これは今の世にも全然眞理だと信じてよい樣に思はれる。元々男と云ふ性格と、女と云ふ性格とは、全然孤立して居て、何によつて兩者を繋いだらいいか。勿論兩者共に、客觀世界から其個性を受けて居るが生理的相違に伴つて發揮する所は、或點に至つてはすつかり違つてゐる。理屈から云ふと、異性と云ふものは、全然沒交渉で主も從も有つたものではない、と云ふて互に孤立した日には、人類は滅亡して了ふより外は無いので有る。が自然の意志は、之が繁殖を謀らんがため兩者の間に遠い隔の有る兩者の中に愛と云ふものを與へて、全然沒交渉の二つのものを繋いだので有る、（同性間もあれどそれとは又特別な）そこで人類の生存を期する限り、先づ何うしても兩性は共存生活を餘儀なくせられてゐる。男と女とは、互に相倚り、相助けて、其發展

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幸福を計るが第一歩。それから之等の男女は、更に又他の男女の組と相集つて、社會を形造るに至るので有る、が根本は二人の男女から始つて來る。これは西洋諸國には疾くに發達して居た個人主義思想で、我國建國の始も、天神が伊弉那美、伊弉那岐の男女の神を降して、國土人類を産せたので、先づ世界の人類として、男女共存の法則は、動かぬ眞理で有らう。さて男女が、相集つて此に家庭を組織する。古事紀には岐、美二神が長短相補つて、創世の大業を完うし給ふ事が、極めて天眞爛熳な表象を用ゐてかいて有る。そこで先づ第一に生活問題が先きに立つて來る。生存と云ふ段になると競爭が始る。男と女と、其身體の構造を比較して見ると、概して男は剛健で、女は纖弱なるが多い。必竟、強い男は外に出て生存競爭の局に當る。女はかげにかくれて居て之を慰め之を安らかにいたはると云ふ分業に成つて來る。(女でも競爭に堪ふるものは、此限りにはあらざれど、)競爭に優勝者たらんとするには、極めて原始時代はいざ知らず、漸く其度が烈しくなつて來ると、唯腕力だけではいけない。智謀とか、意地とか云ふ複雜な精神作用を働かせねばならなくなる。斯うなつて來ると、又それに相當した複雜な精神的の慰安をも要求して來る。相談對手をも要求して來るのが當然で有らう。さて又生存の勝優者は、唯單に、飽食暖衣にのみ甘じては居ないで、複雜な、高尚な精神的の欲望は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

欝勃として湧いて來て、智識欲は科學の進歩を促して世の文明を進めて行く審美欲は、思想人格の醇化を促して行く。然も、是等、日進月歩の舞臺は、獨り男子の占領する所となつて行くにも係らず、女性は何時しか日蔭者。唯、男のかげに云ふまゝになつてさへ居れば、先づ生存は安全だと云つた風で、一向無事泰平。揉まると云ふ事も無ければ、勵むと云ふ事もなく、從つて生理的の弱者たるのみならず、思想も意志も發達の仕様がない。唯單純な、無抵抗な、從者として、長い月日の間甘じて來た。それが因習となつて了つて、女はこれが自分の運命だ、臺所をして小供を育てて、何しろ、男の定めて吳れた事は唯々、諾々、是が非でも守らねばならぬときめ込むでゐる。甚しきに至つては、むしろ無意識に、本能的に、隣の娘もする、母も祖母もそうして來た、自分も子供も孫もと云ふ風に、殆ど必然的の形をとつて了つた。男はつひ此意久地のない小羊をいいことにして、自分の都合のよい様なことを命令して、ウンともスンとも言はせばこそ、罷りちがへば不貞だ、と云ふ熟字を當て嵌めて恐喝する。實際又、斯う心身の發達に懸隔が出來て了つて見れば、其昔は、共に手を引いて進まうとしたのだけれど、今はもう、とても其資格がない、慰安を求めても意に充たない。相談をしても役に立たない、思想上の問題を持ち出しても點から道理が分らない、理屈を推せば嘘の百曼陀羅て

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

逃れ、強く出れば涙で胡魔化す。こんなものに高い要求をするのが間違つてゐる、むしろ奴隷として衣食住の世話と、子供を産ます事と、そして笑はせたり、踊らせたりして、憂さ晴しの慰みとする位が相當な役割だと、心得て了つたのも無理からぬ事である。が、考へて見れば双方共につまらぬ次第で、元々男だつて女だつて、一人で此世に生れて來て、一人で死で行くと云ふことに變りは無い。創世の主意が、男女は相倚り相助けて進で行くべき約束で、家族は互に協心同力、運命をも、生死をも、共にするが當然の次第。然し斯う云ふ風に爲樣と思へば、一つ大々的奮發をして、ツンと女性の素養を造つて、其實質を充實させねばならぬ。それには、今の所、優勝者たる男子の同情に訴へて、引つ張り上げて貰はねばならぬけれど、先づ第一に女性自ら人たる自覺を持つて、自己開拓に努めねばならぬ。それこそ死力を振つて、己の資格を高めねばならぬ。勿論進歩したる家庭を治むるのには、それぞれの、智識技能が必要で有つて見れば、豫めそれ等特殊の修養はして置かねばならぬが、たゞ單に、衣食住だけでは到底滿足する事は出來ぬ。又家政整理が、終局の目的ともし難い。科學上の智識なり、宗教、哲學の思想なり、藝術的趣味なり、とにかく女性は女性の特獨の見地を拓き、充分男の話對手になり、相談對手になり、處世上の片腕になると云ふ位まで、其實力を養ひ度いもので有る。斯うなつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て來れば、男とても相當の敬意を以て女に臨み、女も亦、ひがまないで、しほらしく女性に特獨の長所を以て男をはげまし男を慰め、尊敬して、高尙な内助者人生の伴侶たる誇と、自覺とを有つて立つ事が出來るであらう。然し男の中には、未だ東洋的の野蠻な專制的な思想を有つてゐるものがあつて、唯徒に女を蹂躙盲從せしむるを以て、所謂男らしい男として誇り、今一段下劣なのになると己の力を以て御し兼ねるのを恐れ、或は又自己の亂行を縱にせんために、女を盲にして置く必要上、女の自覺を呪ふ者が有らう。然しそは愚な卑怯な事て、全く姑息な考て有る。眞の男の權利眞の男の自由と云ふものは、決して强いなくても自然に得られるのである。之と同じ樣て、女も今、自己を覺醒したからと云つて、急に自己の權利を主張するが如きは、唯單に空な叫びに過ぎない。無い袖を振らうとするので思はざるの甚しきものではあるまいか。それよりは寧ろ、靜に默つて、自己の開拓、自己の修養に全力を注ぐが近路。確かり鍛へ込むで、高尙な智識と、溫雅な趣味と、熱烈な情味とを以て、男に臨んだなら、いかな亂暴な男でも、冷酷な我利な男でも、其前にひれ伏さざるを得ないで有らう。覺醒したる女性が、血眼になつて叫ぶのは、實に此自己開拓の聲で有る。敵を知らざる者は敗者て有る。確固たる地盤を固めて行かねば、如何に雲衝く樣な建築物も、程なく基礎が搖ぐに相違ない。根據

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の弱い革命軍は、中々成功しがたいのである。名實相伴はなければ、如何に泣いても騒いでも成ることとてはなからう。吾々は一歩も早く目的地まで進んで、男のお對手の仕れる樣、男と肩を並べ得る樣になり眞に云ひ甲斐のある、高尙なる平和の源泉となり度いものて有る。虚利や虚榮のために、此神聖なる女性の品位を賣つてはならぬ、方便や因習の捕となつてはならぬ。男女は、互に、其高潔なる人格を尊重し合つて、此に手を携へて、運命を共にすべきである。男女共に實力が養はれ、人格が成つた上て、さて色々の個性的方面、趣味的方面、學術的方面、其他有ゆる方面の硏究をして、これなら生涯互に相倚り相助くるに足ると云ふ人格を見極めて、いかにも憧憬止みがたく、此に多少の困難なり、妨害なりが有るにもせよ、生死を以て誓つて取り結ばれたなら、そは眞に神聖なる人間の結婚で有らう。斯くて組合はされた夫婦こそ、眞正なる愛の上に築かれたる、立憲共和的家庭を造り出すことが出來るて有らう。夫は妻、妻は夫一心同體になつて、互の幸福を產み出すので、そこに輕侮、冷酷、專制等の分子は見出されないで有らう。從來の家長の命令は相談の形式を以て表はれて來るて有らう。かの親と親との計ひて、肝心の本人の思はくにはトント頓着なく、唯對手の地位、財產等から割出して、結婚させるとか、それでなくとも、女の虚榮心や、一時の熱狂的な盲目的な戀愛に驅ら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れてよく對手の人格を見極めないで結婚したが爲に、後になつて互に失望、ヤレ氣質が合はぬ、冷淡だ、泥人形だ等と不滿な氣分に充されて、怏々として樂まず、家庭の家庭たる意義を失つて、遂に家庭は牢獄だと咀はしむるに至るので有る。神聖なる戀愛に出立せぬ結婚、眞に人格の崇拜に出立せぬ結婚は、眞の幸福を齎らさぬで有らう。それでも男子は相當に慰安の道は付いてをる＝研究なり、事業なり＝がさて目下の狀態では、女の運命は斯うなつて來ると、ミジメなもので有る。貞女二夫に見えずとか、再び生家には足踏みは許さぬとか。愛の無い所に何處に貞の意義が認められよう。實に殘酷は空虛な敎で縛り付けて了ふ。そんな不當な法が、何處にあらう。それは未だしも、支那には三從、七去、印度には、極惡罪人と云ふ樣な熟語が有つて、人類の母に侮蔑し切つた思想を手向けてゐる。そして忠孝の本家本元たる我國までも、斯かる踏み付けた考を母に向つて懷いて來たので有つた。實のない夫婦の名儀など、强ち保つて置かねばならぬことも有るまい。放蕩三昧な夫に奉仕せねばならぬと云ふことも有るまい。女性は女性の氣品を保つて、賤しい媚を賣つたり、全く他人も同樣な家に厄介になつてゐたり、いかにも下劣な、意氣地のない素振などはしてほしくない。女性は女性の覺悟をして、自由の天地に逍遙したらばい丶てはなかろうか。牛馬同樣の女と、愛を爭ふなんて、何と云

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふ見苦しい所業で有らうか。結婚の意義は、男女相互の獨特の長所に對する、崇敬に伴ふ神聖なる愛に基かねば、夫婦が互に生死相誓ふと云ふ樣な、堅固な結合は望まれぬで有らう　貞操は、人間の愛に執着する美しい至情が流露したものでなかつたならば、眞の意義を見出すことは難からうではないか。且又貞は、女の獨占すべきものではなくて、相互に尊重すべき德で有らねばなるまい。

現在の社會は、とにかく其政治組織から、思想から、道德から、法律から、萬事萬端男の世界になつてをる、女は男に都合のいい習慣を强いられ、男に都合のいい信條を强いられ、男に都合のいい思想に左右せられ、男の都合のいい法律で捌かれ、男に都合のいい敎育を强いられ、男の都合のいい批評を浴せられて、默々として、女性の良心、女性の意地、女性の思想、女性の技能は沒却し、阻害せられて、全く男の方便となつて來たので有つた。宇宙の存在者として、いかにも愛惜の至りではないか。路傍の草木でさへ、活潑々地に發育してゐるではないか。一寸の蟲でさへ、自由自在の天地に住んでゐるではないか。男も人間ならば、女も人間、男の法則が有るならば、女の法則もあらねばならぬ。男の法則を以て女を判じ、女の法則で男を批評することは、事態によつては出來得ないで有らうと思はれる。勿論何れ人類としての共通點は、多々存して居るで有らう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれど、全然沒交渉の點も、亦、多く存してゐることは、考へて見るまでもないことと云はねばなるまい。イプセンは此所に着眼して男性に對する女性の地位革新を將に來るべき問題として提供したらしい。ノラは今まで社會と云ふものに觸れない間は、女性としての法律、女性ばかりの掟を、本能的に、無意識に、踏み來つたので有つた。社會の習慣、因習に觸れ、之を知るまでは、女性としての自分一個の本能的信條に、準據して來たので有る。一度所謂社會の法律なるものを聞かされた時に、ノラはそんな法律は間違つてゐると斷言した。女性にはたしかに間違つてゐるのかも知れない。愈其法律は現在有效なものだと云ふことを確めた時に、ノラは疑つた。「今の法律と云ふものは男に都合のいゝ樣に出來てをるのではないか？」と。從て萬事萬端男の勝手に出來てゐるのではないか！と氣が付いて來たら、不安の念は叢々と涌き立つたに違ひない。研究!!知らねばならぬ。女性の運命を定めるため、女性の天地を拓くために、大なる犧牲を拂はねばならぬ樣な氣分になつて來た處へ、夫の妻に對する道を知つた。云ふまでもない。女は男の方便!!に過ぎない。女の人格は男に蹂躪せられてゐる、と云ふことを知つた。ノラは幸にして女性の先天的本能性を失はないでゐた。女性、人類の二大要素の一たる女性の運命を双肩に荷つて、奮鬪を試みるべく思ひ立つたノラは、此遠大な抱負を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

實現するためには、目前の愛着心を犧牲にしても、女性の品位は保たなくてはならぬ、と云ふことになつて來た。斯う考へて見れば、むしろ女性の凱歌とも云ひつべき、喜劇の樣にも思はれるけれど、イブセンが依然悲劇として起稿したと云ふのは、現在の社會狀態、現在のノラの狀態では、必竟此ノラの理想、ノラの意志を、遂行すると云ふことは出來ない。これだけの大革命＝異性間の大革命を成功させることは、むづかしい、三千年四千年來の因習を打破するには、現在の女性の地盤は、餘りに未だ速成で有る。精神的發達の程度に雲泥の懸隔の存してゐる　男性に對抗して行くには、現在の女性の地盤は餘りに淺弱で有る。ノラは其目的を達すべく、忍耐と、努力と、修養と、生活とを續けて行かねばならぬ、一足飛びに、二階に上ることの出來ぬを如何にするか。あゝイプセンのノラは、現實の人ではないけれど、然も現實の人の樣に、世界の女性を代表して、奮鬪し始めたので有る。吾々女性はイブセンに向つて有らむ限りの熱涙を以て謝意を表せねばならぬ。斯かる問題を男性から提供せられたと云ふことは、異性に滿腔の同情の有ると云ふことを、證明してゐるてはないか。ノラの自覺は、一人女性の自覺ではない。現にノラはヘルマーに反省を與へてゐる。今日の男性の專橫は、強ち意識的のものばかりては有るまい。因習の儘に其專橫を續けて來たので有らう。否、むしろ無智蒙

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

味の民を對手にしては、專制を布くの外ないので有る、いかに共和政を施さんとしても、いかに立憲を行はんとしても、之を組織すべき議員なきを如何にせん　要は女性は女性として品位を高むるに有らう。ノラを先驅として眞面目な發展を續けて行かうとする、女性の前途を考へ來つた時に、美しい光明がほのめいては來るもの丶、遼遠の感に堪へられない。と云ふて、不公平な信條に服從することは、勿論不可能でもあるし、とにもかくにも男女は、例外は有るとして孤立して行けるものではないらしい上は、女性の問題は男性の問題になつて來る。女性が血に泣いて向上を企てるのは、必竟人格尊重の考へに外ならぬので、今一つは、家庭をして、眞に、花あり實ある平和な、賴もしいものに造りなさうと云ふ、至情に出づるので有る。つまらない人間と一緒に暮すと云ふことは吾々の向上の慾を滿足せしむることは出來ない。眞を愛し、美を戀ふるは、人類の本能、終日、社會の苦戰に疲れて歸り來る勇士は、眞と美との平和に充されたホームに、其の元氣を恢復するので有る。改革は一歩一歩運ばせて行かねばならぬ。社會改良、風紀矯正を號叫して見た處で、家庭が既に幸福でなかつたならば、始まらぬ次第では有るまいか。女性が早く覺醒して其實價を高めて來ねば、眞の人類の幸福は、求むるの道はないで有らう。元來、男女は喧嘩腰になるべき性質のものではなく、征服的、壓制的態度に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

出づべきものではない。女性は自ら從屬的の考へを以て、只管良妻賢母呼ばりするのは、自ら卑下し、自ら方便視するものと云はねばならぬ。獨り良妻賢母と云ふ熟語が有つて、良夫賢父と云ふ詞のないのは、即ち女の意氣地がなく、實力のないのにも起因して居れど、又、男の勝手なことをも證明してをる樣に思はれる。然し相互の權利呼ばはりは、決して好ましいことではなく、自己主張ばかり爲出した日には遂に平和を欠くに至るやも計られない。畢竟男女は、出來るだけは同情を以て互に讓歩すると云ふこと、妥協すると云ふことが、平和の大切な要素で有つて、勿論、妻となる女性は、良妻賢母でなくてはならぬが、たゞ其義務が、媚てはいけない、屈從ではいけない、眞に異性に對する愛と、同情とに出立して來ねば、女性の品位は決して保たれもせず、相互の眞の幸福は望まれないで有らう。

今又總ての女は、悉く妻たり、母たらねばならぬと云ふこともない。生涯學究なり、藝術なりに献げる人も有つてよく、又生活難とか其他の事情から、結婚の意志は有るにせよ之を實行することの出來ない人も澤山有らう。現に歐米諸國では、年々歲々獨身者を增してゐるとか。それ等の人々は何れ何か職業を採つて、自營自活をしてゐる人で有らう。斯うなつて來れば。女性も純然たる獨立の人間で、男の獨身者と少も選ぶ所はない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

等。要するに妻となつても、或は獨立しても、男性に對する女性の地位は、全然共通均衡のものたるが至當。敢て男の法律に從ふべきものでも有るまい。婦人の參政權もよからん。姦通罪條令の改正もよからん。行々は女性の實力の充實すると共に、是等の問題も解決を見ることゝ思はれる。

自覺したるノラは、主觀客觀の兩面に、人格の素地を充分に養つて、然して男性對女性の品位を獲得せねばならぬ。構へて輕卒な振舞をしては不覺をとつては獨りノラの失敗に止まらないで、世界人類の安危に係ることを忘れてはならぬ。今後の男性たるものも、亦長夜の惰眠を破つて、眞の人間の生涯に入らんことを希ふに至らんことを信じて疑はぬ。

翻つてヘルマーの地位を考へて見やう。勿論ヘルマーは世間並の考を以て妻を遇し、世に處してゐるらしく、若もノラを本能的と云ふならば、ヘルマーは至つて常識的――而も因習に囚はれたる――の平凡な男ではなからうか。彼は、一も二もなく過去の社會から引き繼いた、宗教、道德、法律の信條に立脚して、些の疑を懷いてゐない。人生の根本に立ち入つて目下の自己と相觸れた信條によつて生活してゐるのではない。其意識的に人の定めて置いた法則を神の樣に大切に鵜呑みに呑み込でゐる。獨創の人生觀も、宗

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

敎觀も哲學觀もないらしく見らるゝ　月並に妻を愛し、子を撫て、家庭を思ひ、そして物質的快樂、刹那的歡樂を家庭に與へるのが、家庭の幸福である、妻を喜ばす道だと考へてゐたのでは無からうか。女と云ふものは、昔から臺所を治め、子供を育て、夫の機嫌を取つて保護して貰ふものとなつてゐる通り、決して男の相談對手とするの、人生の問題を考へるの、處世法を講ずるのと云つた樣な、眞面目な事件に與らしむべきものでない。又出來もしないことと定め込んで、女性の敎育、女性の發展などは全く餘計なことゝして夢想だもせなかつたらしい。此考へは、一人ヘルマーの考のみでなく、廣く一般男子の見解ではなからうか。彼のショッペンハーエルの女性觀の如きに至つては、まだ〳〵これより數等見事なもので、女と云へば蛇蝎の樣に嫌ひ、憎み、女は第二位族のもの、淺慮、猜忌、虛僞、虛飾、種の繁殖と云ふことを外にしては、女の存在の意義は認められぬと斷言して憚らない。斯かる女性觀を抱いたと云ふには所以の存することとて有らう。必ずや氏の眼界の女性は、斯かる者を以て埋められてゐたので有らう。之に比較したならば、ヘルマーの如きは余程優しい、妻の人格を認めてゐたか何うかは知らないが、とにかく愛すべきもの、家庭になくてはならぬもの位な不透明な意識を以て對してゐたらしく明確な女性觀を以て遇したと云ふわけでは無かつたらしい。當り前のことと云ふよりも、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

むしろ、より以上の愛を以て臨んでゐるつもりだつた樣に思はれる。ヘルマーの妻に對する態度は、寧ろ一般的で有つたに係らず覺醒したノラは從來の此の普通の態度意識を不當として、革命を企てたのに過ぎなからうと思ふ。今暫く現實の社會狀態、家庭の有樣を考へて見たならば、到底ノラ程の愛と優遇とを受けてをる妻は澤山はあるまい。否愛する資格の有る妻が乏しいのかも知れない。ノラがヘルマーに對つて他人呼はりをするのを、ヘルマーは驚天してゐる。ヘルマーから云へば、ノラに對して愛が無いのではない。たゞ新しいノラの注文する樣な愛を注いでは居なかつたと云ふだけで、ヘルマーの女性觀があゝ云ふ行動を採らしめたのではあるまいか。で切りに、ノラに對つてノラの愛を失つた理由を問ひ詰めた。そして其瞬間、不意と自分の對女性的見解が誤つて居たかしらと云ふことを反省するに至つた。と同時に事態をよく理解して、自分の考を一變し樣とまで決心した。つまり男性が、女性に對する地位の革新を承認し始めたと云つてもよからうと思はれる。大々的讓步を試みようと云ふ意志を表してゐる、と云つてもよからう。之が將來の方針では有るまいか。イブセンの理想では有るまいか。ヘルマーは切りにノラに止まつて吳れと歎願する。切めては兄妹として一緒に暮すことは出來まいかとまで折れて出た其衷心の氣の毒さ、男の自尊心を傷けてまでゝ弱く出たへ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ルマーに、強くも反抗し通すノラの意志は、むしろ憎むべきものの様に感ぜざるを得ない。ノラは徹頭徹尾事の成らざるを確信して、何處までも現状を破壊しようとする。ヘルマーは一人切りに戀々の情に堪へないで、何とかして今一度二人の關係を取り返さうと工夫を凝す時、流石にノラは第一の奇蹟を持ち出して、二人の間が眞の結婚となつたならば……と云ひのこして去つて了ふ。ヘルマーは奇蹟、本當の奇蹟、と繰りかへした時に「希望の風吹き入る」とイプセンはかき添へた。此本當の奇蹟と云ふ意味こそ、これからノラとヘルマーが自覺して、双方共に研究に研究を加へ、修養に修養を重ねて、男性と女性との平衡を得るの日、女性の實價は充實せられ、認識せられるの日が來れば、本當の奇蹟、眞の結婚が實現せらるゝので、有らうと云ふことで、それは未だ未だ遠い將來のことに屬する。今急に、其目的を果さうとしたならば、世界中の女は、皆子を捨て家を措いて飛び出さなくてはならなくなる。飛び出した處で、實力は急に附くものでなし、必竟失敗の歴史に終るのみ、依然として悲劇で有る。要するに女性が覺醒したと共に、確に男性の反省をも促した。兩々相携へて目的地點に達せねばならぬ。それには若干の長日月を要することであらう。

自覺前のノラ、情的一面のノラは、自覺すると同時に急激に其態度を一變して、頗る冷

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

却な意志の女と變つた。意志の發展がイプセンの人生觀から割出されて來てゐるのか？あの愛くるしい女が、忽ち他人呼はりをして指輪を交換するあたりは、一方に悲憤の情に驅られてヘルマーを極力憎み出したためもあれど、さりとて、一片の人情の有るあらば一片の執着心の存する有らば、何うしてあんな落ち付いた態度が表はされやう。今まで愛着してをつた夫、今まで玉の様に大切にしてをつた三人の子供を、貌も見ないで一點の涙をも手向けないで見捨つると云ふことが出來やうか。いかに意志を唯一のものと觀じたとてあんな絡まつた人情の絆が、あゝ何うして斷ち切れたて有らうか。頭を下げて止まつて呉れと賴む男を振り切つて、心强いではないか。イプゼンは此ノラの革命運動が容易の業ではないと云ふことを表はさんがために、此人情上至難の業を秤にかけ較べて見たのではなからうか。ヘルマーに同情して見、ノラに同情し見て、潸然として涙の下るのを禁じ得ない、ノラの噴火山的多血質の一徹心は遂に破滅し終らねば承知がならないので有らうが、今若も之を現實のことゝして考へ、未練を殘すならば、ノラがたゞ一途に一人できめ込まないで、今一應、とにもかくにも意見の存する處、希望の有る處を告白して大議論を戰はして見度い樣な氣もする。そしてヘルマーがノラの意を諒として容れて呉れたならば今より思想を一變し、態度を改めて、ノラの好むがまゝに研究の自由

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を與へたならば、其日から卽ち新生涯は始まるので、敢て此悲慘に立ち至らなくても濟むかも知れない。ヘルマーの身になつて考へて見ると妥協をすると云ふだけの餘裕は、今の小いノラ、過激なノラには出來かねた、あゝノラは本能的感情で一貫して來た。然し然したゞそれだけのことならば、何もイブゼンが事を好んで大きくしたでもなからうが、今一つ厄介な問題は、社會を對手にして戰つて見ると云ふこと、世界の隅々の人の頭にまでも此問題を成るべく廣くひゞかせ、人々の猛省を促さんには、余程破天荒な騷ぎをする必要が有ると云ふ様な理想から出たのかも知れない。過渡時代の思想の產物は往々にして過激なものが現はれて來るのは歷史の證明する所で有らう。現世紀の婦人問題は、女性が男性に對する革命である。專制政治を脫して立憲政體に移るべく實力の養成、異性研究、新知識の輸入……東走西奔の努力問題ではなからうか。幾十年の後に、勝利の月桂冠は、イブゼンの墓前に手向けらるゝであらう。

劇を讀み終つた時に、イブゼンが理想の主張問題の提出に汲々として、余りに巧妙なるカラクリ仕掛を編み上げて不自然に事件の急進を計つたと云ふ形跡、余りに大袈裟に取扱つたと云ふ様な感が有つて、何となく技巧の方面に或は多少失敗してはゐないかと云ふ様な印象を殘さしめた。非か。

——葉——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Agnes Sorma als „Nora“

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人形の家

一、イブゼンの作

先づ第一にイブセンの作「人形の家」を評するに當つて、腦裡に浮むで來るのはイブゼンの多くの劇作、又は其の劇に現れたる作者の個性であります。西歐の劇場に於ての明星イブゼンにはイブゼン其の人にのみ限られたるカラーがあります。シエクスピーヤと云へば英國のリネーサンス時代を思ひ浮べ得ると同じやうに、イブゼンと云へばスカンヂナビヤ其の時代の思潮が偲ばれます。

「人形の家」のみには限らず、イブゼンの作は一體に心理的でありますから、唯茫然として讀むだり、又見ても到底其の作の眞髓を解する事は出來ません。目や耳にのみ訴へてあるのではなく、人の智力に訴へてあるのですから、感覺よりも智力を以て解さねばなりません、アイデアのドラマでありますから、唯平凡な心を以て見て居ましては、矢張平凡と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

より理解する道はありますまい。殊にイブゼンの作は最も私等女性の注意を索く點が多く、捕へ來る作中の女性は其の所謂問題劇のヒロインですから、最も研究が必要だと存じます。殊に「人形の家」のヒロイン、ノラは他の作よりも最も研究する價値があると思ひます。尙ほノラを捕へ來つて、現はしたる道德的社會問題は、我國現代の最も疑問とするところ、又女性としてのノラは、私等過渡時代にありて、右せんか左せんかに迷ひつゝある心に極めて痛切に映る人物であります。從つて「人形の家」を讀み或は見るに當つて、ノラの一言一行は私等に一方ならぬ興味、期待を與へます。又ノラの驚くべき無自覺から自覺に移る瞬間の光景は、實に私等をして卷を蔽ふひ、目を閉ざして思考させる所でして、ノラの心機一轉は、直に以て私等の明日と云はぬ、今現在の大問題であります。イブゼンは斯う云ふ風に女性を捕へ來つて現代の暴露を巧にして居ます。古來からの道德を呪咀して居ます。イブゼンを或人は女子の同情者だと云ひ、又或人は否女子を呪つて居るとも申しますが、イブゼンは決して其の様な主觀を以て描いては居ないと思ひます。イブゼンは人生の批判者でありますから、人間、事物に超越して只管第三者の高さに在つて鋭い刀筆を以て人生を解剖して居るのだと思ひます、丁度手荒い外科醫のやうに、あまりに解剖が凄じいのに、世人は驚愕して其の結果を見ないうちに、與へられた治療の苦しまぎれに、何かと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

狂ひ罵つたのでせうと思ひます。兎に角私等は種々の方面から「人形の家」を批判、研究する必要があると思ひます。

二 ノラの二面の性格

私は別に無自覺のノラ、自覺のノラと分つ必要はないと思ひます。何となれば自覺はほんの心機一轉の其の瞬間を描いてあるので、作者もノラの自覺については無解決のやうに見受けますから、私は順を追ふて無自覺から自覺に移つて行くノラの心理狀態を考究して見ました。

先づ見物人、又は讀者が「人形の家」を始まりから見ますのに、ノラの性格は唯一本調子の世の中の苦勞も知らない平凡の女――否平凡以下の女のやうな氣が致すでありませう。良人からは手飼の小鳥のやうに愛され、金子が欲しいと云ふのも、唯贅澤をしたいばかりのやうで其の心中は分りませんし、毒だと云ふ菓子を買つて來て、隱して食べたり呑氣に唄を歌つて踊つたりはねたりして居る有樣はどう見ても無邪氣な子供です。ヘルマーの所謂

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

可愛い雲雀なんてす　ああ然しそれはほんの外面に表はれて居るノラの影に止つて居るのて、眞のノラはそんなものではない。ノラも自分て云つて居るやうに「他人の思ふやうな馬鹿じやあない」實にさうてす。ノラの内心の苦勞は自分を僞つて居るだけ無自覺の境遇にあるだけに、苦しいのではないてせうか。良人を唯愛する爲めに、良人を喜ばせん爲めに、人形のやうになつて生きて居るのてはありませんか。これは唯ノラにのみ限られた事てはなく、誰しも愛する者の爲めには自らを馬鹿にして居るものてす。世間には斯うした女は何程でもあると思ひます。親を喜ばせん爲め、又我子を喜ばせん爲めには、隨分と馬鹿な眞似も致しませうし、常識にはづれた事も致しませう。ノラが唯良人の爲めにした事は、實に天眞爛熳たるもので、人情の上からは眞に斯くあるべきものでせう。が唯それが餘りに盲目的であつた。智慧が足りなかつたのてす。世間見ずてあつたのてす。然し愛の爲めに僞署したと云ふ事は、決してノラ其の人の人格には關しません。方法を誤つたのてす、自覺しないノラはどう見ても彼のやうな自覺の子とならうとは思はれませんが、然し深く其の内面を伺つて見ると何處かに雄々しげな自覺すべき力があります。丁度萬物皆枯死して荒寞たる冬の野、其の冷い土の下には春を待つて居る芽がひそむで居るやうに、ノラの心の奥には自覺の芽がかくれて居たのてす、外面のノラの性格と、内面の性格と非常に違つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居ます。或は良人に對する非常な愛の爲めに世の危險を犯すだけの力を得て居たと云ふのでせうけれど、良人に秘密な一生の大事業——（少くともノラには）を企てて、其の爲め纖弱な浮世知らぬ身に、世の苦痛と戰つて行かねばならなかつた。

……それに二人とも働かなくつてはなりませんからね。

自分で働いて金子を儲けるのは樂しみです、男のやうな氣になりますからとノラをして思はせ、叫ばしたのも其の金子の爲めであつたのであります。

一面に於て不眞面目であるノラは、一面に於て眞面目であつたのを知る事が出來ます。客に對する睃い同情や、自分の子供や、一家の事を總て人手に任ねて置き乍らも、相當に一家の苦勞をして居るらしいところを見ても、ノラは決して馬鹿ではなかつたのです。

此のノラ自らを僞つた外面の性格と、眞のノラにいそむ内面の性格とが、初めの一幕に於ては並行して行つて居ますが、漸々自己と云ふものを呼び出されるに從つて、ノラの内面の性格が現はれて來て居ます。第一に心の扉を叩かれたは、リンデン夫人に依つてて、次にはクログスタッド、次にはランク、最後に全く良人に依つて開かれて、遂に自覺に透徹して了ひました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ノラは二幕目の始めに於て既に來るべき奇蹟を豫知して居ました。自分のした事が今迄は正しいと思つて居たのに、それが法律に反いて居る、と云ふ事を悟つて、それと同時に自分の今迄得て來たホームの平和、愛情、は立所に消えて了はねばならぬやうな、不安を覺えて居ました。

ノラ「風よりももつと悪い事があるかも知れないよ、子供は什うして居るい？」

アンナ「皆クリスマスの御土産を持つて遊むでいらつしやいます、お可愛相にね、ですけれど……

ノラ「私の事を聞くかえ？」

アンナ「それはもうね、いつもお母さんと御一所にいらしったんですから」

ノラ「そうね、ですけれどアンナや、これからは子供と一緒には居られませんよ」

アンナ「それはもうお小さい内なら何うにでも仕付やう一つて御座いますから」

ノラ「左樣云ふ風に仕付けられるとお思ひかえ、母親が全く居なくなつたら忘れて了ふだらうか？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アンナ「まあ何を仰しやいます。全く居なくなつたらですつて」云々

私等は此の邊を見て、全く、ノラの心中に同情されます。愛兒を捨てて去る——なんと云ふ事は、母親の身になつては夢に見てさへ悲しい事です、それを現れて來る奇跡を待つノラは、全くどんな氣であつたでせう。既う自分の生命が幾時間であると、自ら限つて考へた時愈々奇蹟の現れて來るのが、分つた時は既うノラの自覺の芽は延びて居ました、外面の性格は破られて、內面の赤裸々な性格が現れて來かかつて來ました。

愈々舞踏會が濟めば——となつた時のノラの心はどうでしたでせう。タランテラを踊つた時のノラの心中は、是れが最後と思へば心も氣も狂ふやうでしたでせうと思ひます。

既うヘルマーが手紙を引き出すべき時となつては、ノラは全く決心が出來て居ました。如何な奇蹟が現れるか、目を見張つて突立つて居ました。唯良人——其の良人の人格と自分に對する愛情が如何に此の奇蹟に現れて來るか？此の瞬間のノラは實に雄々しいものでした。

遂にヘルマーは眞のヘルマーを現して了つた。人間の本性、否自己主義、個人主義の男子の眞性を現して了つた。此の時迄ノラと云ふ女性の上に在つたヘルマーと云ふ男性の人格は全く地に落ちて、同時にノラの人格は、ヘルマーより數段上になりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私等は此の奇蹟を見ましてどう感ずるでせう？

ノラの八年間――良人の爲め苦しみ、良人の爲め泣きも笑ひもした、のみか三兒をもなした其の八年間は、ノラにとつては唯此の自覺に達する迄の苦しい道であつたのです。其の永い間ノラは少しも良人に人間らしい取扱ひを受けなかつたのです。唯人形として弄ばれたに止るのです。世にも唯一人の愛人と信じて居た良人の愛情さへ、自分が全く專領する事は出來ないと悟つた曉、忽然として總てに於て目が醒めました。と同時に疑問は疑問を生むで、ノラは急に此の疑問の多くを解決しなければならなくなつたのです。

第一に、自分は一個の人間だと云ふ事を悟りました。人間なら今迄の人形の衣裝を脫いで、眞の人間とならねばならぬ。妻と云ふ名、母と云ふ名の許に、良人の僞りの愛に滿足してのみ居られなくなりました。第一に良人は此の八年間、自分に眞面目な相談一つしなかつたと云ふ事を考へました。

ノラは良人に向つて

「貴郞は決して私を愛して居らしつたのではありません。愛すると云ふ事を慰みにして居たのです」

と云ひ、良人が自分の名譽が地に落ちて、立場がないと悟つて自分を惡罵した其の居の震

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

へも止まないうちに、名譽恢復が出來たと悟つて、一變した態度の餘り淺間しさに
「名譽を何百萬といふ女は犧牲に供して居ます」
と叫びました。
宗教も法律もノラには分らなかつたのです、殊に愛の爲めにした事が、法に反いて居ると云ふ事が、最も不平であつたとみえます。人の妻となつて居ては、自由な研究は出來ないから單獨になつて分らない多くの事を調べて見ると云ひ張つて、遂々「人形の家」を捨てました其の態度は、實に立派なものではありませんか。

四　人形の家と作者

坪内博士はイブゼンの作を五期に分けて居られます。「人形の家」は其の第三期評發時代に於て出版されました、實に此の作の出たのは一八七九年、イブゼン五十一歳の時て、日本の普通の人なら、既に隱居して人生の仕事を終へたやうな氣になつて了ふ頃ですが、イブセンは此の頃が最も旺盛でありましたのです。第二期諷刺時代から進むで評發時代となり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世間を相手に大に戰はれました。「人形の家」に依つてイブゼンは一代の名をなしたと云はれる位て、作者にとつて忘れる事の出來ないのは此の作てす。此の作出て、世人は攻擊を初めました。從來の道德を呪咀した者、社會の風紀を亂すものと、殆ど興業の出來ない程に迫害を加へました。實にイブゼンにとつては奮鬪時代てあつたのてす。

偖て此の「人形の家」はそれほどまてに、何故世を騷がせましたのてせう。第一に此の劇を見た者は、夫婦と云ふものを考へます。今迄此の劇を見た幾萬かの女は、必ずノラの身になつて、先づ我身を顧みたに相違御座いますまい。而して必ずノラと共に覺醒した女もありましたてせう、從つて僞りを以て作られたホームが、此の興業を見たばかりに、破れて夫婦喧嘩が起つたところもありましたてせう、實に此の作が社會に影響したのが甚しかつたのは申す迄もありますまい。

次に世の法律と云ふものゝ不正當なるを思はせます。

クログスタットが法律は原因を斟酌しないと云つた事は全くてあります。愛の爲め、人情の爲めにした事が、其の動機が如何てあらうと其の行爲に於て不正と見なすものは、遂に法の手に囚はれねばならないのてはありませんか。

此の頃のスカンヂナビヤは、丁度日本の明治二十年頃のやうな政事に多忙な、又興奮時代

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てあつたと云ひますから、斯うした問題が又如何に社會の輿論を起したかは想像する事が出來ませう。

以上私は此の作を讀みまして、感じた事を書いて見ました。不幸にして坪内博士の文藝協會の演劇は、未だ下坂せられぬ爲め、見る事は出來ませんが、僅の暇を得てこれだけ筆にして見ました。我日本に於ては未だ未だ自覺せないノラは何人でもありませうし、又自覺したノラの苦痛を味つて居る者も多い事で御座いませう。私等は最も眞面目に女子の立場を考へて進まねばならぬと思ひます。

――みどり――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人形の家を讀む

近代婦人の内的爭鬪は、人形の家の悲劇によつて、極端に表はされた。然して又近年やかましい婦人問題も、ノラが此の爭鬪によりて、遺憾なく理解し得られる感がある。

愛せられて人形の様に育てられた父の家から、見え坊の其のくせ馬鹿正直な辯護士の妻になつて、又人形の様に愛せられ、其の中に出來た三人の自分の兒をも、又人形の様に愛して居た美しいノラは、全く此の間に自らを觀る様な機會はなかつたのでした。

辯護士ヘルマーは、世間ザラに有る男の様に、男子は女より必然的に數等位置の高いものだといふ事を、譯もなく知つて居た、故に小鳥を飼ふ積りでノラを養ひ栗鼠や雲雀を愛する様にノラを愛して居た。

「其處にはね廻つて居るのは栗鼠さんかい。」「オイ〳〵家の小雲雀はそんなに羽を落して悄げてはいけない。」「お前ほどの小鳥も一羽飼ふ爲にどれほどのお金がかゝるだらう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

など〻全然自分を奴隷にした斯ういふ情ない言葉をも、たゞ愛のあらはれだとのみ聞いて、自分も栗鼠になり小鳥になり、お芝居に暮らした日は、後日ノラが自らに生きん爲に人形の家を去る悲劇よりも更により大なる悲劇ではないか、されどノラ自身にはそれが幸福ならずとも愉快であり、又夢の樣に樂しい日でも有つた。斯うしたノラの生活に伴つて、無邪氣な高慢と、可なりな沒常識と空想的情緒とは、まぬがれないものだつた。

斯うした樂しい明けくれの中にも、苦しい場合がないでもなかつた。一年ヘルマーが大病にかゝつて醫者は南歐へでも轉地せねば生命は無からうといふ。然しそうした費用はない。ノラには一生懸命の場合である、借金嫌ひの否、むしろ借錢しないのを自己を守るの主義とさへして居る物堅い良人に秘して、ひそかにクログスタットから大金を借り入れて、夫と共に伊太利へ出かける。其の爲に夫の病氣は、全癒した。今やヘルマーは或有力な銀行の支配人にならむとし、圓滿に、有福に、家庭はいよ〱ノラに樂しさを想はせる。手の屆く限りそこ此處からかき集めては、ひそかに少しつ〻クログスタッドに返金して居た其の方の苦勞も、ヘルマーが支配人になりさへすれば、譯なく證文と引きかへに支拂はれる。殘るはたゞ過去の美しい苦しみの誇りのみである。

クリスマスの日にリンデン夫人が職業を見つける爲にノラの家へ來た。今後自分の支配

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人になる銀行の一員クログスタットを、兼ねて免職させる都合にして居た處なのでヘルマーは、其あとへリンデン夫人を入れ樣と承諾する。クログスタットの免職せられるといふ理由は、彼れの過去にあつた犯罪ばかりでもない、二人はもと親しかつた同窓の友なので、クログスタットが可成りの腕を持つて居る事も、ヘルマーは知つて居る、で、もしや後日自分の位置を危うくさせられる樣なとりこしな危憂から、例のヘルマー一流の小心からである。

クログスタッドは果してノラに縋つて來た、初めて知つたノラは驚きながらも、自分が夫の職務に關して少しも勢力のない事を言つて斷る。クログスタッドは、遂にかの貸金の事を言ひ出し、あの證文にはノラの父の死後にも關らず、父の署名のして有るのは正しく僞證の犯罪だとおびやかす、ノラに取つては花園の嵐だつた。然し大病の父に苦勞させまい爲にした事や、妻が夫の大病を救ふ爲にした苦心、其れが例へ能くない事にした處が、皆愛の爲からである。と、かうした沒常識が恐怖に戰く頭を抑へてゐる。

「ヘルマーが私を愛してくれるのは不思議な程です」「私の爲に生命をすてる位なんとも思てやしませんの」など、ランクやリンデン夫人に吹聽する程ノラは夫の愛を信じて居る。若し萬一の場合に至つたら、屹度私のヘルマーは私の重荷を負つて救つて與れるに違ひない。けれど私はその場合ぢつとしては居られない、「いえ決して貴君にかわつては頂きません。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斯ういつて自分は凡べてを一身に負つて美しく死ぬんだ。ノラの心は大分落ちつきかけた。

遂にクログスタッドの手紙は、恐ろしくも郵便箱へ來て了つた。ア、殘る三十一時間の命―「奇蹟を待つと言ふ心持ちは、言ふに言はれない晴がましいものですよ」とノラはリンデン夫人に言つて、恐ろしい樂しみから來る可き奇蹟を待つた。又その奇蹟を豫想しては「何もかも私のした事です、私の罪です、あなたは忘れずに居て下さい」ともリンデン夫人にいふ。丁度自分を愛してくれる人が自分の死後、どう變つてゆくかを知りたい樣に、矢張りノラも、愛する妻の爲に名譽を犧牲にし樣といふ夫、いゝえ罪は私ですと總べてを負つて、潔く死にゆく妻、かうした二人の愛の力の程度がためしたかつた。全く空想に富んだお芝居的に出來て居る女である。然しノラは今夜の假裝會にする、タランテラ踊り處ではなかつた。されど成可く恐ろしい手紙を永く夫に見せたくない爲には、矢張り踊らねばならぬ、全くヘルマーのいふ生き死にの騷ぎの樣な踊りに相違なかつた。

遂に手紙は夫の手に開かれる。ノラは狂氣の樣に夫の外套を肩にかけて、出てゆかうとする。夫は呼び止めた。

「ノラ」「私を救ふ必要はありません」「本當だ」「ゆかして下さい貴女が私の罪を負つて下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さるには及びませんo」まだ〳〵ノラは夫の愛を信じ切つて居た、けれどヘルマーの憤怒は不思議にも一通りのものではなかつた。自分のことばかりを思ふ利己的な言葉は斯うした非常時に於て遺憾なく露骨に表はれる。

「悪黨め、お前は私の幸福をぶつこわした。私の將來は亡びて了つたのだ。私はお前を買ひかぶつて居た。そうした不德な女に以後どうして、小供の敎育が托されやう。」ヘルマーは口を極めて冷罵する。

私の爲ならば、生命迄もと思つて居た夫から意外！死にゆこうとする可憐なノラの心をフト反抗させた、總身を耳にして身動きもせず立つて居る胸に、突然閃いた本心の光り、幾年の眠から覺めた驚きが、全身の血潮も冷かにして了つた。

其處へ來たのはクログスタットからの悔狀であつた。讀むなり顏の相合を崩してヘルマーは「私は助つた、私は助かつた、お前はもう私に縋りついて居れば安全なのだ」と叫ぶ。

私は助かつた、全く自分さへ助かれば、愚かなヘルマーには譯なく此の問題は解決される。しかし、初めて自覺したノラの心には之れがどう響いたか。

夫の都合のために愛せられ又憎まれる自分の境遇は、全く奴隷に等しいものだつた、思へば同棲した八年間、一度も眞面目な話を、夫から聞いた事もなかつた。かうした二人の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

中にマア私は三人迄も小供を生した。ノラは口惜さに心に泣き叫んだ。「今は妻でない母でない、私は人形の衣をぬいて、眞の人間の生活に入らねばならぬ。」

夫に向つて眞の自己を語る決心は强かつた。遂にノラは小兒の寢がほも見ずに家を出る、けれどたゞ自分の財產を持つてゆく事だけは忘れなんだ。

「ヘルマーがさばかり重んづる名譽を、世界の幾萬の婦人は皆男子の爲に犧牲に供して居る」斯うした悲しいノラの叫びは、スカンヂナビヤの全體の女の叫びである。いゝ世界の凡ての女の悲しい訴へである。犧牲は美だ。愛するものに興味からさゝげる犧牲、其れは美である、けれど何等の報ひなく、必然的に受け入るゝ事によりて、凡べての美の調和は破壞せられてゆく。

悲しくも覺めたる人よ。うれしくも開放せられたる人よ。私共はつねにわづらはされて居る古い道德、古い習慣から離れて、限りない誇りと喜びが不思議にノラの勝利を心に叫ばせる。

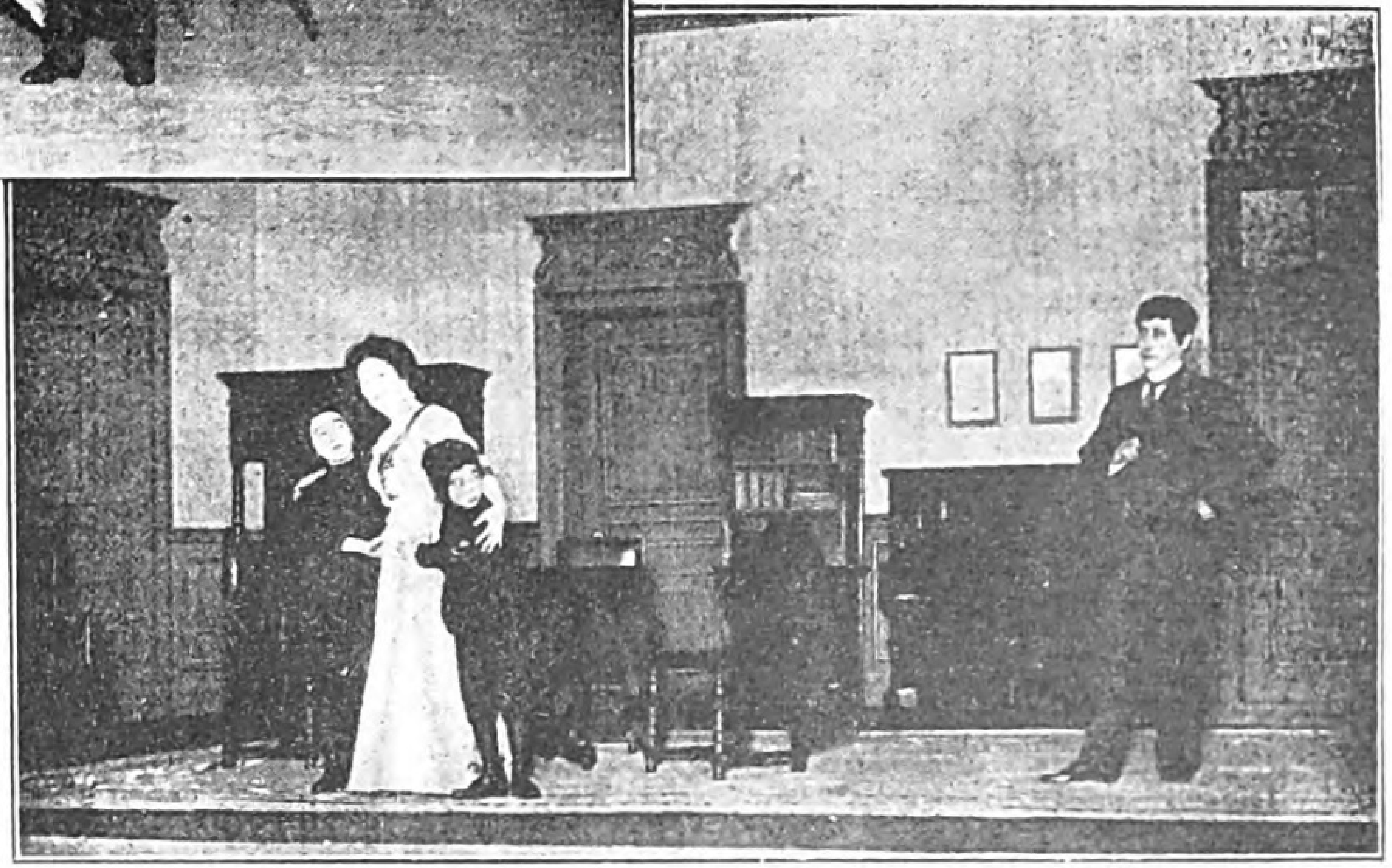
眞の人間の生活の第一步、其の自由の、自然の天地は、新らしき社會を知らしめ、宗敎を敎へ、そして徹底した自己を入るゝに明かな立場を與へるてせう。けれど永久に婦人問題の解決せられない限り、女性の眞の幸福は、いつまでも得られないのではなからうか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幾萬のかうしたノラが苦しみ、もだえて死に切つた時、初めて理想の幸福は女性の頭上に光りを放つものではなからうか。日々につとめて居る自分の斯うした努力を、フト私に馬鹿らしく悲しく思はせる事がある。瞬時、又我れに返つて馬鹿らしく悲しんだ其の心を、限りなく又悲しむ事が多い。

――君――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



文藝協會　人形の家

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ノラさんに

ノラさんあなたのやうに徹頭徹尾、本能的な盲目的な女が十四五の小娘なら知らず三人の母親としてあらうとは日本の女には一寸信じられません。

ノラさん、あなたは人間の誰れでも有つてゐる二重の生活と云ふものをおもちにならなかつた。舞臺の上でお芝居をする役者としての生活は有つて居らつしやるけれど、傍觀者として自分のことをも他事に見てゐる色も香もない靜平な世界を有つてゐらつしやらなかつた。だからあんなことになつたのです。併し私はそれを咎めるのではありません。

ノラさん、あなたのいつも浮々として、無邪氣に、飛んだり跳ねたりしてゐらつしやつた事を內に堪へ難い重荷、――秘密があるからあゝでもして居なければゐられないのだと

解するのは間違ひでせう。

ノラさん、あなたの家出だつてやつぱり盲目的のやうです。自分が思つて居たとはあんまり御良人が違つて入らしつたので、俄に他人のやうに感じられていらしつたところから半ば本能的に出た自衛の態度に過ぎないやうに私には思はれてなりません。あなたの御本意ではないでせうけれど。

ノラさん、あなたは「この八年といふもの、私は見ず知らずの他人と斯うやつて住んでゐて、そして其人に三人の子まで生した。あゝ其事を考へると私はたまらなくなつて—自分の身を引裂きたいやうに思ひます。」といかにも口惜しさに堪へぬやうに仰有いました。さぞ無念なことでしたでせう。この言葉をきいて多くの女は泣いたでせう。併しこれは戀したほどの女は誰だつて一度は味はねばならぬことです。あなたの醒めるのは随分遅かつたのですね。八年間—何だか嘘のやうです。

ノラさん、あなたは愛する夫の爲めに秘密と重荷を、繊弱い身一つに負つて居たことは

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

誠に可憐なこととてもあり、御苦勞なこととてした。けれど、あなたはそれを誇として入らしつた計りでなく、夫の愛が今になくなつた時言はうと考へたり、奇蹟を豫期したりするなんて、その愛が不純だと云ふよりは隨分たわけた考ぢやありませんか。私はあなたが夫からも愛されやうと思つて入らしつた、即自分の愛に對する應報を夫に求めて來らしつたその乞食根性を殘念に思ひました。と同時にあなたが男性の心根をあまり御存知なかつた其不明を惜しみます。男を愛するのは男から愛されやうが爲めでせうか、多少理智の眼の開いた女は男の利己的な、打算的なこと、そこに名譽とか、功名心とか伴ふ場合の外自己の生命を賭するやうなことはしない位なことは承知の上です。(只其利己の上手、下手の刑、文明的と野蠻的の相違がある丈です、あなたの御良人は不幸にして前者に屬したので容易にあなたに氣付かなかつたのでせう。)百も承知の上でなほ女は男を愛するのです、女の愛は己れを他に與へるだけで、與へるといふことを樂しむので、他から與へられやうが、與へられまいがそれは問ふべき限りではありますまい。あなたは少しく、御自身の不明と、乞食根性とをも同時に恥ぢて下さい。

ノラさん、あなたは御良人の利己的なのに氣付くとすぐ、夫の侵略を喰ひ止めやうとな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さいました。否侵略を喰ひ止めることによつて辛うじてあなたは自己といふものを御立てになることが出來た丈だつたのです。そこに何等の自己主張はなかつた。積極的な何ものもなかつた。

ノラさん、あなたの響かせたドーアの音は全く威勢がよう御座いました。併し一歩踏み出した戸外はあなたにとつては眞暗でした。西も東もわかりませんでした。あなたの足どりは見て居ても危つかしい。後から蹤いて行きたい程危つかしい。

ノラさん、あなたは何よりか第一に私は人間ですと仰有つて、「人形の家」をお捨てになつた。けれどまだあなたは人間になつたのではありません。何でも人間にならねばならぬ、とやつと氣付かれた丈です。その人とは果してどんなものかはまだ御存じない。あなたは御良人に「あなたと同じやうに私も人間です」と仰有つたけれど實はあなたの御良人も種類こそ違ひますが矢張り人形でした。人爲的な法則といふものに支配されてゐらつしやる人形です。獨立した何ものもお有ちにならない。物の根底に少しも觸れてゐらつしやらない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ノラさん、あなたの響かせた戸の音はお二人の呱々の聲です。おふたりの人生はこれから始まるのです。あなたのなさつたお芝居は婦人の問題の發足點であると共に男子の問題です。御良人の假面は落ちました。そして又一方には女性に對する見解と云ふものを根本的に御考へにならねばならなくなりました。

ノラさん、けれどあなたのなさつたお芝居は夫婦の關係、男女の見解の相違、親子の關係社會と個人との關係法律と自己の信念(もし信念と云へれば)との衝突等とあなたが二重の生活を御もちにならなかつたと云ふことから起つた悲劇で、そしてあなたは御良人や御子様と御別れになりましたけれど、そこには自分、自分と仰有るまだあなたには正體の分つて入らつしやらない、虚幻がありました。其自分を獨立させやうといふのですから、何となく派手なあなたの所謂晴がましい氣のする、どこかおめでたい悲劇のやうに私には感じられます。

ノラさん私はあなたがあれて自覺を得られたものとはまだなが〳〵信じてゐません。あなたは少し思ひ違へをしてゐらつしやりはしないかとさへ心配してゐます。あの本能的な

盲目的な雲雀や、栗鼠であつたあなたがさう申しては口幅つたいことですが、自覺なさるにはあまりに容易に過ぎはしますまいか。女といふものがこの位のことで人間になれると思つたら大間違てせう、眞の自己はさう容易に見えるものではありません。

ノラさん、あなたがほんとに自覺なさるのはこれからです。あなたの行手には第二の悲劇がまつてゐます。それは虚幻の自己を捨てる悲劇て、曾て御良人や、お子さんを御捨てになつた時の樣な華やかなものではなく、もつと悲慘な、深酷な、沈痛な、個人としてあなたの內部御心の奧底から湧いてくる心靈問題てす。曾ては夢にも御存じなかつた自己心靈上の悲劇に御出逢ひになります。

ノラさん、あなたは家出後、冷かな他人の取圍む中て、人間とならねばならぬ、自分に對する義務を第一に果さねばならぬ、己れに誠意誠心を致さねばならぬと、其爲めにはあらゆる苦痛にもよく御堪へになつたことてせう。と同時に色々の疑問を解く爲めに出來るたけ社會の人間生活を御覽になつたてせう。既成の宗敎道德法律はもとより、今日の政治狀態其他何ても手のとゞく限りは御調べになつたてせう。又それらの矛盾の中に惡鬪を續けられ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たでせう。そして終に個人として勝利を得られた曉、ノラさん、あなたはどんなでした。そこに何がありましたか。私はそれを伺ひたいのです。「自己の自由を得た時そこに自由はなかつた。自己の獨立を得た時そこに獨立はなかつた。」とあなたは悲しげに仰有るでせう。いや、その自己と稱して何ものよりも重じて來たまぼろしが、他と對立して存する爲めに却て自己の自由獨立を得られなかつたと御氣付きになるでせう。あなたの御心の底からは涙のない悲哀と寂寞か湧き出て來ます。そして自分自身が疑はしくて不安で、不安でならなくなつて來やしないでせうか。流石に內省を欠いて入らしつたあなたもかうなつてはまづ何よりも、社會がどうだ、在來の道德、法律がどうだ、男がどうだからうだと云ふよりも、自己の心靈を救濟せねばならぬと御思ひになるでせう。「全體自分とは何だらう」と內に向つて御尋ねにならずには居られなくなるでせう。そしてあなたは何を發見なさるでせうか。それは今迄自分自分自分と思つて居たものが、虛僞の自分、幻影の自分であつたと云ふことです、そのまぼろしの自分の爲めに眞の自分が隱されてゐたと云ふことです。

ノラさん、私があなたに申した、第二の悲劇とはこの虛僞、幻影の自己の呪咀です、否定です自己絕滅の苦鬪です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ノラさん、あなたは第二の悲劇を經て、ノラと仰有るものを痕跡もなく殺した盡した時あなたはほんとの自覺を得られるのではないでせうか。眞の意味で心の底からの新しい女になられるのではないでせうか。その時あなたは眞の自分のいかに大きくありとあらゆる他人を容れてなほあまりのあるほど空しいものだつたことに驚嘆せられるでせう。今迄冷たい他人と思つてゐた人達、自分に對する義務を盡す爲めに他人よばはりをして御捨てになつた御良人や御子さんはもとより全人類が皆んな御自分であつたことを御悟りになるでせう。いやありとあらゆるものが皆んな御自身の心の造つたものだつたと云ふことを見出されるでせう。

ノラさん、私は自覺したあなたが、眞の人間となつたあなたが、全人類に向つて私の血はあなた方の飲物で、私の肉はあなた方の食物ですと叫ぶと共に、御良人や御子さんに向つても同じ様に、たとへ利己的な自分を愛してくれないばかりか、仇を以て報ゆるやうな夫や子であらうともそれを十分承知の上でなほかつ平然として、

「あなたは私です、私はあなたです。私の血はあなたの飲物にして下さい、私の肉はあなたの食物にして下さい。」と云ひ放つことの出來る妻であり、母である日の來るのを信して待

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて居たいのです。

ノラさん、よく聽いて下さい。奇蹟の奇蹟、ほんとの奇蹟とはこれです。この外にありますまい。女の生涯は各個人によつてそこに大小の差異こそあれ、高く、美しい一曲の宗敎的音樂でなければなりません。一篇の詩として眞實なものでなければなりません。ノラさんあなたは若しこゝに入らしやることが御出來にならなければこの奇蹟を身に現すことが御出來にならなければ、ピストルを、毒を御求めなさい、さよなら。

——H——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人形の家に就て

ノラは北歐の大戲曲家イブゼンが、千八百七十九年の作なる「人形の家」の女主人公である。

ノラに就ては大分歐洲の社會を騷がした許りでなく、現今我國に於ても問題として此處、彼處に許せられてゐるやうだ。

然し、どれもどれもノラを通した痛切な婦人側の意見は殆ど見ることが出來ないのは殘念である。（唯氣分の違い男子の評のみで）

この作に現れてゐるノラは少くとも不自然のやうに思はれる。イブセンが特に最後のノラを引立たせる爲、又觀客を厭かせぬ爲に其性格の變化を極端に描出したのではないかと思はれる。

實際、心理學上では斯くの如き不內省的、無自覺狀態から、內省的、自覺狀態に變化する場合、時として急變することがあると云ふことを認められては居るけれども、ノラの如きは僅三日の間の變化だ、然かも理知分明、理性一遍の人と成つたのは最後の一瞬時である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この時のノラは夫ヘルマー以上である。ノラを人形視したヘルマーも人として哀れむべき者となつた。

此の劇は讀んで面白く、觀て面白い。しかも未解決なる問題はなほ吾人の頭に殘つてゐる。毎日考へさせられる。醒めた女はこれを痛快と呼ぶ。ヘルマーの如き世間の夫はあるまじき劇、女に見せまじき作と言ふてあらう。眠れる女は不思議な顏をして他事のやうに見過ごすか、さなくばノラの氣持は更に分らないで、不人情と評する位なところだ。が、少くとも社會問題、人道問題に心を走せて居る人は、なるほど尤もだとノラに同情するだらう。

之は男も女も同じだ。けれど男はおしなべて自由意志を以つて歩む、覺めた女よりも、無自覺な自己に都合よき自由になる、調法な女を嬉ぶらしい。之は社會が未だ進んで居ない證據で、人道といふ觀念が發達してゐないからだ。全體の潮流をもつと進めなければならぬ。

先づ第一にノラの歩んだ人生に就いて考へて見たい。

一幕に現れたノラは自己の行く道を知らない。因習的な考へが彼女の全精神を支配して、妻は只夫の命のまゝに動いて、樂しく、歌ひ、面白く暮して居たらいゝと、夫よりの人形扱いを以て甘じ、家の寶物としての愛に滿足してゐた。彼等は相愛の仲とは云へ、尊敬と威嚴がなかつた。其家庭には夢の樣な歡樂が滿ちてゐたばかり。ノラは雲雀の如く歌ひ、栗鼠の如く多くの藝者をした。子供はこれを喜び、夫はこれを樂しみ、自分も亦面白く愉快であつた。て、ノラは結婚後八年の間忠實に、此藝當を續けて來た。ノラは夫の爲には調法な自由のきく、快樂の相手たる寶物であつた。

女と云ふ名を冠せられた、生きた人形、動物に過ぎなかつた。未だ嘗て人として、人格者として、妻たるの待遇と、尊敬とを受けなかつた。けれどもノラはそれによつて不平を云ふ程の自覺は有つて居なかつた。寧ろ當然のこと、奴隷の如くなすことが女として爲すべき最上の淑德であり、務めであると思つて居た。だから自分は夫の爲、家の爲、子供の爲めには、良き妻、よき母、よき主婦だと思つて許して居た。かくの如くノラは單純に、惡意のない、一少女の樣に無邪氣な女であつた。

ノラはどんな待遇をされても、自分の爲めには生命でも捨てゝ吳れる夫であると疑念なく其愛情を信賴して居た。愛の如何なるものなるかを深く考へても見なかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘルマーは叉酒の如く、甘露の如くノラを見に居た。ノラは眞面目なことなど考へられない女である、猫犬の愛を以て對すれば足れりと云ふ態度で、子供のやうにあまやかして居た。こんな風に夫婦の間は何等の價値なく、實に馬鹿々々しいものだつた。二幕、三幕となるに從つてノラの心事は複雜になり、煩悶、苦惱に滿されて來て、秘密暴露と共に遂に自覺の門に入るのである。

ノラは彼女自身の生涯の誇として來た秘密があつた。——夫の生命を救ふ爲めに最後の手段としてとつた夫へは極内密の借金があつた。

ところが其證文が計らず自分を法律上の罪人たらしめ、引いては夫の不名譽となると云ふことを知らせられた。金の世話人は夫の友達であつたクログスタット云ふ銀行員だ。彼は今度新に支配人となつたヘルマーから免職させられむとしてゐる。そこで、そのとりなしをノラに頼む。もし出來ないならば止むを得ぬから其秘密をヘルマーに話して救つて貰はうと云ふ。ノラはこれを悲しんで、子供があるからと哀願する。しきりにクログスタットをヘルマーに取り持つ。ヘルマーは不正なクログスタットと共に事をすることを深く思はない、のみならず尙自分に不利であると云ふことから彼を免職せしめてしまつた。クログスタットの手紙は遂にヘルマー宛に彼のポストの中に入つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

これからとう〳〵悲劇の幕は開かれるのだ。此の間に立つたノラの苦心は大抵ではない。「私は發狂しさうだ」と自身て言つて居る位に煩悶してゐた。

これはクリスマスの前夜の出來事だ。

彼クロクスタットの手紙はポストの中にある。ヘルマーがそれを見ればノラは最後だと云ふのは自分を命にかへても愛して呉れて居る夫は自分を救ふ爲めには屹度犧牲になつて呉れると深く信じてゐた。あゝ此の秘密暴露はノラの運命に悲さ事實を齎すのだ。彼女は最愛の夫と可愛き子供と別れる苦痛を思つてなるたけ此運命をよけて居た。けれども一つは夫の愛が見たかつた—多年待ち望んで居た奇蹟が——て、ノラは恐怖心を以て待つても居た。

丁度クリスマスの前夜のタランテラ踊がすんで歸つて來た時ヘルマーはかう云つた。

「あのね、ノラ私は折々さう思ふが、御前の身の上に非常な危險が降りかゝつて來て、そして私が其を救ふ爲めに身體も生命も其他ありとあらゆるものを擲つて見たらどうだらう」と。そしてそれを言ひ終るや終らぬにノラはかう云つた。

「さあ、貴方、其手紙を御覽なさい。」

今迄恐れを以て極力止めて居たクログスタットの手紙をすゝめて開封させた。其舌の根

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の乾かぬ内に奇蹟を見やうとしたのだ。ノラは夫の心に對して一點の疑念もない。ヘルマーが手紙を讀みに部屋に入ると同時に家を出て行かうとした。讀み終つて驚いたヘルマーは手紙を持つたまゝ部屋から出て來た。ノラは「私を救ふ必要はありません」と信じたまゝを言ふ。ところが意外にもノラが長い間の奇蹟の夢はむざ〳〵と破られてしまつた。

今言つた夫の言葉は皆僞りだつた。夫の愛のあまりに利己的なのに呆れた。自己に不利な場合ノラに對する言葉はたゞ暴言と罵詈とであつた。夫の無情輕薄の男であつたことを知ると共に忽然としてノラは長夜の夢から醒めた。ところが再びクログスタットから證文を返して寄越して來た。あゝこの時ヘルマーの心は猫の眼玉よりも早く變つた。優しき言葉が續々とノラの耳を突いた。けれどもだん〳〵内省的になりかけたノラが批評的に夫を見始めた此時、恐ろしくも身震した。もう全く今迄のノラでなくなつた。敬意と信頼とを以て見て居たヘルマーを輕侮と淺間しさを以て冷やかに向へるやうになつて居た。

ヘルマーが「お前は妻として充分私を愛してくれた。たゞ手段を誤つたのだ。けれど私はそんな弱點の爲めに御前を疎略にするやうな男しやない、たゞ私に寄り縋つてさへ居ればいゝ。私は御前の相談相手にも、案内者にもなるよ。萬一此女らしい御前の弱點の一倍哀れにも見えないやうな男なら、ほんとの男ぢやない……」とか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ノラさんは生粋の男の胸中といふものを知るまい。男が自分の妻の過を心の底から眞直に許した時の心持と云ふものは言ふに云へない、美しい穩やかなものだよ、女は其時から二重の意味て男の持物になる。言はゝ二度生れたやうなものだ。妻であると共に子供になる云々」と厭味の多い言葉の陳列、益々ノラは男心を卑しく思つた。今迄のノラだつたらそんな言葉を悅んできいたかも知れない。けれどももうそんな甘い僞の言葉に左右せられるやうなノラではない。彼の心は鐵石のやうに固くなつた。

今に利害關係が起つなら又前の樣につゝ放すのだ。信ずるなかれ、あぶなきは男心よと、夫の愛の全く利己に過ぎなかつたことを思ふと同時に、自分は人形のやうに取扱はれて來たのだ、今迄幸福と思つて居つたのは大間違だつた。夫は少しも自分を解して吳れたのではないのだ。こんな他人となぜ今迄八年間も一緒に住んで三人の子まで生したらうと思ふとたうとうたまらなくて、身も世もあらぬ氣持かして來た。自分のして來た過去現在が淺間しい。誠意から出たことが社會からも夫からも、呪はれなければならないとは、あゝもうこんな他人の家に長く居ることは厭だ。かう思つたノラは奮然、家を去うとした。夫を救ひ、自分を殺さむ爲めに家出を最初決心したノラは、今や反對に夫を捨て、子を捨て、自己を救ふ爲めの家出と變じたのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘルマーは驚いて止めた。ノラはきかなかつた。最後の極りを付けねばならぬと言ふので、色々ヘルマーに話した。ヘルマーは悲しげにノラの愛を失つた原因をきいた。

それは八年間豫期して待つて居た奇蹟が現れなかつた今夜だ、貴方は屹度クログスタットの手紙を御覧になつたら、そんな事位にへこたれないで、こんな事位世間に公にしろ、罪人は私だつたと言つて下さるだらうと信じて居たとノラは云つた。

「いかに愛する者の爲めだとて男が名譽を犧牲にすることは出來ない。」とヘルマーが云ふ、と

「其を幾百と言ふ女は犧牲にして居ます。」とノラは心に泣いて叫んだ。なほ男の輕卒な心を見破つて、

「私でなく貴方自身に――もう大丈夫となると、貴方はもう何處を風が吹いて居ると云ふ風にして入らつしやる。私はもとの人形になつたり、雲雀になつたりして了ふ――弱い臆い人形だ、と云ふのでこれからは又一倍いたはつてやると仰有る。貴方、其時私は眼が覺めました。此八年間見ず知らずの他人と住んで居て三人の子を生した。其事を考へると、私はたまらなくなつて身を引き裂きたいやうに思ひます。」と

自覺の聲はかう呼んで居る。今のノラは全身只悲哀と痛恨に燃えて居る。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あゝ二人とも全く變つて、二人の間が本當の結婚にならねば此の人形の家をして人の家となすことは出來ない。けれども自分は未だ夢から覺めた許りだ。私は何より大事のことを忘れて居た。母たるの前に妻でなければならぬ。否、何よりか先きに人にならねばならぬ。これは實に根本問題である。自己の敎育が出來なくてどうして子供の敎育が出來やう。忠良なる妻として夫の伴侶となることが出來やう、とノラは第一になすべき自己敎育の義務を忘れて居たことに氣付く。

そして自己を敎育するにはどうしても此の家を出るより外にない。それより自己を救ふの道がないと信じた。で、遂に決然、雄々しくも自由意志を以て理性の導くまゝを、眞理の爲めに潔く身を處した。

實際、彼の家庭には到底一度は家出の悲劇を見なければ自覺の光明は入り來らないだらう。ノラには人形が居なくなればヘルマーも或は救はれるかも知れないとの多少の希望もあつた。

ノラの心にはなほ家も、夫も、子供もあつた。然し家に居ては二人を救ふの力なきを知つてた。ノラは最後の奇蹟―二人の間が全く結婚にならねばならぬとを云ひ遺いて家を出て行つた。ヘルマーの心には希望が吹き込まれたので、劇全體は終つてゐる。然して此後に何

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大問題が殘つて居る。家出後のノラはどうなつたらうか、これは誰でも思はせられるとだ。

以上はノラが家出迄の經路だ。私は寧ろノラの勇氣と決心とを賞するものである。かう思つてもなか〱決行するの勇氣は起らない。社會だとか道德だとか、人道だとか何色々な美しい名義の下に決心を鈍らされるものだ。そして知らず〱又あやふやな生活を繰返すことになる。それと知つて敢て決行したノラは嬉しい。ノラの家出を非難する人はノラの心事を知らぬ人だ。然し社會に無經驗な向ふ見ずのノラは家出後どうするだらう。家出後のノラに就て私は云ひたいことが多い。けれど頁數が許さないからほんの一端をかいつまんで述べて置く。

彼女はまづ目下の口を糊する爲めに何とかせねばならぬ。音樂か、舞踏などの興行者の仲間入りでもするより仕方がないかも知れぬ。其間に色々社會上の人と人との交際によつて敎育せられるであらう。自意識は强くなると共に彼女の愛情は荒んで來るだらう。だんだん子供を思ひ、夫を思ひ出すかも知れぬ。彼は再び大悟して家に歸る、——否歸らなければならぬのだ、覺めた女は。そして彼女が望んでゐた奇蹟の結婚は行はれる。ノラは全身全靈を上げて從順に夫に仕へる、夫も同じ心を以つて人格として妻を愛する、共に子供を敎育する、然かも二人は相互に個人の自由意志を尊重し、相助けて人格の完成につとめ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。

彼等の家庭は此に於て眞の幸福と光明がさし込んで、價値あるものとなる。彼女が天職は其ために光輝を增して來た。彼女が理想は一つ〱積みあげられて進歩して行く。

これてノラの終局は告げられた。

人形の家全體は婦人が無自覺狀態より自覺に至る經路を描いたと、同時に男子に自覺の急務を說き且これを促してゐることが分かる。これ婦人問題は男子問題と離すことが出來ぬものだからである。

ヘルマーは修養に務め、人格を重ずると云ふ樣な、高尙な、深さのある人とは思はれなかつた。彼はどうしても淺薄なる道德家、即彼は自己自身が修養の結果、社會の道德の本源となりこれを支配して行くと云ふよりも、既成の習慣や道德、法律に支配されてゐる人だ。

あゝ私は眞理に覺めない、神に行かない人のみじめさが思はれてならぬ。彼等は自己を知つて居るつもりても知つて居ない。後から〱傲慢不遜の自分が哀れな姿で現れて來る。なかなかに眞如の自己が現はれない。實にヘルマーは道德律に支配せられて體よく世を渡る人である。ノラはクログスタット事件によつて夫より自覺を與へられ、ヘルマーはノラの家出によつて人間に立ちかへらされた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

神から造られた人は本來男女の別なく、人として同價値のものである。もし人格完成に努力し、熱中して居る人だつたら決して男女の差を以て、尊卑を分つやうなことはしない。これ他人の人格は同時に自己の人格であるからだ。私はかう云ひたい。婦人の愚は男子の恥となり、男子の愚は婦人の恥となる、斯くの如く男女の問題は密接な關係を有つて居るのだ。

ノラ問題は同時にヘルマー問題で、同時に社會問題である、これを根本的に究めて行くと宗教問題に到着する。

人形の家は劇としてとゞめて置かずして、私共の日常生活に結びつけて考へて見る必要がある。又考へる丈けの價値あるものだと思はれる。

――Y――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

曾てはイブゼンを詩人だと思つてゐた、
今は彼を巧な職人だと思つてゐる。
彼は到底作爲に生きた人である。
イブゼンは詩人でもなんでもないのかしら。

○

イブゼンはいろいろの偶像を破壞した、
けれど惜しいことにはもつと大きな、恐るべき偶像を自分の腦に刻み付けて仕舞つた。
さうしてそれを破壞することは彼には遂に出來なかつたらしい。

――らいてう――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人形の家

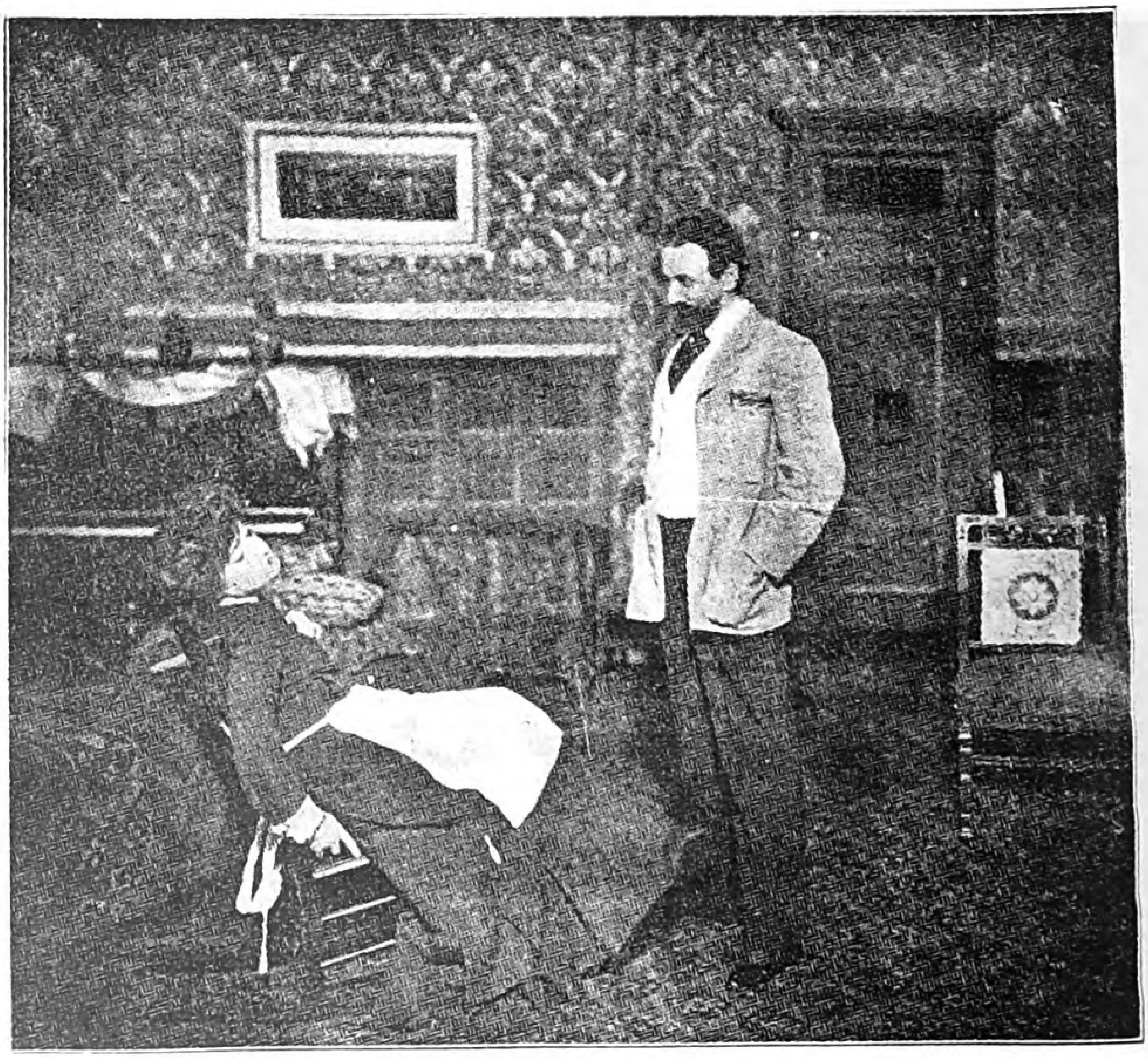
ジエンネット　リー

「人形の家」から多くの問題が提出された。此の劇が濟んだ後、婦人倶樂部の茶の席で、次の様な話があつたといふ事である。「ノラが夫を捨てたのは正しいことだらうか」、「ノラの結婚は理想的のものであつたらうか」、「理想的でない結婚は、眞の結婚とは云はれないだらうか」、「ノラは夫を欺かねばならなかつたらうか」、「證文に僞署したのを正當なこととせられやうか」、「法律を無視してよいものであらうか」、「ノラの行爲は、理想的であつたらうか」、「イプゼンは、相互に信用のない結婚を信じて居るか」、「結婚した婦人は甘い樂しみを受くべきものであらうか」。

然し、此の戲曲の眞義は、恐らく、以上に擧げたものよりも、もつと、普遍的で、また或ものはもつと具體的でなければならぬ。近代の人生問題として、問題劇が、人物に依つて議論されやうとも、脚色に依つて解釋されやうとも、今迄のあらゆる名高い藝術家と同じく、イプゼンには何の交渉もないのである。彼の戲曲が近代生活の境遇及び、性格を取扱つて居る點で云へば、問題劇といつてもよい。けれ共、此の劇が、普通の意味の所謂問題を故意に呈するものでもなければ問題を解釋するものでもない。

ジョセフ、コンラドは「青年」に、話の二種類を記載して居る。其一は、話を話の意味が繭のやうに取り圍んでゐるもの、其二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



"a doll's house," act 1.

Mrs. Fiske Max Figman.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は丁度胡桃の心核のやうな、話の意味が、話そのものゝ中に包まれて居るものであるといつて居る。尚、此の外に、其三として附け加へたいのは、其意味が半ば話の內側に、半は外側にあるもの—柔かい、そゝのかすやうな、神秘的な、何處迄も擴がつて行く、暗示的な、そして、折々は、內部から發する一閃光によつて輝き渡る靄である。イブセンの意味するものは此の三種に屬して居る。この象徵は、即ち脚色であるのは云ふ迄もない。然し、話の周圍に或は、話を取り卷くものは、時々認められる、翻弄的な、つかまへどころのない種種の意味である。誰でも、これを見ると、何か奧に隱れた意味を感じる。そして更に其眞義を突止めやうとして熟讀する、けれども中々摑めない。と云ふのは、其處に無いからである。眞の問題は、單に外面の劇を見る計りでは窺はれない。只、其の人物、脚色、象徵によつて、內面から、パッと閃光が投げられる時、初めて顯はされるものである。劇を瞭解しやうと欲する人は、先づ第一に、劇に表はれる人物を知らねばならぬ。が、人物は、劇の眞髓になつて居る象徵を摑む迄は分らない。

例へば、「人形の家」の問題は、ノラと、ヘルマーとの結婚關係に係はつてるのである。ノラの性格に係はるのである。ノラが、夫の命を救ふ爲に、贋證文を書いたのは、正しいかどうか、と云ふ問題は、ノラのノラたる處、又、ノラなるが故に、人生に面を向けて、自己を見出したと云ふ事實程大切ではない。これが問題であるとすれば、シエクスピーアよりバーナードショーに至

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る迄、作劇家間の一問題であつたらう。愈々幕の開くのは、ノラが贋證文を書いてから七年後の處で、快活な跳ね廻つたり、囀つたりしながら、氣輕なノラが、馬、劍、喇叭、人形、搖籠のやうな少さな、安つぽいーが一々愛の籠つた、子供等へのクリスマスの贈物を持つて出て來る。尙其他に、一袋の菓子パンを待つて來て、一寸一つ撮む。ヘルマーに嚴しく質されると、觸りもしないと云ひ譯する。ヘルマーからは「小雲雀」だの、「栗鼠」だの「無駄遣屋」だのと呼ばれて居る。彼女は何處迄も人の心を惹きつける、不正直な、いつも飛び跳ねて計りゐて、少しもぢつとしてゐられぬ輕率な、氣輕な、氣まぐれ者てある。けれ共、一度び調子が一變して、深い響が傳はると、此の浮々した小雲雀が、眞面目な天性を失はせた迄の秘密と、重荷を長年の間脊負つて居たのを知れば誰しも驚かずにはゐれ居らぬ。ノラの性格は、有り得べからざる、不可解なものであるが其の中に、何か人に現實と思はせるやうな質實な力がある。ノラは子供への可愛らしい贈物としてクリスマスツリーや、菓子パンをやつて喜ばせやうと思ひ、又トルヷルドを驚かしてやらうと思つて居た。そして最後に最も肝要なのは、假裝舞踏である。ノラは以前夫から敎はつたナポリの舞踏、タランテラを踊る筈である。そしてノラは、夫と自分との爲に殆んど夢中になつて居る。

タランテラが即此劇である。

此劇の自然に發展して行く順序を追つて見て行けば、タランテラは單に、舞臺上の意匠、或は、假裝舞踏の型を見せる、劇中

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のエピソードとしか思はれない。けれども、タランテラは普通の舞踏とは異なり、タランツラと云つて、其の迅速な身體の動作と、めぐるめくばかりの廻轉とが、毒にあてられた犧牲者を思ひ浮べさせる。狂氣のやうに、グル／＼廻る。廻る毎に速度が加はる、喋べつたり、飛んだりしながら、遂に倒れて仕舞ふ。これを救ふのは奇蹟の外にないのだ。

　タランテラは、ノラの象徴である。その荒々しい、いら／＼した動作が、彼女の悲劇を包んで居る。外にはさも浮々した風を裝ひながら、内には致命傷を與へた重い秘密を隱して居る。これが、ノラの人形的生活の恐ろしい絶頂で、同時に、イプゼンが必ず其の劇の絶頂に入れる重要な象徴であり、又、この脚色の中心となつて居る。凡ての動作は皆其の方へ向ひ、又それから出て來るのである、恰も高く上げた火把の様に兩面を照してをる。

　此の光に照されてふりかへつて見ると、ノラはも早や予盾したものでも、無能なものでもなく、何處迄も統一した性格を有つてゐる。予盾は彼女の根本の性質である。胸の中に蟠りがある時は何時も踊つたり、喋べつたり、唱つたりせずに居られない。ノラの血管には—生活の一面は毒が流れて居るのだ。が、如何してさうなつたかは、大切な事ではない。ノラが、自分のみならず愛する者へも苦痛を與へまいと思つて、獨り胸の中に、恐れ、悶へて居たと云ふ事も別に大切ではない。斯ういふ事は皆筋以外のものである。只だ奇蹟、トルヴルドの愛から起つて來る奇蹟さへあれば、直ぐに救は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れるのである。若しその奇蹟が現れて、彼女の苦みをトルヴルドの身に引き受けて與れるのであらうならば、ノラの喜びはどんなであらう。ノラは、自分の血管に漲つて居る毒は、クログスタットの仕業て、この苦しみは、全く彼ひとりに係はることだとばかり、絶えず思つてゐた。彼女の爲には、クログスタッドこそ、トルヴルドにした様に恐ろしい爪を胸にさし込んで、苦しめる惡魔だと思つて居た。然し事實は全く反してゐた。トルヴルドはノラの苦痛―この陰氣な、たよりない苦痛、この厭はしい苦闘―死ぬ迄踊つたり、唱つたり、笑つたりしやうとする荒んだ欲求―を分かたうともせぬ。果して、奇蹟が起るだらうか。ノラはトルヴルドの我儘な、卑劣な本性を初めて知つて、進んで自分を解放する奇蹟を作つた。激しい舞踏も濟んだ。毒も消えた。そして、明かな眼で、物事を見るやうになつた。「ハイ、私は着物を着かへたのです。」といつた通り、彼女の生涯はもう早や假裝の時代ではなくなつた。最早や心の苦悶を舞踏にまぎらさずともよい。ノラは遂に人形の家を捨てた。彼女を歸らずには、奇蹟の奇蹟が起つて來ねばならぬ。

此處に「人形の家」を撰んだのは、イブゼンの劇中、最も人に能く知られても居るし、タランテラは他の劇のシンボルよりも明かで、且つ巧みなものであるから、イブゼンの象徴主義の一例とした積りである。然し、此の象徴は、他の劇のもの程完全して居るとは云はれぬ。尤も、根本の點に於ては、此の劇にふさわしいが、細かい處には餘り密接な關係が組み込まれてない。ノラの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

苦痛を更に加へた醫師ランク、及び、罪を二重にした、クログスタッドの二人は、此の劇の絶頂、即ち、タランテラ舞踏のある間舞臺に出て居る。凡ての移動は、此の象徴を中心とし、其の中に使はれる道具も、一々これに關係して居る。これが此の劇の表面上の趣向で、外部の事件は皆その爲に起され、劇を活して働かす人物の性格を助けて居る。この劇の意味を解しやうとすれば、先づ、この象徴と、ノラの行爲を解して居らねばならぬ。

「人形の家」はイブセンが、前に述べたやうな象徴を使つて作つた第二の作物である。其後彼の書いた劇が十種程あるが、何れも、象徴の用ひ方が漸時熟練して、益々綿密になり、複雑になつて來た。

人形の家て、イブゼンの主要な特色を明かに認める事が出來る。其以後の作には、彼の考案を描き出すのに老練した跡が見へるか、どれも、其の劇の象徴に、何か物質的の對象物、又は事件、即ち、作の機械的の分子が加味されて來た。この對象物は、初から舞臺に登り、多少劇の組立に密接な關係をもつて働かされてゐる、そして最後に出てくる時は、クライマックスだ。このクライマックスから幕に至る迄互に入り組んだ關係になつて居る。

——機譯——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舞臺の上で一番困つたこと

松井すま子談

舞臺の上で一番困りましたのが二幕目の踊の時の髪の仕掛けて、御座いました、狂人の様に踊りくるつて居る間にだん〳〵髪がほぐれて肩へ下ると云ふのでしたが、それがどうしてもうまく行きませんでした。早くほぐれ過ぎたり、しまいまてほぐれなかつたり、私はもうタランテラを踊りながら泣きたい様な心もちでした。それからもう一ッ、三幕目のヘルマーの外套を手早く身につける處ですが、此のマントは、ヘルマーが夜會の歸へりに着て來たのを、此の部屋は暑いと云ふのでぬいて椅子に掛けておくのですが、此のおく時によほど注意して下さらないと、裏表とも黒ですから、どこが襟だか裾だかわからなくなつて、大まごつきにまごつきます。それから直ぐ肩掛を頭から覆ぶるのですが、此度つかひましたのは羽二重だつたものですから、少し緩くむすびますと、いろ〳〵して居るうちに、滑り落ちまして、皆首へ巻きついてしまひますし、かたくしめますと、ヘルマーが其の肩掛けをぬいておしまいとひつたくる様にぬがせる處が、なか〳〵脱げません。一番終りの日などは、どうしたはずみにかかたく結びましたら、幸に滑り落ちはしませんでしたが、ヘルマーが取る時、大まごつきでとう〳〵かた〳〵の耳輪まで取つてしまひました。こんな風で、毎日此所がうまく行きませんでした。舞臺稽古の日とも八日間一日もうまくいつた日が御座いませんでし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。それから一番終りの日でした。ノラとヘルマーの對決以後になつてノラはもう出て行く仕度にかゝりますと、ヘルマーが「手紙をやつてはいけないかとか送るものがあるとか、必要の場合には助けなければならないとか、いゝます時に、ノラはいけません／＼見ず知らずの他人からはどんな物でももらひませんと、いゝます時、平土間のあたりで驚いたねといつた方がありました、私も驚きました。けれど後になつて皆様からのお話をうかゞひますと、ノラが自覺して強い冷かな女になつた時、驚いた方は少なくない様でした、そしてヘルマーがノラにむかつて「どんな重荷が來ても背負て立つてやるとか」又は「ねえノラ私いつもそう思ふが、何かお前の身の上に非常な危險がふりかゝつてそれを私がすくう爲に身體も生命も有とあらゆるものを擲て見たらどうだらう」なんて口ぐせの様にいつて、ノラを愛して居た其の人が、クログスタットの手紙を見ると直ぐに、もうさもにく／＼しそうに悪口したり、詰たりそして、しまひには親の悪口まで始めた時、又クログスタットの詫状を見て自分は助すかつたと夢中になつて喜び、手の裏をかへす様にノラにやさしくなり、其の罪をゆるす／＼といつた時、なぜ驚かなかつたかしらと思ひました、けれどこれは今までの習慣で、ヘルマーの様な夫をもつた時でも、女はぢつとこらへてつらひ顔一つせずに、どこまでも男の犠牲になつて居るのか女の美徳として居るのですから、ヘルマーが私は助すかつた／＼と喜こんだのを見た時に思はず冷笑した人でも、ノラの自覺したのを見て、まあなんと云ふ女でせうと云ふのが、世間普通の人の仰しやる言葉だらうと思ひます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『人形の家』に似た戯曲

無名氏

イプセンの『人形の家』によく似た脚本が一つフランスにある。而も『人形の家』よりは九年前に發表されたものだ。題は『反抗』作者はフランスのデカダン派の詩人リール・アダムで、千八百七十年に公にされた。

『人形の家』と『反抗』とは非常によく似て居る。三幕と一幕の相違こそあれ、その取扱つて居る問題には、二作とも殆んど同じである。『人形の家』の女主人公ノラも、『反抗』の女主人公エリサベスも、共に夫に反抗してホームを捨て、夫を捨て、小供を捨てゝ、より多く生甲斐のある世界を夢みつゝ家を出て行く。二人とも自分に對する義務と云ふ事を同じ論法で主張して居る。一方は夫の常識主義に對し、一方は夫の物質主義に對して。

だがノラの方は家を出たまゝ歸つて來ないけれど、エリサベスの方はぢきに戻つて來る、そこがちがふ。ノラと同じくエリサベスも家を出たには出たが、外の寒さと暗さと心細さにはか弱い女の身の堪へ得べくもない。怖ろしくなつて、彼女は數時間の後に途中から引き返して來る。いかに脱れやうとしても、最早のがれる事の出來ぬまでに夫の心の錆が自分の心にも沁み込んで居るのに初めて氣がつく。矢張夫と小供の中に居て、なるまゝになつて行くより外に仕方がないと思ふ。煩悶の果てに打倒れて居る夫の側へ來て、さまざまの思に悩んで居るうちに、いつとなく冷たい曙が來る。突然めざめた夫は妻の姿を認めて、馬鹿々

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

々しい顔付で「わたしはお前をゆるすよ。たしかに最う二度とお前は出てなんか行くまい。ねえ、お前、私は少しもお前から受けた苦痛を後悔はしないよ。好い敎訓だつた。此の喧嘩のお蔭でお前と云ふものが、今迄よりも一層私には必要だと云ふ事が解つた。お前が私の家の會計係でばかりでなくて、妻だと云ふ事がよく解つた。それから又世の中に馬鹿々々しい空想と云ふ事のある限り、品位のある者は安全でばかり居られないと云ふ事も好く解つた」

エリサベスはおだやかな笑顔で

「そして半月分の勘定をしなければならぬ際に、私が貴方を捨てやうとしたと思ふと、何だかそれが常識的ではなかつたんですわね」

夫はすつかり悦に入つて、

「さうとも〳〵。その言葉を聞いて私も安心した。お前はすつかりもとのお前になつたんだ。さァ手を出しなさい、仲直りをしやうよ。かう云ふ樂しい現實に比べると、夢なんか何でもありやしない。詩がどうしたと云ふんだ。ヘッ。そんなものはみんな狂氣沙汰さ」

こんな案配で夫は上機嫌で妻の手を握つたり、接吻したりする。そして「俺だつてさう鬱的な人間でもないんだよ」などゝ云ふ。妻も初めのうちは一寸嬉しさうな顏をしたが、又してもだん〳〵と沈み込んで來る。夫はそんな事には少しも氣がつかない。

「氣の毒な人!」

これが妻の再後に呟いた言葉であつた。

『人形の家』でリンデン夫人のクログスタ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ッドに對する關係で暗示されて居るやうな、冷たい男女關係が、つまり『反抗』の女主人公エリザベスの最後の運命なのだ。こゝにも後のノラの或る一面が想像される。

アーサー・シモンズ氏はリール・アダムの此の作を許して、貴族的なイプゼンの俤があると云つて居る。イプゼンの作よりはずつと拙いが、イプゼンの作よりはずつと美しい作だと云つて居る。

『人形の家』を讀んだり觀たりした人は、此の作を是非一度讀んで見る必要があると思ふ。

—完—

この間の帝劇の「人形の家」ほど失望したものはない。始めから終まで舞臺と自分とがとうと一つにならずに仕舞つた。どうかして舞臺の上に注意を染めやうと可成り努力したのだけれど。

今お芝居を見て居るのだ。お芝居を見せつけられて居るのだと云ふ感じが邪魔つけにも付き纏つて來るのでいやになつて仕舞つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人形の家

バーナード、ショウ

布教的戯曲としての「社會の柱」は、不幸にして其の主人公が裁判上の言葉で云へば詐欺的僞善者だといふので、けなされて作者が描出した階級の人達から社會の模範的支柱として受取られない。そこで、イプゼンは今度はよく此の點を斟酌して、一般の理想家の道義的立脚地から非難を受ける餘地がないやうにした。彼の有名な「人形の家」に於ては其社會の柱即中心人物は、人形妻を所有し、模範的の夫であり、父であり、一市民である。彼の些やかな家族は、可愛らしい三人の子供と、情の細やかな妻とて、互の仲の睦じさは他に見られぬ程、其のスイートホーム、女らしい婦人、並に幸福な家庭の生活は、凡て所謂理想家の夢を描出してゐる。ヘルマー夫人ノラは斯ふいふ空想を遺憾なく實現して居ると信じて居る。即ち彼女は、理想的の妻であり、母であり、夫ヘルマーは同じく理想的の夫で、一度び必要が起つた曉には一身を犠牲に供しても、妻の名譽を救つて呉れるものと思ひ込んでゐる。然るに、只僅かな出來事は、斯う云ふ迷を解くに充分手答へがあつた。最初ノラが、夫ヘルマーに盡した一つの事は、夫が酷く健康を害した時であつた。夫の體軀を恢復させるには是非とも旅行をさせねばならぬ破目になつて、秘密に其の旅費の調達をしたのである。若し夫に此の事を打ち明ければ、忽ち其の健康を一層害するのは必定、其處で、父から金を貰つた事に装（つくろ）つたのである。實は高利の金を借りや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うとしたのだが、高利貸は、父の署名の手形がなくては渡さぬと云ふ。折悪しく父は死にかゝつて居た際のことゝて、迚も其んな相談は六ケしい。止むを得ず、一時脱れの考へて、先方の望み通り、父の名を僞署した。勿論高利貸もこの手段を氣付かぬ譯ではなかつたけれ共、僞りの證文が、却つて多くの場合確かな返濟を得る事を承知して居た。其後ノラは、夫に内證で、寫し物などをして、借金の大部分を支拂つた。丁度此頃、ヘルマーは、雇はれて居る銀行の支配人に累進した。高利貸は、其銀行の自分の位置を保つ爲め、ノラに、以前の贋證文を見せて、強迫し、ノラの盡力を賴んだ。ノラは、彼を心から嫌つて居たから、たとへ、父の名を僞はつて記した處で、返濟さへすれば別段差閊へはない、と拒んだ上、斯樣な事情を少しも酌まぬ法律が果して正しいのであらうかと罵り返し、向ふの申出をキッパリ撥ねつけた。然し後に、其の高利貸も以前、自分と同じ罪を犯した爲、夫が非常に悪んで居ると知れたので、今迄の得意は、忽ち地に落ち、同時に、夫と共に住んで居る家庭以外の世界、卽ち、夫の携はつて居る社會の嚴重な事柄に驚かされた。夫から、商務上の不正を働く者は、一般に、其の母の悪感化迄も思ひ及ぼされると聞いて、今迄、子供等と戲れたり、小ざつぱりした着物を着せる世話や、其他、色々な慰み事をする丈では、彼等を眞に敎育する任に當るべき適當な母となる事は出來ないと悟つて來る、證文を取返す爲めにノラは自分達家族が友達としてゐる人から借りやうと決心した。彼女が夫に何か賴み度い時に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は、其の愛情に訴へて、媚びさへすれば、即ち種々の無邪氣な戯れに事寄せて、夫の心をすつかり虜にしてしまへば必ず望みが叶へると知つて居た。で、其の友達にも、多少心には抵抗しながらも我れ知らず深い考へなしに此手段を應用した、すると、思ひがけなくも、其の人から愛の切ない眞情を、打ち明かされた。斯様なもつれた事情から、遂に今迄専問にして居た家庭といふものゝ眞相が見へるやうになつた。彼女が自己に對して抱いて居たあらゆる幻影は、今や悉く破壊されて、無智蒙昧な一婦人、危險な母、唯、夫の快樂の爲めのみに生きて居る妻である自からを悟つた。が、猶も、夫に對する妄想ともいふべき、一縷の望にはすがつて居た。即ち、ノラは、夫が、なほ、自分の破滅を救つて呉れる爲めには、如何なる犠牲をも、敢て拒まない、理想的の夫であると思ひ込んでゐる。とは云へ、彼女は、自分の名譽を保つために、夫が其の罪名を引き受けて、爲に其位置を失ふよりは、寧ろ自分の身を殺した方がましだといふ固い決心を持つてゐる。然るに、最後の覺醒の時期は遂に來た。ヘルマーは豫期の理想的な行動をとらなかつたばかりか、僞りの署名の罪を聞いた時、普通人の自然に到着する、怒りに走つて、自分の名譽を踏み付けたといつて罵つた。そこでノラは今迄の家庭の生活は、丸で、芝居のやうなもの、家庭は、單に人形の家で、其の中の家族達は、理想的の夫、父、妻、母の役を演じて居たのに過ぎぬと初めて心付く。で、即時、夫に別れ、自分自ら事物の眞相を究め、毛頭虚僞でない職業を求め、夫と自分

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐる。

とか、これ迄のやうな、立場からでなく、互に、もつと尊敬を拂はれる關係となり、また、彼女が子供を教育する資格を得る事か出來る迄、斷じて、再び逢ふまひと云つて立ち去る。初め、ヘルマーは、事の意味が分らず、ノラには、もはや無意味となつた事柄だのに、以前の樣な感じを與へられると思つて、色々な甘言を續々と浴びせかける。自分丈で世に最も幸福と思つてゐるやうな、前途をも示さうと努める。詰り、ノラが家に留まつて、今抱いて居る厭はしい考を一切放棄し、夫に對し、子に對し、宗教に對する義務を果せと頻りに勸めるのだ。けれども、今やあらゆる假面の魔力は消滅して、遂に彼は事件の眞相をも了解し、只獨り坐つて、二人の間に、もつと尊とい關係が出來て來やうかどうかと思ひ惑つて

一切の差別を超越して、元始の天地に我が本性のまゝに生活すべし。されどこは容易のわざに非ず。幸に女性は相對の見に、差別の相に迷はさるゝこと男性よりも少きが如し。

—らいてう—

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社の人々

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

◎青鞜も始めてお正月を迎へることになりました。皆さん青鞜と共に來らむとする多望な年を御祝ひ下さい。昨年は思ふことばかり多くて成すことが誠に少な御座いました。けれど私共は種々な新しい經驗を得、困難に逢ふごとに元氣を增して、ともかくも出來るだけのことはしたと云ふことで、意に滿たないことの多い現在に堪へやうと思ひます。

◎この幼い青鞜は現在に生きるものではありません。私共は氣を長くして、この青鞜をして將來何事かをなさしめたいと考へて居ます。

◎「人形の家」の批評を皆さんが眞面目になさつたことは誠にうれしい。婦人自覺の曙光、婦人問題の發足點とも云ふべきこの「人形の家」の批評を新年號に掲載することの出來たのはめでたいことゝ喜んで居ます。

◎「人形の家」に關する皆さんの原稿を總て掲載ずることの出來なかつたのは殘念でした。それは頁數の都合と同一の意見感想の重複するのを恐れてでした。新年號を讀んだ後に今一度御集りの時感想を言ひ合つて見たら面白いでせう。

◎岡田八千代氏の「人形の家」の劇評を掲載する筈でしたがメ切に間に合はなかつたのは誠に殘念でした。

◎新年號は印刷所の方から非常に急がせられた爲、俄にメ切を操上げて、皆さんに濟みませんでした。止むを得ず電報で御驚かせするやうなことまでして。

◎「人形の家」に關して相馬御風先生や中村春雨先生の御好意にあづかつたことは同人の感謝する處で御座います。

◎今度は正月の問題として矢張りイプセンの「幽靈」を撰びました。御讀みになつて置いて下さい。其他にも飜譯は近く森鷗外先生のが單行本で出ました。飜譯はあるやうです。いづれ其等研究書目などゝ一緒に御通知します。今は少し手廻り兼れますから。

右原稿メ切二月五日

◎研究會並びに青鞜に關する御希望や御要求は御遠慮なく御申越下さい。研究會は近い中に始めます。

◎毎土曜日午後を面會日と定めましたから本社へ御話に御出下さい。

◎本社は目下可成りに貧乏して居ます。多少に關らず皆さんの御寄附を歡迎いたします。

◎社員は毎月十五日迄に社費金參拾錢を御忘れなく御納め下さい。

◎社員の方々は隨時原稿を本社宛御送り下さい。原稿は十行、二十字詰の事。

◎與謝野品子氏は麹町區中六番町十番地に御轉居なさい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ました。

◎國木田治子氏は赤坂田町七丁目一の御私宅にて毎月一六の夜、松月古流生花挿入花、及千家裘元藤庵打瀨翁補助の下に御指南せらるゝ由。

◎去る十二月九日、本郷區蓬萊町萬年山に在京社員の有志が集まりました。こゝに掲載した寫眞は其折撮影したものです。

◎新に入社せられし方は

江木　榮　神田區淡路町

尾竹一重　大阪南區笠屋町五一

河野千歳　府下青山原宿一六七、林方

◎前號掲載長谷川時雨氏の自由劇場の二夜中猿之助の畫家ブラウンも不出來であつたとあるは出來であつたの誤、活字の誤故此處に正誤す。

本號責任者

中野　初

平塚　明

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本郷區駒込林町九番地物集方に置く。

第四條　本社は社員賛助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に賛同したる女流文學者將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす。本社の目的に賛同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす。

第六條　本社の目的を達する爲め左の事業をなす。

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び賛助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし。

二、毎月一回社員の修養及び研究會を開くこと但し賛助員の出席隨意たるべし。

三、毎年一回大會を開くこと大會には賛助員客員を招待し講話を請ふことあるべし。

四、時に旅行を催すこと。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月納附すべし。社費は毎月會並に大會の費用と社員、賛助員、客員への雜誌青鞜寄贈費とに當るものとす。

第八條　雜誌「青鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、賛助員、客員其他の寄附による。

第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。

第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。

第十一條　係員は社員の選擧によるものとす

第十二條　係員は再選することを得。

豫告

ポオ散文詩集

青鞜社同人譯

青鞜社出版

寄贈書目

邪宗門　北原白秋著

流れ　小澤久雄著

雜誌

三田文學（十二月號）　三田文學會

春夏秋冬（十二月號）　籾山書店

紅塔（十二月號）　紅塔社

婦人の鏡（十二月號）　婦人社

道案内　道案内出版社

スバル（十二月號）　昴發行所

女子文壇（十二月號）　女子文壇社

白樺（十二月號）　洛陽堂

歌舞伎（十二月號）　臺報社

朱欒（十二月號）　東雲堂

東洋時論（十二月號）　東洋經濟新報社

層雲（十二月號）　層雲社

臺灣愛國婦人（三十七號）　臺灣愛國婦人社

劇と詩（第十五號）　劇と詩社

保險評論　其社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一册金貳拾五錢――郵税壹錢五厘――
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢
（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
○廣告料（一頁）拾五圓（半頁）八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金（東京口座一一六〇）に拂込まれたし
○郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）
○本號に限り特價金卅五錢 郵税金貳錢

禁轉載

明治四十四年十二月二十五日印刷納本
明治四十五年一月一日發行

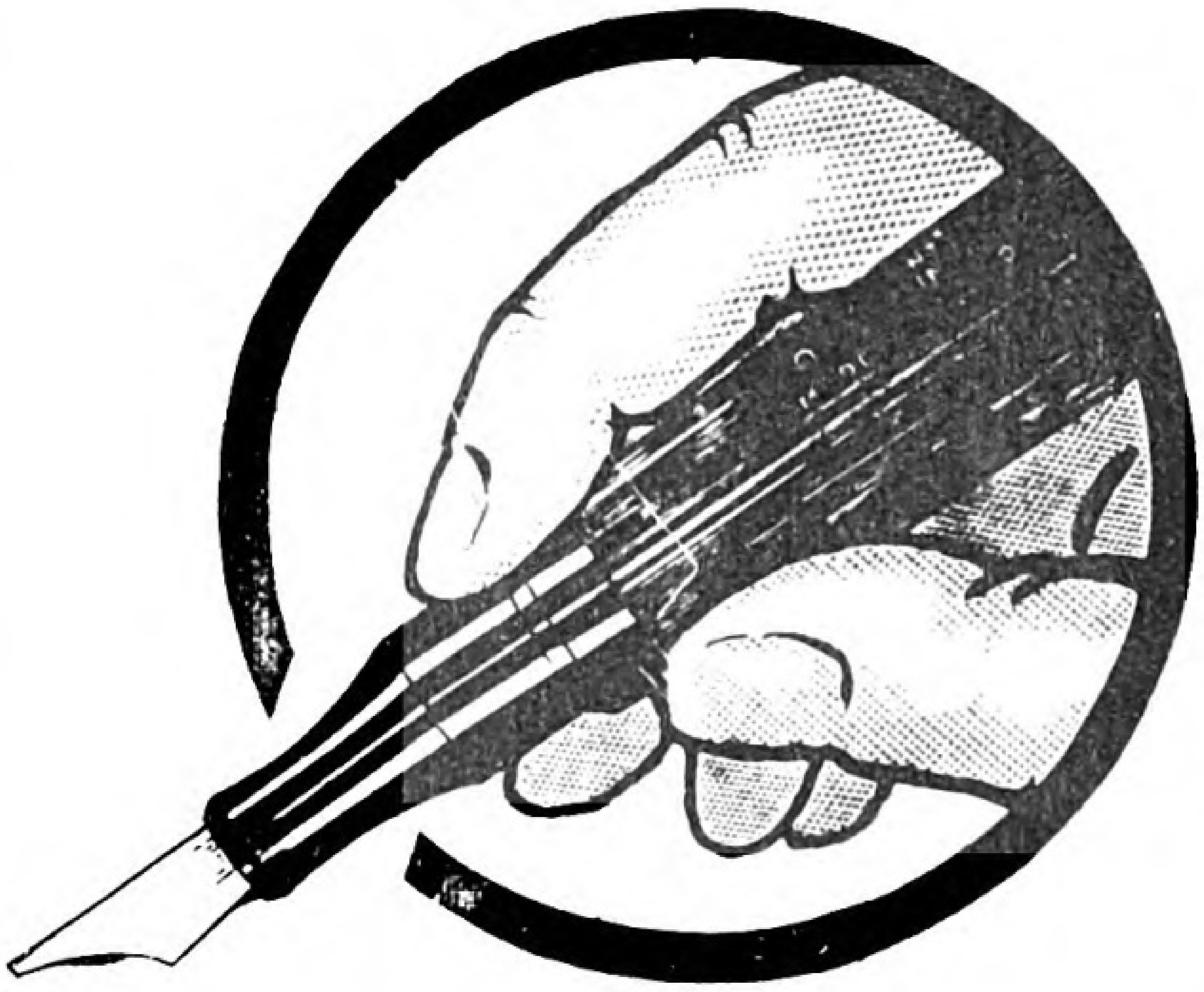
編輯兼發行人　東京市本郷區駒込林町九番地 青鞜社內　中野初
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社
（電話下谷三七七六）
振替東京口座一一六〇番

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局（二二四）（三三一八）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

樂しき新年を迎ふると同時に之を確と有益に過ごすの覺悟肝要なり現代に無くて成らぬ萬年筆を持たぬ人々に此覺悟を實行し得らるゝやは疑問なり況して今年をば去年よりもヨリ善く過ごさんと思はゞ是非とも丸善特賣の萬年筆を求むることを忘れ給ふな



オノト萬年筆

飾無きものは金六圓以上
飾有るものは金七圓以上

オリオン萬年筆

十四金ペン金二圓八拾錢
同(金鍍金飾付)金三圓廿五錢

丸善株式會社

東京日本橋通
大阪心齋橋筋
京都三條通

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新年の御慶目出度申納候

即席そば料理

菊そば

其他御好みに應ず

春は花見に
夏は朝顔
大瀧ありて納涼によし

四季の草花を陳列し御高覽に供す

秋は菊見に
冬は雪見に
四季共によろし

梅壽樓
團子坂中腹

菊そば本店
電下三八五七番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最良髮油

みやけ油

登錄商標

家庭重寶

專賣特許一一二九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇 振替口座八七五一番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子文壇

▶一月一日發刊 （第八年第一號） 新年特別號 定價三拾錢 送料二錢五厘◀

◉貴婦人論……幸田露伴、内藤鳴雪、松浦政泰、宮崎湖處子、服部博士夫人、遠山稻子、日向きむ子

●自分の文學的生活……與謝野晶子

●新年と花……文學博士 姉崎嘲風

●文藝問題……早稻田大學講師 島村抱月

●女性の姙孕力……田中祐吉

●歩きぶりの内輪と外輪……澤田順次郎

●我邦婦人の最大美點……菊地幽芳

▲正宗白鳥（平和）

▲中村吉藏（同窓會）

▲田村俊子（紫色の唇）

▲森鷗外（驅落）

●壁畫の話……澤村文學士

●光源氏の一生……外島浪之助

●彌生の誕生……河井醉茗

●詩人と結婚する勿れ……引佐細江

●歡喜……横瀨夜雨

●磁器國の記憶……竹久夢二

●王妃と薔薇……森川葵村

●耳袋……猿丸太夫

●開覺一口淨瑠璃一覽表

●私の顔……今井邦子、神近市子、加藤筆子、早川花子、木村あやの、伊藤きみ子、江森美子、平塚白百合

●新年の巷……長曾我部菊子

●終の夢……はやぶさ

●若き自然……江森美子

●一人の價値……太田喜志子

●京都の町……廣江曉子

●小説……佐藤增子

●空飛ぶ鳥……夕やみ

●若き婦人の感想 文十數篇

●誌友欄 小説、自然、人事、評論、和歌、詩、俳句、初作等

▲口繪 本誌二倍大の原色名畫及石版彩色 夢二氏の畫、寫眞 光澤紙刷十二頁の美觀

▶東京市京橋大鋸町十一 女子文壇社出版 （振替口座東京第七九壹弐番） 賣捌各地書店◀

謹賀新年

九段

長谷川寫眞館

九段中坂上角（電話番町一二四五番）

弊館改築工竣成諸般の設備充實を告げ候へば鋭意優良精美なる寫眞を調製致し且つ業務上正確に御便宜相圖り從來の御眷顧に酬ひ度存候間倍舊御用命の程偏に奉希上候　敬具

村井弦齋著　増補註釋　食道樂　全一冊　春の卷　夏の卷　秋の卷　冬の卷（合本）　定價金二圓　郵税金八十錢

村井弦齋著　増補註釋　食道樂　續篇　春の卷　夏の卷　秋の卷　冬の卷　全四冊　各卷定價八十錢　郵税十二錢

村井弦齋著　増補訂正　臺所重寶記　全一冊　定價金一圓　郵税金十二錢

赤堀松吉　赤堀峰吉　赤堀菊子共著　家庭應用　洋食五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵税金十二錢

赤堀吉松　赤堀峰吉　赤堀菊子共著　家庭應用　惣菜五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵税金十二錢

故久保田米僊著　同息米齋、金僊畫　年中惣菜　全一冊　定價金八十錢　郵税金十二錢

故久保田米僊選　毎日の惣菜案内　全一冊　定價金十錢　郵税金二錢

故久保田米僊著　同息米齋、金僊畫　茶の湯の心得　附茶席料理　全一冊　定價金八十錢　郵税金六錢

赤堀吉松閲　奥村繁次郎著　名物諸國料理　全一冊　定價金四十錢　郵税金六錢

發行所　東京市銀座大通新橋際　振替貯金東京二〇〇番　新橋堂書店

一月一日發行

スバル

價 卅五錢
郵税二錢五厘

壹月號

暮れがた……戲曲……久保田萬太郎
北の林……戲曲……中谷德太郎
大葉子……戲曲……長谷川時雨
小三金五郎……戲曲……長谷川虎太郎

表紙畫……藤島武二

作者

森鷗外……霧中（小説）
平野萬里……雨（小説）
與謝野晶子……そののち（小説）
茅野雅子……力（小説）

詩數篇……北原白秋
哀秋十章……茅野蕭々
松の内……清水一路
暗黒……山木飛坪
譯詩數篇……出野青畑
評論……生田長江
かきつばた……佐藤春夫
からすむぎ……江南文三
椋鳥通信……無名氏
裏繪……M K生

東京神田北神保町二番
昴發行所
電話本局四二六四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今朝春の小鎚な出たり四方の人　存義

俳味

新年號

元日の空氣……（巻頭語）村上静人
俳句と云ふもの……森鷗外
私解芭蕉の發句（七）……沼波瓊音
江戸の春……岡野知十
福引……饗庭篁村
梵雲庵の玩具棚……淡島寒月

雙六……村上静人
芭蕉に妾ありき……沼波瓊音
おらゝが國の春……福原雨六
七種……小峰大羽
初芝居……福島甲羽
帝劇の五斗……田中塵外

要目

蒲生君平の發句……梅澤和軒
謠初……塚本清彦
彈初め……仲の町某妓
初結……田村西男
嫁が君……草化房
三つ物賣……伊藤松宇

素人の見たる俳人……寺澤陽風
我を啓發せしめたる句……（懸賞文章）
通り雲……レモン法師
口繪（たゝかれ初め）……（式亭三馬筆）

附録

惟然坊句集（完）……晤庵秋擧

每月一日一回發行

定價
一部　金拾貳錢
郵税　壹錢
半年分前金
郵税共　金六拾八錢
一年分前金
郵税共　壹圓參拾貳錢

發行所
東京市本郷西片町拾番地
俳味社
振替口座東京參四參四番

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百三十九號（一月一日發行）

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊二圓八十錢

試みとしての日本のオペラ……坪内逍遙

劇壇雜感……島村抱月
永久的人情……高安月郊
舊派新派の將來……山崎紫紅
四十四年の芝居……正宗白鳥
思出多き川上君……關根默庵
歌右衛門について……角田八枝子
六十一年前の歌舞伎……幸堂得知
松本幸四郎丈と語る……鈴木春浦
市村座と明治座を觀て……長谷川時雨

戲曲 僧院（フエルハアレン作）……森鷗外譯

「人形の家」の後幕……響庭篁村
公演餘談……いま生
評判の女優……森曉江
出鱈目噺談……瀨戸閣太郎
芝居未來記……一記者
十二月中の脚本……川村花菱
エレン、テリーのポーシア……森ほのほ
昨年の懷古……伊原青々園
劇談會―劇壇時事と劇界一覽―明治四十四年度索引

市川流隈取繪卷（色摺口繪）
七代目團十郎自筆
八代目團十郎序文

本鄉區湯島切通坂町出報社內
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八一〇六

演劇雑誌

元旦發行

シバヰ

創刊號

舞踊劇　陶四郎
畜入と「金毛狐」　いゝき生
「人形の家」、脚本と舞臺　甲鳥
菊五郎の「實盛」吉右衛門の「馬盥」　赤城下生

玉菊　河野ゆづる
伯爵令孃（ストリンドベルグ）　島村民藏
方角　吉村繁俊
蜜柑の皮　中谷德太郎

新しき家から　秋川雨雀
新史劇論　本間久雄
「劇五篇」の印象　島村民藏
柳家小さん論　楠山正雄

第四の壁　無是公
羽左衛門の目（小品）　二丁生
小唄　長谷川時雨
Via Siberia（海外通信）M.T.
バレー、ルス　甲鳥
◎新作梗概◎四十四年の劇界◎劇界時事

毎月一回一日發行

定價二十五錢

郵税一錢

東京牛込區西五軒町四十一番地
シバヰ發行所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■實際の役に立つ家庭の新雜誌■

新女學

四六倍判 一月元日發行 第壹號 廿八錢 郵税二錢五厘 半年前金郵税共一圓六十八錢 一年前金郵税三圓二十四錢

■至尊の還暦と勤儉の御趣意　栗原廣太郎

至尊兩陛下の御眞影
初日の出 三色版刷
子の日の松 極彩色石版 梶田半古畫
訪問服の裾模様 着色石版
富嶽の圖編物圖案
少女(ペン畫) 石版刷
君が代(習字手本) 小野鵞堂
鳳凰の圖 寫眞版
東伏見宮妃殿下
松上の鶴 寫眞版
三輪田眞佐子女史 伊澤峯子女子と椎野繁子女史●北島リリアン孃と愛子ベクさん親子と其子Sさん●伊地知中將の家庭と小さき母●歐洲産の有袋鼠●姉と妹と弟
附録御題 松上鶴 石版着色組立狀差
東京最良形縫目なしの形紙 足袋各種

◎日の出の教訓……理學博士 一戸直藏
◎女子の虚榮と日本の美風……松村介石
○THE JAPANESE AND THE FROEIGN HOUSEリ、アン嬢
◎婦人向きの雜誌に就ての希望……伊藤弘一
◎御〻内寳……嘉悦孝子
◎私が巴里で最も感じたこと……伊澤峯子
◎隱れたる才媛……錦泉女史
◎ネヅミの話……理學博士 石川千代松
◎福壽草……東京理科大學囑託 牧野富太郎
◎家庭衛生講話 家庭と衛生、口をあけて寢る小供……ドクトル 富士川游

■現代の女子に要求する事項　中島力藏　下田次郎

◎作文といふことについて……山中甲子
◎訪問服の裾模様と紋を採繡する方法……長谷川岩吉
◎テップ(平紐)にて飾編を施したる手提袋の拵へかた……平木平八
◎旅行用カラー入の拵へ方◎ホワイトシャツの拵へ方
◎初春の室内裝飾法◎小説人の妻……堀内新泉
◎正月の御料理……金風樓主人
◎カラーカフスホワイトシャツの家庭洗濯……清水澄子
◎子の歲に於ける迷信……喜村櫻閣
◎鳴雪内藤先生を訪ふ◎茶の式を見た時の私の感じ
◎羽子の起源 流行の種々◎懸賞募集(和歌俳句)

■元日の覺悟と婦德の修養　大隈重信

毎月一回一日發行

■發行所 東京日本橋角 大倉書店 電話本局四一四▲二〇四四四 振替貯金東京二三八 賣捌全國各書店■

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一月一日發行

アララギ

本號特價金二十五錢

第五卷（新年號）第一號

牡蠣（飜譯小説）……………………な、た、
大河端の夜（小品）……………………古泉千樫
童馬漫筆……………………水上守曉
歌壇の現狀を論ず……………………アラ、ギ同人
人に問はれて（歌論）……………………伊藤左千夫
ヘルメノフの言葉（評論）……………………阿部次郎
北郷村の強奪（小説）……………………木下杢太郎
京都のこと、その女のこと（小説）……………………中村憲吉

短歌

伊藤左千夫　石原純
長塚節　土屋文明
森田義郎　岡千里
柿乃村人　淺野梨郷
齋藤茂吉　古泉千樫

定價半年分前金八十五錢　一年分一圓六十錢（税共）

本所區茅場町三丁目十八番地　東京根岸短歌會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ザムボア

朱欒

純文藝雜誌

四十五年一月一日發行
第貳年第一號

本號に限り一冊
金四十錢
送費二錢

新年號執筆者

茅野蕭々氏　長田秀雄氏
小川未明氏　內田魯庵氏
小山內薫氏　上田敏氏
太田水穗氏　阿部次郎氏
萱野二十一氏　齋藤與里氏
片上伸氏　木下杢太郎氏
蒲原有明氏　北原白秋氏
與謝野晶子夫人　三木露風氏
吉井勇氏　柴田流星氏

繪
表紙　ZAMBOA（高村光太郎氏）
扉繪　道陸神の首（木下杢太郎氏）

發行所　東京市京橋區南傳馬町（振替東京五六一四）　東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十五年 新年號 一月一日發行

月刊 文藝雜誌

定價一部郵稅共廿二錢 半年分一圓廿錢 一年分二圓卌錢

「有機的」と精神科學 文學博士 桑木嚴翼

鎌倉時代の女流政治家 文學博士 三浦周行

佛典の本文批評について 文學博士 松本文三郎

繪畫と其內容 文學士 深田康算

バラアド 文學博士 上田敏

オイスラー氏の畫論を評す 文學士 植田壽藏

支那最近の國粹主義 文學博士 狩野直喜

埃及に於ける希臘殖民地 文學士 濱田耕作

光 文學博士 谷本富

窣都語の回鶻碑文 文學士 羽田亨

謀反 一宮榮

DIE WEIBER 文學士 成瀨無極

ラザロ 竹友藻風

沈鐘の傳說 文學博士 新村出

發行所 東京小石川原町六 振替東京一三五三 電話番町二六〇八 鷄聲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新婦人叢書

第一篇 長谷川時雨女史著

日本美人傳

花の如き美人によりて、花の如き美人の遺事を傳へたるものにて、美人より見たる美人觀なり女史の彩筆によりて傳ふる所の名媛百二十一名、洗練の筆致は巧くみに縱横の月旦をなし、古美人を彷彿の間に見るを得せしむ、

袖珍型クロース表紙
定價 金四拾錢
郵税 四錢

第二篇 小島文子女史著

現代男性觀

我新婦人と共に、突如として現はれたる怪美人小島文子女子は何人ぞ、揣摩臆測を逞しうする人の多くは、濫りに疑ひて、知名なる某閨秀作家の僞名となし、其甚だしきは皮肉なる男性が婦人の名を借る者となす、其孰れが當れるか、二つながら當らざるかは、今說くを要ひず、犀利魔の如き現代男性觀は、如何に現代の男性をして完膚なからしむるか、開卷先づ挑むでいふ『謹んで此書を凡ての男性の前に捧ぐ』と。

袖珍型クロース表紙
定價 金四拾錢
郵税 四錢

第三篇 名媛日記 太平野虹氏著 新刊

第四篇 閨秀作家文粹 佐藤紫仙氏著 近刊

第五篇 日本艶女傳 兒玉花外氏著 近刊

第六篇 日本烈女傳 尾島菊子女史著 近刊

第七篇 現代女性觀 藤野愛子女史著 近刊

第八篇 日本美男傳 田村露英女史著 近刊

第九篇 文章の栞 岡田八千代女史著 近刊

新婦人叢書體裁 袖珍型●用紙白菱
クロース表紙箔捺●二百餘頁●箱入

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 電話下谷四〇七九番 電話下谷一六七二番 聚精堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十六卷　一月號　第一號

祭日（クルケ）　森鷗外
夜長（小說）　長谷川時雨
太安萬侶朝臣と塙保己一と　上田萬年
古歌の名所　芳賀矢一
櫃の葉　新村出
小泉八雲先生　小花清泉
秋萩帖の考　彌富濱雄
萬葉集講義　佐佐木信綱
橘守部傳　橘純一
受話器（長詩）　小林愛雄
車櫂　石榑千亦
こゝろ　新井洸太郎
ふと　橘糸重子
潛めるもの　片山廣子

定價一部三十錢●半年前金七十五錢●一年前金…一圓四十錢●
東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替口座東京四三〇〇番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文壇稀有の傑作！

是れ具眼者の一致せる讃辭なり

徳田秋聲氏作

小說 黴

袖珍型特製 ▼定價四拾八錢
總洋布美本 ▼郵送料金四錢

秋聲氏が從來の諸作は此『黴』の一篇を完成せんが爲の準備であつたと云はれる作で實に氏が第一の傑作である。眞に藝術を味はんとする人、現時文壇の代表作を見んとする人は本篇に就かねばならぬ。深刻なる觀察と精到なる描寫と、そこに展開せられたる暗鬱なる人生の縮圖は、まさに本篇の遺憾なく示す所である。

ニイチェ著 森鷗外氏序 生田長江氏譯

ツァラトゥストラ

初版賣切 訂正再版

特製天金最美本
定價貳圓參拾錢
小包料金拾貳錢

近代思想の結晶 譯文の様式森嚴莊重を以て終始し其間溌溂たる清新の趣を加へて此種の神品を傳ふるに最も適へり出版界近來の好收穫と推奬するに憚らず

東京麴町區飯田町三丁目二十五番地 新潮社 電話番町二二二三番 振替東京一七四二三番

昭和43年9月15日発行　【第2回配本】

青鞜 第2巻（第1分冊）

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
V.2
no.1

University of Colorado at Boulder

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新年の御慶目出度申納候

随て初春の御召料として新しき流行の品々は弊店雑誌（よそほひ）御一覧の上御注文願上奉り候

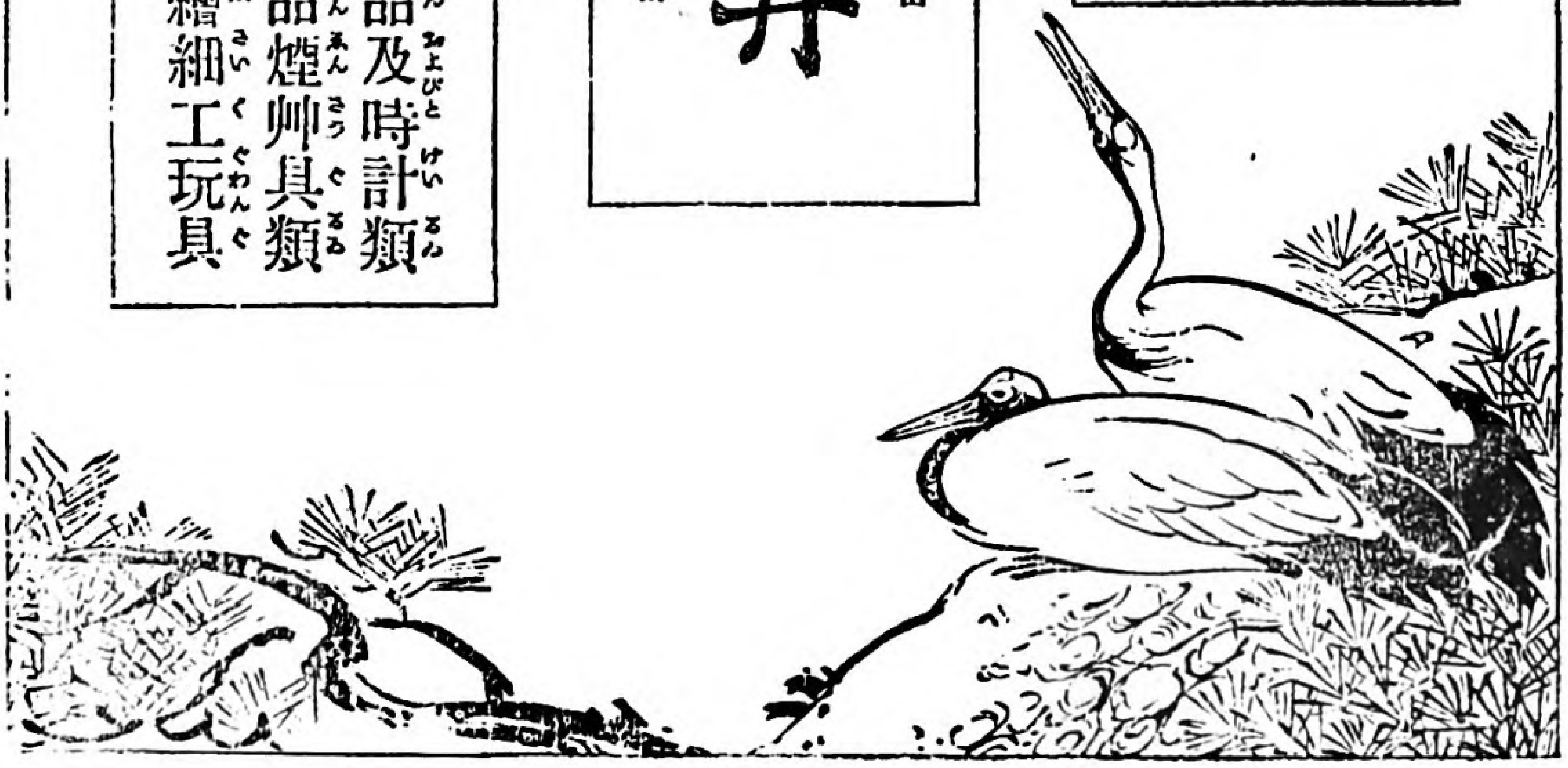
東京京橋
南傳馬町

大西白牡丹

振替口座東京九二九三番
電話京橋三十番三十一番

大西白牡丹
商品の種類

金剛石眞珠珊瑚珠類　金銀製作品及時計類
鼈甲蒔繪髮飾品一斑　袋物携帯品煙艸具類
内外化粧品道具　雛人形押繪細工玩具



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER